

松の緑の其の風情で、東京にも名の聞えた、某公園の松の中に、此の優しい美しい夫人の邸がある。ト同じ公園で、姿の可い、振の可い、千年百年を経る松が、周囲に多い處から、寫眞に撮つた繪端書の種々な、どれにも其の館の其處此處が、鬱蒼とした木の下蔭に偲ばれる。……雨の中を、後姿で行く婦の、蛇の目の傘の下に、蔓の高い屋根が見えたり、雪に養着てゐんだ男の袖摺れに、外塀が見えなどする……其のいづれもが松の中に。

さてある中に、あからさまに寫眞に寫つて、廂の上なる枝に懸つて、玄關の屋根へ出窓のやうに成つた二階の硝子障子の、二三枚見えるのがある。窓越に植木が並んで、はら／＼と松の露が墨色に滲んだ状に、影を濃く葉をかさねたのは、夫人が寵愛のベコニヤで、咲いた花は分らぬが、森にも白く、颯と光線の射した棧に映つて、むら／＼と其の色が佛立つ。此の硝子を奥へ透して、同じ二階の裏窓の外も、雲のやうに蹙鬱く松の葉、角ある虎、翼ある龍で……ベコニヤの其の影も、金蒔繪の蝙蝠見るやう。

隙さへあれば、

「ベコちゃん、ベコちゃん。」

と云つて、葉を撫でたり、花を覗いたり、鉢を置替へたりして、引籠つてばかり、外出嫌ひな人であるから、——これから其の事を爰に記す——當日此の公園に於て開かれた、有志婦人會と云ふの集會の光景を、二階の窓から差覗いて居た、とあるのが、矢張りベコニヤの鉢の中に立つて居たのに相違ない。

其處へ、仲働風のが来て、

「奥様。」

「あ、喜乃かい。」

とまだ外を視めて居る。

喜乃は丸髻を俯向けながら、小褌を一寸引合はせて、其の階子段の取着きの、廊下から一段低くなる出張りの床に用意した、上草履を足袋に穿いて、ベコニヤの鉢の間をちよこちよここと縫つて背後へ寄つた、が、夫人が灌いだ水だらけなのに、爪立足で、

「もし、奥様。」

「喜乃、まあ御覽な。」



と云ふ。夫人は、ふさ／＼とある髪を無雑作な櫛巻で、細面のきり、とした、鼻の如何にも美しいのが、縦縞の藍と紺の銘仙の不斷着に、紺地へ白ですら／＼と細い雨縞のお召の羽織を引掛けた、襟も袖もきちんとしたが、病上りかと思ふまで、華奢に痩せた滑かな膚を這つて、撫肩すつと、褌もする／＼引くばかり。衣紋も何となく寛やかに、何處に乳があるか胸も薄ければ、すらりと高い背も小柄に見える。帯は男ものかと思ふ幅の狭いのを、胸高く、何時も貝口風に結び放し……お儀式の時は兎に角、縞珍の丸帯などは柳に掛ける純帳で、霞でなくては、堪へられまい、其の腰の細い事。

片手に大きな如露を提げつつ、屋根の上へ差出た枝の、松の葉を抓むやうに、白い指を縦棧に、鬢より高く掛けて居た。

「大變な人出ぢやないか。あら、内の垣根の處まで、……袴々詰寄せたと云ふ形ね。旗を御覽な、松から松へ、まるで一面の虹だ事！ 水色地に桔梗と云ふのが見えないばかりよ。……あれ、鯨波の聲ぢやないか、わあ／＼云つて、此處に居ても逆上るはねえ。」

と物柔らかな目を睨みながら、吻と云ふ呼吸をした、爾時喜乃を見返つた。目の眶、耳許の薄紅に、色の白いのが尙ほ目立つ。――

青い雨、碧の波の、果り重る松の緑に、打沈めても沈めても、ともすれば、梢にぽつと立騰る、

人群集の埃を餘所に、梢深き雲の中にイんだ夫人の姿は、仙家の鶴の趣があつた。  
仲働が小さな名刺を。

二

「此の方が、お目に懸りたいとおつしやいます。」

と据ゑて出す。……其の金の縁の、キラリとするのを受取りながら、

「旦那様はお留守ぢやないか。」

「否、奥様にお逢ひ遊ばしたのでございますつて、」

「然う、私に、」とうつかりしたやうに言ひながら、島山波子とあるのを見て、一寸眉をひそめたが、

「お一人かい。」

「はあ、」と目を動かして答へたのは、取次いだ名刺の客を、夫人が悦ばない色があるのに、喜乃は安からず思つたのである。

「婦人會の大将、――一騎打の勝負においでだね。」

と莞爾して、其の名刺を、手も撓げに懐中へ入れようとして、フト猶豫ひつつ、帯の間に軽く



挟んで、

「喜乃、」

「は、」

「お通し申して、」

身動きの棲を綺麗に、白い手を蓮葉に上げて、横の壁につけた棚に、水瓶、柄杓、洋鐵の罐、粉薬の大きな壺など、ベコニヤの化粧の室めく……姿見も掛けてあり——これにも窓越しの松の枝、今丁ど萌黄、黄色、紅、色々の旗が風に翻々と揺れつつ映る——其の一方の柱の釘へ、カチリと如露の口を掛けて、斜に姿見の裡の旗を見た。

「どれ、白旗でも捧げませうかね。」

いや、一騎打だの、勝負だの、言はるゝ意は分らぬが、客は大手に迫詰める、夫人はお物見に悠々たりで、取次に大分の手間。喜乃はもの急ぎをした體で、廊下へトンと一段上つて、階子を小走りにつか〜と下りた。

夫人は俯向いて、藤色の襟に頤をつけて俯目に覗く、……其の衣紋の合せ目に、鼻紙にしては些とうたがはしい、白い端がちらりとあつた。半分引出すと、其は寫真で……

「お孝さん、……一所においでなさいな。ハイカラさんよ、此處での貴婦人と云ふ方を見せませ

うね、」

と小兒でもあやす風に、打傾いて優しく云ふ。其の時、忘れたやうに片手を垂れて、片手の指先で壓へて居た、寫真の端を、密と押して、

「黙つていらつしやい。」と、紅絹の燃え立つ衣の裏へ、長襦袢の友染透く、膚の霞に忍ばせた。

瞳を返して活々と、袖にも裾にも、肩のあたり、棚にも載せたベコニヤの鉢を見て、

「あゝ、皆、おとなしくして居るんですよ。——でも火花が揚ると騒ぐんだもの。不可いわ！窓へ出たり、木登りをしたり悪戯をするんぢやありません。可いかい。」

と莞爾々々しながら、鉢の中をばた〜と上草履の素足で抜ける。床の濡色に葉が映る、緑の影がちら〜と搦んで、爪尖は雪のやう。

雲に響いて火花が揚つた。

それ、言はぬ事ではない。いや、手におへぬ腕白ども。今窘められたばかりなのに、ゆら〜と動揺を造つて、あの、しやくんだ額で、ベツカッコをするのもあれば、顔を長くしたのもある……もさ〜と這出しさうに動くのもあれば、背の伸びた癖に我一倍、渦巻いて突立つ奴。羊のやうな蒼い面で、ベツを搔いて見せたのもある。ト花はどれも葉がくれつつ、揃つてクツ〜と紅く笑つた。



途端に夫人が階子の口へ、肩を沈めて、此方を振向く。

ト寂然する。

其處に足がまだあるやうに、上草履が床に残つて、櫛巻が欄干をはづれた。

「急ぎますから一寸。失禮、此方から。」

と鷹揚に、しかし氣を輕う、其處に手を支いて、恚うお通り遊ばせと正面を開いて跪居る、當家の仲働に會釋して、いきなり、玄關わきの枝折戸を衝と壓して、常盤樹の落葉はらくとある庭前へ、空氣草履で貴なる婦人。

三

此の日の婦人會の副會長、當地に隨一の貴婦人とあるのが、よくせきの事なればこそ、自から迎ひに出向いたのに……名刺を見たら龍宮の奥からなりと、驅出して出もすべきを、玄關に立たせて、手間入れつ、と云ふ意趣もありや！——

急ぐ、と云ふので、枝折戸から庭前へ降つて湧いたやうな不意のお入り。喜乃が驚いて、ばたばた引込んで、正直に邸の内を二間三間開閉して、此の縁側へ廻つた時は、最うすつきりとした

形で、縁に腰を掛けて待つて居た。お太鼓の帯の結び目高く、白襟で、紋着なれば羽織なし。金色の三ツ櫛孔雀の如く、赫耀たる装也。

で、喜乃が膝を支いた時、波子は美しい協明の處で、黄金時計を、ばちんと見た。……尤も此とて頸長く、生際の濃い美人である。

平にお入り、と扱ふが、矢張り急ぐと、斷り切るので、是非なく其處へ友禪の座蒲團を直した處へ、ベコニヤの母様、當館の夫人が、今まで抱着いてでも遊んで居て、一寸座を立つて復返つたものの如く、繕はない、隔てのない風采をして、すぐに障子の敷居から縁へ掛けて、所體構はず、崩れたやうに膝を支いたが、備はつた、優容さは、羽織の雨緋の細い袖が、しつとりと落ちて物靜か。

松風も聞えたり。

公園の林の中を、廣くも取らぬ圍の外、板塀の腰を透いて、其處に淺葱のふきの太い、薄べらな小紋縮緬、蕎麥切色と云ふ、すんぐりした膝を、くわつとはだけた唐縮緬で、地に敷いた大きな紋ある、萌黄の風呂敷の上へ伸して、あらう事か、竹皮包みの握飯を引握んで掻食ふ、……圖抜け大一番と云ふ圓鬘の陣笠首が、且つ、むしろりながら、且つ塀腰から覗き上げる。——殊勝とも、さて悲惨なとも、襟の其の何やら、徽章さへ、つい鼻の前に見ゆる淺間な庭も、其の松の



風、何となく、寛の音も響くか、と夫人の姿は、縁に奥深な氣勢であつた。

まつすぐに、両手を前へ、ひれ伏すやうに、櫛巻を指に着けて、

「これは、入らつしやいまし、」

「は、」

と胸を捻ぢて横を向いた。席をば拂ふが如くに、膝の上へ開いて掛けた、薄紅の手巾をじつと握る手に、汗もするよと見えたのが、其の謹ましやかな挨拶を、じろりと一目。するくと、手巾も解けて莞爾して、手を力なく横ざまに、帯を迂らして、縁に支いて、

「御不沙汰いたしましたのね。」

此處で應對をしたと云ふ。此の縁側の處も、……向うに廻縁の長い、御殿風な廊下を見渡したなり寫眞に映つた繪端書の、其も一枚ある。

が、尤も夫人の家構を、恚うして坊間に響ぐのではない。此の公園の名木の一ツに數へて、由緒は知らぬが、ト先づ釣合ひを見計らふと凡そ五抱六抱はあらう、老松の見事な幹に注連を張つたのが、縁前に、やがて障子を六七枚、連なる二座敷が半を蔽うて、屋根の上まで小枝一ツ打たないのがある、ベコニヤの葉を透して、雲の簇がる影は、千早振る此の松の縁であらう。然う言へば、傘さしたのも、蓑着たのも、雨に雪にイんだ人の姿は、どれも皆、是なる梢を視めるらし

い。

丁ど二人の居た處が、其の位置を計ると、ベコニヤの二階の出窓を、左へはづれた處に當る。

更めて言ふまでもなく、波子は、婦人會に列すべく、當家の強ひてもとて、長刀小脇に搔込んだりで、一騎打に取つて組む意氣込みで來たのであつた。

が、結び髪を見ても、はじめから出ぬつもりで居たのは分る。あんなに手紙で懇に招待さして置きながら、と有志でも慈善でも、國家の爲めでも、髪から婦は心着いて、一度和らいた氣も苛つ。——前刻から、いや病氣だの、何の彼のと、種々な遁げを張る——見た處、一枚着替へて敷居を跨げない容子ではない。敷居も愚かで、些と廣い庭を、其こそ石燈籠見に出ると思へば、會場は宛然築山の上にあると云つても可いものを……と、其の氣で氣色ばんでからなのであるから、例の白旗で、唯もう此方は平あやまりなるにも係はらず、言葉た、かひ、や、半時！

四

「唯今——奥様、何うもお留守番をおさせ申しまして済みません。」

と人ごみに逆上させた色で、喜乃は莞爾やかな顔を上げた。

「お瀧さんはまだ歸りませんのでございますか、私もまあ可氣なものですけれど……あの人も。」



と言ふ。山家の在から奉公に来て居る、其の瀧なる飯炊は、婦人會の花火の音で、氣も宙天に上つた様子だったので、夫人が正午前から出して遣つたのが、彼これ三時さがりに成つて、後の鴈が慍うして戻つたのに、攫はれたやうに歸らぬのである。

「早かつたわね、まだゆつくりで可かつたんですよ。」

夫人は、あの廊下を、母屋から橋一ツ渡り越す……離座敷の四疊半に、松影の、晝の月かと見る閑靜な丸窓の許に、小机に向つて居たのが振返つた。唯見ると、何故か目が濡んで、聲も常ならす曇つて居た。

が、少い女の、人の酔に耳も赤く、顔も汗ばんだ喜乃は、目が近霞の茫として、何の氣も着かぬらしく、

「否、遅くなりましてごさいます、奥様」と敷居の内へ、むつくとした膝を入れる。

「あゝ、おもしろかつたかい。」

「唯、否、別に面白い事もございませんけれど、大變な人でございしますの。而して、あの今しがた、前刻お見えになりました、奥様と喧嘩をなさいました、あの方が、何なんでございしますよ。」

「何うしたの、」

と物靜に……夫人は何か疲れた體で、其の机に袖を凭たすと、手にした鉢が膝へ落ちて、ころ

ころと鈴が鳴つた。

「喧嘩なんかしやしないよ、お前人聞きが悪い事。」

「貴女がなさりはしません、先方の方でございします。……何うの、慍うのツて理窟を云つて極込むやうに突懸つて来るんですもの、お茶のお給仕に出ました時なぞ、立身あがりになつて居て……私は熟と顔を見詰めて遣りました、眞個に憎らうございましたよ。」

「だつて極めつけもしようぢやないか。此方が悪いんだもの。向う様は眞劍なのに——病氣が申譯に立たないと成ると、ペコちゃん寂しがります。ペコニヤはお前、草花でせう。——植木が寂しがる何のつて、馬鹿にして居ると思ふんだわ。人のために、慈善の會に出ろツて迎に來た人だものね……」

漸と眞個の事を云ふかと思へば、東京から、私が姉妹のやうにして居るお友達、七八年ぶりで遙々、こんな日本の果の國まで逢ひに来てくれました。其が、今朝着いたばかり。と最う……旅馴れない、氣の弱い、心細い人ですから、來なり早々、留守をさしては氣の毒です、と然う言つたとお思ひ。

お前も聞いて居たんだわね。

島山の奥さんが、お友達……其はまあお珍らしい、嘸ぞあなたと學校も同じにお出なさいま



した方でせう。……東京から、と承れば願うてもない事です。……御出席下されば、會の光榮でございます。是非御一所に、と云ふんだもの。——私困ツちやつた。」

とあどけないもの言ひをして、緊つた口許を一寸ゆがめて、打微笑み、

「何ういたしましたして、婦人會へ出られさうな方ぢやないんですよ。……黒縹子の帯も、胸に狭う疊まつて、襟眞も出ないばかり、味噌漉を提げないまでの姿で居ますから——

否、何うして奥さん、……貴女のお目なんて掛れますものですかッて……然う言つたらさ。私の様子が様子だから、先方様も意地になつて、是非御紹介を、一寸でも是非と言ふもの。

(はい)

と云つて、私……」

「え、奥様。」

(はい)と貴女、お可愛らしい、お嬢様のやうなお聲でおつしやいましてすねえ。……私、あの、失禮とは存じましたけれど、お縁先でのお話でございますし、其に、喧嘩を遊ばしたら、いきなりあの方を突飛ばして遣らうと存じまして、障子の蔭に見て居りましたの。」

五

「あんな事を言つて、喜乃、何、可愛らしいものかね、お前お辭儀だつて、先方様の御意見が、頭の上を通越すためにするんだもの、……飛んだお嬢さん。」

而して、懷中から、あの寫眞を出して、

と言ふ、其の寫眞は、こゝに丸窓の縁に霞む明りをうけて、机の上に置かれたのである。

其を、熟と、懐かしさうに又見ながら、

「此處に參つて居りますッて、言つたんだもの。」

東京からだの、遙々だの、留守をさしちや悪いのと、眞面目に私が言つたんでせう……又私眞面目なんだけれど、——ベロちゃんとは違つてお友達だつて言ふんだから、眞個にお客が來なすつたとばかり思つて居る處へ、寫眞だもの。島山の奥さんだつて、そりや怒るわ!

又顔色が變つた處へ、

(こんな服装でも出席が出來ませうか)つて私、言つて遣つた。

(失禮な、何の會だと思ひです。白襟、紋着でなくつては會場へは入れません。何です?失敬な。)

卷 櫛 とツンと立つて、ぶん／＼怒つて、袂を拂つて、と云ふのはあれよ。……塀の穴から、透見をして居た、目かづらのやうな婦人會連の顔が吃驚して引込んだわね。まあ、



と投げたやうに笑ひながら、心着いた體で、鉄を拾つて、何をするのか一鉄、色よき切へふつりと入れる。机の上は、普賢櫻の葉ながら花が亂れ敷いた風情に、絹と縮緬が細に散つて、絲卷の上へ筆のさやで、覺束なさうに、そくひを煉りかけたのが交つて見える。……前刻から廣い邸に、一人で留守居の徒然に、千代紙の切抜か、押繪でもするらしい様子なのが、今、切つた切の寸法を、ト菱形に、鶴を折る手つきで、撓めて見て、

「而して、あの方が何うかおしなのかい、喜乃。」

喜乃は讀めない顔をして、机の上を覗いて居たが、恚う呼ばれて、少し退つて、

「はい、あの何でございます……會の式場ツて申しますんでございますか、天幕だの段々の幕だの張詰めました、真中の高い、——あの青々と木の葉で包んで、紅白の薔薇で、大きく婦人會と飾りつけがしてございます。——其の高い臺の上へお乗んなすつて、懷中から、何か、紙へ書いたものをお出しに成つて、恚う、あの、御上使御入りつてた形で、お讀みなさいましたんでございます。」

私どもは、遠くから拜見したのでございますが、立つておいでなさいます、お頭の上は、今日の蒼空でございませう。……それに、あの、些とお天氣模様が變りさうな處でございませうもので、鼠色の雲だの、眞黒なものもむらくと、そしてあの、日がはつと當りますので、皆松

林の色が照返して、空へ映つて、雲が艶々と光ります。——下には矢張り、同じやうな美しい蝙蝠傘が充滿で。それが、殿方の海鼠の形の帽子に交つて、驟雨の前の海見たやうに、どよんで動くのでございます。

あの、奥様が、然うやつてお讀みなさいましたのを、そろ／＼と巻き返して、おたゝみに成ります拍子に、火花が揚つて、まあ！何處で放しましたんでございませう……白い鳩が十五六羽、五色の旗を脚へましたのが、輪を造つて、空を舞ひましてございますの。」

と一息に言ひ續ける。

「然う。」

と靜に、細く割つた筆のさやで、そくひを取つて切につけて、

「それから、太神樂がはじまつたんだわね。テトトロ、テトトロツて遠くで音がする、雨氣を持つたやうに……一寸、曇りはしなくつて、」

と手元も暗し、丸窓を衝と開けると、青い明が沈んで入つた。而して、床柱が光つたが、別に外を見るでもなしに、も一つカチリと鉄を入れて、花片のやうに切一枚。

「面白さうな音だわね。」

「奥様、何を遊ばします。」と此の時フト見つけた喜乃は、色が變つて聲が震へた。



……前刻、あ、はおつしやつても、……戸外の賑かさに誘はれて、つい忍んでも出て見る氣におなりなすつたのであらうと思ふ……ために尙ほ自分の歸りの遅かつたのを恐縮した。……其處にお召更へが一揃。……

六

衣桁を迂つて落ちたやうに、……あれ、媚めかしい裏を翻して、縞お召に紋の小袖、水色地へ常夏が亂れ咲の友禪の長襦袢。眞夏も涼しさうなのが、春の色濃やかに、緑の煙る薫を籠めて、火桶は置かぬ夫人の袂に、亂れ掛つたのを喜乃は見たが、

其の何と、長襦袢の處々が、うたかたの水の泡、金砂子、銀砂子に、蝶も螢も留つたやうに、鉄で切つたあとがついて……寫眞に押繪の薄彩色。……別に一絞り、藤色の半襟も机の上に切細裂いたのが、同じ寫眞の衣紋を飾つて、片袖は小袖も通る……夫人が今手にする切は、呀、縞お召の其の脊筋を、切つて取つた切ではないか!

「奥様、何を遊ばします。」

と追返して言つた時は、調子も亂れて、片手支く肩も震へた。

「何だねえ、大袈裟に、何も喫驚する事はないんだよ。」

と莞爾したが、差俯向いて、密と其の切を寫眞の袖へ、軽く小指で壓しながら、

「此の人に、着せるんだわ。」

と向直ると、又鉄を構へて、件の小袖をすりと引くのを、浮膝に手を舉げて、喜乃は思はず此方へ控へた、其の片袖を戦く手に、……ト心あつて、動くやうに、縞縮緬は揺いだのである。

「まあ、奥様、あなた。」

「喜乃。」

と懐かしく、優しい聲で、

「此の着物はね、……お前たちにも、別に話はしなかつたけれどもね、私が、此のね、寫眞の人に送つたの。一度送つたのを、折返して、すぐに小包で返して来て、眞に心にかけて下さつて嬉しいけれど、……お身體がお弱いのを心配して居る身には、何か、おかたみにもなるやうで、心細い。……返すのではありません。いつまでも御一緒に居ると思つて、……私の手許に預つて置くやうにつて、口上がきが入つて居た。其のふみの入つた下に、丁度、あの、此の長襦袢の袖の端へ、しつけを取つた其の絲で、かう、——と御自分の名が縫つてあつたの。」

卷 櫛  
一昨年をとしの今時分いまじぶんよ。……私わたしはね、此この方かたとは、其その前まえの年としの霜月しもつき頃ころに、一度逢あつたばかりなの。  
お前まえたちも知しつてるわね、私わたしが何時いつでも讀よんで居ゐる本ほんがあるわ、……矢張やばりね、あ、言いふもの



をお書きに成る方の、此は奥さんなんです。

私は其の御主人が眞眞でね、……一度逢ひたい逢ひたい、と思ひながら、まあ、殿方と女だから、遠慮をして居る内に、家で東京を引拂つて、此地へ来る事に成つたんだよ。

然うすりや間に海があるし、又いつ逢へるかも知れない、と思つたから、主人に頼んで、可いと云ふから、……其の頃はね、病氣で、ソレ此處等でも、新派の芝居だとよく舞臺に出る、……あの大磯と云ふ海岸へ、……出養生と云ふけれど、行つて見る、と……然う云つちや悪いけれど、其はお察し申すやうな、——百姓家の一室を借りたお暮しの。

御主人は床に就いて居なすつた。

結び髪で前垂掛の此の奥さんと、二人づれで、海岸へ行つたつげが、最う冬近で海が荒いから、紫色の凄い巖と、唯眞白な浪を見ながら、砂山を歩行いたの。……誰も、漁師も居なかつた。唯二人で、寂しく残つて薄色な、觸ると消えさうな常夏の花と、紺青とも縁青とも海の夕日も蒼く映る、おくれ咲の龍膽と、一つは露に櫻貝、一つは霜に東海夫人にもなりさうな、草を摘んでね、……それを土産に歸つたわ!

分れる時は夜だつた。汽車の窓へ手を掛けると、月があつた、其の影には、指に簞めた、指環より、常夏が霜に輝いたんだよ……

寒い時候で、よく保つてね、氷の中へかこつたやうに、其の常夏と龍膽は、此地へ来てからもまだ活々として居た事……

と、もの懐かしげに恍惚と、夫人は四邊を見ながら言つた。

「土地が性に合はぬかして、此地へ来てから煩ひ通し。……一しきりは半年あまりも、一日おきに熱が出て、つい氣不性で、ね、月に二三度は缺かさない、たよりをしなかつたお詫かた、拵へて送つたんです。

然う言つて返して来たのを、預つて置いたんだからね、……今朝、丁度、漸とねだつた寫眞が来たし……何も、あの人の言ふ事ぐらゐに、拗ねるも、曲るもないけれど、一寸着せて見たくなつたもの……御覽な、薄手な方だから、銀杏返によく肖合ふ、其の常夏から思ひついた、水色地の縮緬へ、朱鷺色の模様がよく配合る……野暮な私の見立ては何う?

妹のやうに可愛いが、年紀は此の方が姉さんよ。何處に身體があるんです、——苦勞をするから瘦せたわねえ。」

と忘れたやうに小袖を落して、熟と見詰めた長襦袢は、ト嬾々と背を細く、夫人の膝にうつむけに乗りぬ。

卷 櫛  
「あゝ、一度、一緒に寝て見たい。」



と掛けた羽織の黒いのも、縁に映る松の窓に、白くかゝつて颯と、雨。

「あれ、お寫眞が濡れます。」

と最う納得した喜乃は、慌しく障子をしめた。一際色添ふ長襦袢の、其常夏は咲いたやう……  
恚う云ふ時は、ベニコヤの葉が活きて、童のやうに立戦ぐ……

戸外の騒動は、俄雨に、夥しい婦人連が、色の蜘蛛に驅廻る。

當家の堀際、門の前でも、いや、羽織を脱ぐ、簪を抜く、帯を解くやら、締めるやら、手拭を被ると見ると、裾をくるりの、背中へ風呂敷。

雨は次第に風も添へば、堪りかねたものと見えて、黄なる禪引だしの、切髪の厭味な後家、現代にこれを未亡人と名づくる、婦人會には招牌の有志家を眞前に、どや／＼と當邸へ雨宿りに雪崩込む。門の際へ、背後を突抜け、衝と立つたのは島山夫人で。

もつれ髪の濡れたのが、ひた／＼と頬にかゝつて、唇も燃ゆる意氣烈しく、

「此家へ入つちや不可ません、不可いんですよ、不可いんですよ。皆様、後で言ひます、濡れて下さい、後生だから濡れて下さい、入らないで下さいよ。」

と高くかざして居た深張の薄お納戸の蝙蝠傘を、引絞つて故と窄めた、黒髪に風を孕み、紅玉

の面を雫に洗つて、下棲亂れた裾模様の、松の下の細流に、する／＼と引くのも厭はず、燃立つ蹴出しの緋縮緬。爪先に血を流すまで、決意を示して支へたが、聞かばこそ、留まらばこそ、さあ、恚うなると、何の貴婦人も、慈善の雨より、曠着の袖で。

玄關下はまだな事、木戸を突開け、庭から濡縁。やがて總勢五六十人、無斷で座敷へ流れ込むのを、のび上つて熟と見つつ、毛筋を頬に引詰めて、唇に噛んだと思ふと、蝙蝠傘を芝に投げて、門の柱にはたと凭れて、俯向いた目に衝と涙……

錦の帯も人波に揉まれた餘残に、する／＼と、激の中に解けて居た。

あゝ、此の人も美しい。



朱日記



「小使、小ウ使」

程もあらせず、……廊下を急いで、尤も授業中の遠慮、靜に教員控所の板戸の前へ敷居越に髻面……と云ふが頤頰などに貯へたわけではない。不精で剃刀を當てないから、むじやくとして黒い。胡麻鹽頭で、眉の迫つた澁色の眞正面を出したのは、苦蟲と渾名の古物、但し人の好い漢である。

「へい。」

と唯云つたばかり、素氣なく口を引結んで、眞直に立つて居る。

「お、源助か。」

其の職員室眞中の大卓子、向側の椅子に凭つた先生は、縞の布子、小倉の袴、羽織は袖に白墨摺のあるのを背後の壁に遣放しに更紗の裏を振つてぶらり。髪の薄い天窓を眞俯向けにして、土瓶やら、茶碗やら、解かけた風呂敷包、混雜に職員のが散ばつたが、其の控へた前だけ整然とし

て、硯箱を右手へ引附け、一冊覺書らしいのを熟と視て居たのが、拔上つた額の廣い、鼻のすつと隆い、髻の無い、頤の細い、眉のくつきりした顔を上げた、雜所と云ふ教頭心得。何か落着かぬ色で、

「此方へ入れ。」

と胸を張つて袴の膝へ丁と手を置く。

意味ありげな體なり。茶碗を洗へ、土瓶に湯を注せ、では無ささうな處から、小使も其の氣構で、卓子の角へ進んで、太い眉をもじやくと動かしながら、

「御用で？」

「何は、三右衛門は。」と聞いた。

此は背の拔群に高い、年紀は源助より大分少いが、仔細も無からう、けれども發心をしたやうに頭髮をすつべりと剃附けた青道心の、何時も莞爾々々とした滑稽けた男で、矢張り學校に居る、最う一人の小使である。

「同役(と何時も云ふ、土の果か、仲間の上りらしい。)は番でござりまして、唯今水瓶へ水を汲込んで居りまするが。」

「水を汲込んで、水瓶へ……む、此の風で。」



と云ふ。閉込んだ硝子窓がびりりと鳴つて、青空へ灰汁を湛へて、上から揺つて沸立たせるやうな凄まじい風が吹く。

其の窓を見向いた片頬に、颯と砂埃を捲く影がさして、雑所は眉を擡めた。

「此の風が、……何か、風……が烈しいから火の用心か。」

と唐突に妙な事を言出した。が、成程、聞く方も其の風なれば、然まで不思議とは思はぬ。

「否、豫てお諭しでもござりますし、不断十分に注意はしますが、差當り、火の用心と申すではござりませぬ。……やがて、」

はござりませぬ。……やがて、」

と例の澁い顔で、横手の柱に掛つたボン／＼時計を睨むやうにじろり。ト十一時……丁ど半。

——小使の心持では、時間が最う些と経つて居さうに思つたので、止まつては居らぬか、とさて

瞻めたもので。——風に紛れて針の音が全く聞えぬ。

然う言へば、全校の二階、下階、何の教場からも、聲一つ、咳半分響いて來ぬ、一日中、また

此の正午に成る一時間ほど、寂寞とするのは無い。——其は小兒たちが一心不亂、目まじろぎも

せずにお辨當の時を待構へて、無駄な足踏みもせぬからで。静なほど、組々の、一人の聲も澄

渡つて手に取るやうだし、廣い職員室の此の時計のカチ／＼などは、居ながら小使部屋でもよく

聞えるのが例の處を、ト瞻めても針はソツとも響かぬ。羅馬數字も風の硝子窓のぶる／＼と震ふ

のに釣られて、波を揺つて見える。が、分銅だけは、調子を違へず、とうん／＼と打つ——時計は止まつたのではない。

「最う、これ午餉に成りますので、生徒方が湯を呑みに、どや／＼と見えます。湯は沸らせましたが——いや、何の小兒衆も性急で、湯かし切つてござつて、突然がぶりと喫りますので、氣を着けて進ませぬと、直きに火傷を。」

「火傷を……ふむ。」

と長い顔を傾ける。

二

「同役とも申合はせませぬ事。」

と對向ひの、可なり年配の其の先生さへ少く見えるくらゐ、老實な語。

「加減をして、うめて進ませます。其の貴方様、水をフト失念いたしましたから、精々と汲込んで居りますが、何か、別して三右衛門にお使でもござりますか、手前ではお間には合ひ兼ね……」

と言懸けるのを、遮つて、傾けたま、頭を掉つた。



「いや、三右衛門でなくつて丁ど可いのだ、あれは剽軽だからな。……源助、實は年上のお前を見掛けて、些と話があるかな。」

出方が出方で、源助は一倍まじりとする。  
先生も少し極つて、

「最つと此方へ寄らんかい。」

と椅子をかたり。卓子の隅を座取つて、身體を斜に、袴をゆらりと踏開いて腰を落しつける。

其の前へ、小使はもつそり進む。

「卓子の向う前でも、砂埃に掠れるやうで、話がよく分らん、喋舌るのに骨が折れる。えゝん。」  
と咳をする下から、煙草を填めて、吸口をト頬へ當てて、

「酷い風だな。」

「はい、屋根も憂慮はれまする……此の二三年と申したうござりまするが、何うでござりませうぞ。五月も半ば、と申すに、北風の恠う烈しい事は、十年以來にも、つひぞ覚えませぬ。幾干雪國でも、貴下様、最うこれ布子から單衣と飛びまする處を、今日あたりは何ういたして、また襦衣に股引などを貴下様、下女の宿下り見まするやうに、古葛籠を引覆しますやうな事でござりまして、一寸戸外へ出て御覽じませ。鼻も耳も吹切られさうで、何とも凌ぎ切れませんではござ

りますまいか。

三右衛門なども、鼻の尖を眞赤に致して、えらい猿田彦にござります。はゝ。」

と變哲もない愛想笑。が、然う云ふ源助の鼻も赤し、これは如何な事、雜所先生の小鼻のあたりも紅が染む。

「實際、嚴いな。」

と卓子の上へ、煙管を持つたま、長く露出しに火鉢へ翳した、鼠色の襦衣の腕を、先生ぶるぶると震はすと、齒をくひしばつて、引立てるやうにぐいと擡げて、床板へ火鉢をどさり。で、足を踏張り、兩腰をついと扱いて、

「御免を被れ、行儀も作法も云つちや居られん、遠慮は不沙汰だ。源助、當れ。」

「はい、同役とも相談をいたしましたして、昨日にも塞がうと思ひました、部屋（と溜の事を云ふ）の爐に又嚙りつきますやうな次第にござります。」と中腰に成つて、鐵火箸で炭を開けて、五徳を摺つて引傾がつた銅の大藥罐の肌を、毛深い手の甲で無手と撫でる。

「一杯沸つたのを注しませうで、——廳てお辨當でござりませう。貴下様組は、此の時間御休憩で？」

「源助、其の事だ。」



「はい。」

と獅嚙面を後へ引込めて目を据ゑる。

雑所は前のめりに俯向いて、一服吸つた後を、口でふつくと吹落して、雁首を取つて返して、吸殻を丁寧な灰に突込み、

「閉込んで置いて風が揺つて、吸殻一つも吹飛ばしさうで成らん。危いよ、こんな日は。」

と又一つ灰を浴せた。瞳を返して、壁の黒い、廊下を視め、

「可い鹽梅に、其方からは吹通さんな。」

「でも、貴方様まるで野原でござります。お兒達の歩いた跡は、平一面の足跡でござりまするが。」

「む、まるで野原……」

と陰気な顔をして、伸上つて透かしながら、

「源助、時に、何、今小兒を一人、少し都合があつて、お前達の何だ、小使溜へ遣つたつげが、

何は、……部屋に居るか。」

「居りまするで、悄乎としましてな。はい、……あの、嬢ちゃん坊ちゃんのことござりませう、

部屋に居りまするでござりますよ。」

三

「嬢ちゃん坊ちゃん。」

と先生は一寸口の裡で繰返したが、直ぐに其の意味を知つて頷いた。今年九歳に成る、校内第一の綺麗な少年、濱宮浪吉と云つて、名まで優しい。色の白い、髪ので美しいので、源助はじめ、

嬢ちゃん坊ちゃん、と呼ぶのであらう？……

「悄乎して居る。小使溜に。」

「時ならぬ時分に、部屋へ茫乎と入つて来て、お腹が痛むのかと言つて聞いたでござりますが、雑所先生が小使溜へ行つて居るやうに仰有つたとばかりで、悄れ返つて居りまする。はてな、他のものなら珍らしいござりませぬ。此の兒に限つて、悪戯をして、課業中、席から追出されるやうな事はあるまいが、何うしたものぢや。……寒いで、まあ、當りなさいと、爐の縁へ坐らせまして、手前も胡坐を搔いて、火をほじりく、仔細を聞きましても、何も言はずに、恍惚したやうに鬱込みまして、あの可愛げに掻合せた美しい襟に、白う、其のふつくらとした頸を附着けて、頻りと其の懐中を覗込みますのを、じろく見ますと、淺葱の襦袢が開けまするまで、艶々露も垂れるげな、紅を溶いて玉にしたやうなものを、溢れまするほど、な、貴方様。」



「む、然う。」

と考へるやうにして、雑所はまた頷く。

「手前、御存じの少々近視眼で。其へ恠う、霞が掛りました工合に、薄い綺麗な紙に包んで持つて居るのを、何か干菓子でもあらうかと存じました處。」

「茱萸だ。」と云つて雑所は居直る。話が此所へ運ぶのを待構へた體であつた。

「で、ござりまするな。目覚める木の實で、いや、小兒が夢中に成るのも道理でござります。」と感心した様子に源助は云ふのであつた。

青梅も未だ苦い頃、やがて、李でも色づかぬ中は、實際毒と聞けば、小蕪のやうに干乾びた青い葉を束ねて賣る、黄色な實だ、と思つて居る、恠うした雪國では、蒼空の下に、白い日で暖く蒸す茱萸の實の、枝も撓々な處など、大人さへ、火の燃ゆるが如く目に着くのである。

「家から持つてござつたか。教場へ出て何の事ぢや、大方其の所爲で雑所に叱られたものであらう。まあ、大人しくして居なさい、と然う云うて遣りまして、實は何でござります。……あの兒のお詫を、と間を見て居りました處を、丁どお召でござりまして、……はい。何も小兒でござります。日頃が日頃で、つひぞ世話を焼かした事の無い、評判の兒でござりまするから、今日の處は、源助、あの兒に成りかはりましたして御訴訟。はい、氣が小さいかいたして、口も利けずに、

とぼんとして、可哀や、病氣にでも成りさうに見えまするがい。」と揉手をする。

「何うだい、吹く事は。酷いぞ。」

と窓と一所に、肩をぶるくと揺つて、卓子の上へ煙管を棄てた。

「源助。」

と再度更つて、

「小兒が懷中の果物なんか、袂へ入れさせれば済む事よ。」

何うも變に、氣に懸る事があつてな、小兒處か、お互に、大人が、とぼんと成らなければ可いが、と思ふんだ。

昨日夢を見た。」

と注いで置ききの茶碗に残つた、冷い茶をがぶりと飲んで、

「昨日な、……昨夜とは言はん。が、晝寢をして居て見たのぢやない。日の暮れようと云ふ、そち此方、暗く成つた山道だ。」

「山道の夢でござりまするな。」

「否、實際山を歩いたんだ。それ、日曜さ、昨日は——源助、お前は自から得て居る。私は本と首引きたが、本草が好物でな、知つてゐる通り。で、昨日些と山を奥まで入つた。つい浮々と谷



谷へ釣込まれて。

こりや途中で暗く成らなければ可いが、と山の陰が些と憂慮はれるやうな日ざしに成つた。其から急いで引返したのよ。」

四

「山時分ぢやないから人ツ子に逢はず。又茸狩にだつて、あんなに奥まで行くものはない。随分路でもない處を潛つたからな。三ツばかり谷へ下りては攀上り、下りては攀上りした時は、些と心細く成つた。昨夜は野宿かと思つたぞ。」

でもな、秋とは違つて、日の入が遅いから、まあ、可かつた。漸つと舊道に繞つて出たのよ。今日とは違つた嘘のやうな上天氣で、風なんか薬にしたくもなかつたが、薄着で出たから晩方は寒い。それでも汗の出るまで、脚絆掛で、すたくく來ると、幽に城が見えて來た。城の方にな、可厭な色の雲が出て居たには出て居たよ——此の風に成つたんだらう。

其の内に、物見の松の梢の尖が目に着いた。もう目の前の峰を越すと、あの見霽しの丘へ出ると……後は一雪崩にするくと屋敷町の私の内へ入り込まれるんだ、と吻と息をした。處が又、知つてる通り、あの一町場が、一方谷、一方覆被さつた雑木林で、妙に眞晝間も薄暗い、可厭な處

ぢやないか。」

「名代な魔所でござります。」

「何か知らんが。」

と兩手で顔を扱くと、げつそり瘠せたやうな顔色で、

「一ツ切、洞穴を潛るやうで、其まで、ちら／＼城下が見えた、大川の細い靄も、大橋の小さな灯も、何も見えぬ。」

ざわ／＼ざわ／＼と音がする。……樹の枝ぢや無い、右のな、其の崖の中腹ぐらんな處を、熊笹の上へむく／＼と赤いものが湧いて出た。幾正となく、やがて五六十、夕焼が其處等を胡亂つくやうに……皆猿だ。

丘の隅にや、荒れたが、それ山王の社がある。時々山奥から猿が出て來ると云ふ處だから、其の數の多いにはぎよつとしたが——別に猿と云ふに驚くこともなし、又猿の面の赤いのに不思議はないがな、源助。

何れも此れも、何うだ、其の總身の毛が眞赤だらう。

然も數が、其處へ來た五六十疋と云ふ、そればかりぢやない。後へ後へと群り續いて、裏山の峰へ尾を曳いて、遙かに高い處から、赤い瀧を落し懸けたのが、岩に潜つて又流れる、其の末の



開いた處が、目の下に見える數よ。最も遠くの方は中絶えして、一ツ二ツづ、續いたんだが、限りが知れん、幾百居るか。

で、何の事はない、蟲眼鏡で赤蟻の行列を山へ投懸けて視めるやうだ。其が一ツも鳴かず、静まり返つて、さつ／＼と動く、熊笹がざわつくばかりだ。

夢だらう、夢でなくつて。夢だと思つて、源助、まあ、聞け。……實は夢ぢやないんだが、現在見たと云つても眞個にはしまい。」

源助は此を聞くと、彌々澁つて、頤の毛をすく／＼と立てた。「はあ。」

と息を内へ引きながら、「随分、眞個にいたします。場所からでござりまするで。雑所様、なか／＼源助は疑ひませぬ。」

「疑はん、眞個に思ふ。其處でだ、源助、序に最う一ツ眞個にして貰ひたい事がある。其處へな、背後の、暗い路をすつと来て、私に、ト並んだと思ふ内に、大跨に前へ拔越したも

のがある。……山遊びの時分には、女も駕籠も通る。狭くはないから、肩摺れるほどではないが、まざ／＼と足が並んで、はつと不意に、此方が立停まる處を、抜けた。

下闇ながら——此方も最う、僅かの處だけけれど、赤い猿が夥しいので、人戀しい。で透かして見ると、判然とよく分つた。

其も夢かな、源助、暗いのに。——裸體に赤合羽を着た、大きな坊主だ。」

「へい。」と源助は聲を詰めた。「眞黒な圓い天窓を露出でな、耳元を離した處へ、其の赤合羽の袖を鯨子張らせる形に、大な脇を、ト鍵形に曲げて、柄の短い赤い旗を翻々と見せて、しやんと構へて、すん／＼通る。……旗は眞赤に宙を煽つ。

まさかとは思ふ……特に其の言つた通り人戀しい折からなり、對手の僧形にも何分か氣が許されて、

(御坊、御坊。)

と二聲ほど背後で呼んだ。」

五

「物凄さも前に立つ。さあ、呼んだつもり自分の聲が、口へ出たか出んか分らないが、一も二



もない、呼んだと思ふと振り向いた。

顔は覚えぬが、顔も額も赤いやうに思つた。

(何方へ?)

と直ぐに聞いた。

ト竹を破るやうな聲で、

(城下を焼きに参るのぢや。)と言ふ。ぬいと出て脚許へ、五つ六つの猿が届いた。赤い雲を捲いたやうにな、源助。

「……………」小使は口も利かず。

「爾時、旗を衝と上げて、

(物見から些と見物なされ。)と云ふと、上げた其の旗を横に、翻然と返して、指したと思へば、峰に並んだ向うの丘の、松の梢へ颯と飛移つたかと思ふ、旗の煽つやうな火が松明を投附けたやうに燦と燃え上る。顔も眞赤に一面の火に成つたが、遙かに小さく、ちら／＼と、唯矢張り物見の松の梢の處に、丁子頭が揺れるやうに見て、氣が靜ると、坊主も猿も影も無い。赤い旗も、花火が落ちる状になつたんだ。

小兒が轉んで泣くやうだ、他愛がないぢやないか。さて然う成つてから、急に我ながら、世にも怯えた聲を出して、

(わつ。)と云つてな、三反ばかり山路の方へ宙を飛んで遁出したと思へ。

はじめに夢が覺めた氣に成つて、寒いぞ、今度は。がち／＼震へながら、傍目も觸らず、坊主が立つたと思ふ處は瓜立足をして、それから、お前、前の峰を引掻くやうに驅上つて、……………まじぐらに又摺落ちて、見舞しへ出ると、何うだ。夜が明けたやうに廣々として、崖のはづれから高い處を、乗出して、城下を一人で、月の客と澄まして視めて居る物見の松の、丁ど、赤い旗が飛移つた、と、今見る處に、五日頃の月が出て蒼白い中に、松の樹はお前、大蟹が海松房を引被いて山へ這出た形に、しつとりと濡れて薄靄が絡つて居る。遙かに下だが、私の町内と思ふあたりを……………場末で遅廻りの豆腐屋の聲が、幽に聞えようと云ふのぢやないか。

話に成らん。苟も小兒を預つて教育の手傳もしようと思ふものが、宛然狐に魅まれたやうな氣持で、……………家内にさへ、話も出來ん。

歸つて湯に入つて、寝たが、綿のやうに疲れて居ながら、何か、其でも寝苦くつて時々早鐘を撞くやうな音が聞えて、吃驚して目が覺める、と寝汗でぐつちより、其も半分は夢心地さ。

「正寅の刻からでござりました、海嘯のやうに、どつと一時に吹出しましたに因つて存じて居り



まする。」と源助の言つき、恰も口上。何か、恐入つて居る體がある。

「夜があけると、此の砂煙。でも人間、雲霧を拂つた氣持だ。然して、赤合羽の坊主の形もちらつかぬ。やがて忘れてな、八時、九時、十時と何事もなく課業を済まして、此の十一時が讀本の課目なんだ。

な、源助。

授業に掛つて、讀出した處が、怪訝い。消火器の説明がしてある、火事に對する種々の設備のな。しかし最う其さへ氣に成らずに業をはじめて、ものの十分も経つたと思ふと、入口の扉を開けて、ふらりと、あの兒が入つて來たんだ。」

「へい、嬢ちゃん坊ちゃんか。」

「然う。宮濱がな。おや、と思つた。あの兒は、それ、墨の中に雪だから一番目に着く。……朝、一二時間とも丁と席に着いて授業を受けたんだ。——此の硝子窓の並びの、運動場の矢張窓際に席があつて、……尤も二人並んだ内側の方だが。薩張氣が着かずに居た、……成程、其の席が一ツ穴に成つて居る。

又、箸の倒れた事でも、沸返つて騒立つ連中が、一人其まで居なかつたのを、誰もいつつけ口をしなかつたも怪いよ。

六

ふらりと廊下から、時ならない授業中に入つて來たので、さすがに、わつと動揺めいたが、其の音も戸外の風に吹攫はれて、どつと遠くへ、山へ打つかるやうに持つて行かれる。口や目ばかり、ばらばらと、動いて、騒いで、小兒等の聲は幽に響いた……」

「私も不意だから、變に氣を抜かれたやうに成つて、とぼんと、あの可愛らしい綺麗な兒を見たよ。

密と椅子の傍へ來て、愛嬌づいた莞爾した顔をして、

(先生、姉さんが。)

と云ふ。……姉さんが來て、今日は火が燃える、大火事があつて危ないから、早仕舞にしてお歸りなさい。先生に然うお願ひして、と言ひますから……家へ歸らして下さい、と云ふんです。含羞む兒だから、小さな聲して。

風は此だ。

聞えないで僥倖。一寸でも生徒の耳に入らうものなら、壁を打抜く騒動だらう。最うな、火事と、聞くと頭から、ぐらぐらと胸へ響いた。



騒がぬ顔して、皆には、宮濱が急に病氣に成つたから今手當をして来る。豫て言ふ通り静にして居るやうに、と言聞かして置いて、精々落着いて、先づ、あの兒を此の控所へ連れ出して來たんだ。

處で、氣を静めて、と思ふが、何分、此の風が、時々、くわつと赤く成つたり、黒く成つたりする。な源助何うだ。こりや。」

と云ふ時、言葉が途切れた。二人とも目を据ゑて瞻るばかり、一時、屋根を取つて控ぐが如く吹き撲る。

「氣が騒いで成らんが。」

と雜所は、確乎と腕組をして、椅子の凭りに、背中を摺着けるばかり、びたりと構へて、

「よく、宮濱に聞いた處が、本人にも何だか分らん、姉さんと云ふのが見知らぬ女で、何も自分の姉と云ふ意味では無いとよ。」

はじめて逢つたのかと、尋ねる、と然ではない。此の七日ばかり前ださうだ。

授業が済んで歸ると成る、大勢列を造つて、それな、門まで出る。足並を正さして、私が一二と送り出す……

すると、此の頃塗直した、あの蒼い門の柱の裏に、袖口を口へ當てて、小兒の事で形は知らん。

頭髮の房々とあるのが、美しい水晶のやうな目を、慍う、俯目ながら清しう瞪つて、列を一人一人見遁すまいとするやうだつけ。

物見の松は此處からも見える……雲のやうなはそればかりで、よく晴れた暖い日だつたと云ふ……此の十四五日、お天氣續きた。

私も、毎日門外まで一同を連出すんだが、七日前にも二日此方も、つひぞ、そんな娘を見掛けた事はない。然もお前、其の娘が、ちらく和白い指でめんな千鳥をするやうに、手招きで引着けるから、うっかり列を抜けて、其の傍へ寄つたさうよ。其を私は何も知らん。

(宮濱の浪ちやんだねえ。)

と此の國のぢやない、本で讀むやうな言で聞くとさ。頷くと、

(好いものを上げますから私と一所に、さあ、行きませう、皆に構はないで。)

と、私等を構はぬ分に扱つたは酷い！なあ、源助。  
で、手を取られるから、ついて行くと、何處か、學校から然まで遠くはなかつたさうだ。荒れには荒れたが、大きな背戸へ裏木戸から連込んで、菜萸の樹の林のやうな中へ連れて入つた。目の眶も赤らむまで、ほかくとしたと云ふ。で、自分にも取れば、あの兒にも取らせて、而して言ふ事が妙ではないか。



(澤山お食んなさいよ。皆、貴下の阿母さんのやうな美しい血になるから。)  
と言つたんださうだ。土産にもくれた。歸つて誰が下すつた、と父に然う言ひませうと、聞くと、

(貴下のお亡んなすつた阿母のお友だちです。)

と言つたつてな。あの兒の母親はなくなつた筈だ。

が、此處までは兎に角無事だ、源助。

其の婦人が、今朝また、此の學校へ來たんだとな。」

源助は、びくりとして退る。

「今度は運動場。で、十時の算術が済んだ放課の時だ。風にもめげずに皆驅出すが、あゝ云ふ兒だから、一人で、其でも遊戯さな……石盤へ恚う姉様の顔を描いて居ると、硝子戸越に……夢にも忘れない……其の美しい顔を見せて、外へ出るやう目で教へる……一度逢つたばかりだけれども、小兒は一目顔を見ると、最う其の心が通じたさうよ。」

七

「宮濱はな、今日は、其の婦人が紅い木の實の簪を挿して居た、矢張り茱萸だらうと云ふが、果

物の簪は無からう……小兒の目だもの、珊瑚かも知れん。

そんな事は兎に角だ。

直ぐに、嬉々と廊下から大廻りに、丁ど自分の席の窓の外。其の婦人の待つて居る處へ出ると、それ、散々に吹散らされながら、小兒が一杯、ふら／＼して居るだらう。

源助、それ、近々に學校で——頓て暑さにはなるし——餘り青苔が生えて、石垣も崩れたと云ふので、井戸側を取替へるに、石の大輪が門の内にあつたのを、小兒たちが悪戯に庭へ轉がし出したのがある。那個だ。

大人なら知らず、圓くて迂るにせい、小兒が三人や五人では一寸動かぬ。其奴だが、婦人が、あの兒を連れて、すつと通ると、むくりと脈を打つたやうに見えて、ころ／＼と芝の上を斜違ひに轉がり出した。

(やあい、井戸側が風で飛ばい)か、何か、哄と吶喊を上げて、小兒が皆其を追懸けて、一團に黒く成つて驅出すと、其の反對の方へ、誰にも見着けられないで、澄まして、すつと行つたと云ふが、何うだ、此も變だらう。

横手の土塀際の、あの棕櫚の樹の、ばら／＼と葉が鳴る蔭へ入つて、黙つて背を撫でなぞしてな。



其處で言聞かされたと云ふんだ。

(今に火事がありますから、早く家へお歸なさい、先生に然う云つて。でも學校の教師さん、そんな事がありますかッて背きなさいかも知れません。黙つてすん／＼歸つて可うござんす。怪我には替へられませぬ。けれども、後で叱られると不可せんから、なりたけお許しをうけてからにさいませよ。)

時刻はまだ大丈夫だとは思ひますが、そんな、こんなで歸りが遅れて、途中、もしもの事があつたら、此をめしあがれよ。然うすると烟に捲かれませぬから。)

と然う云つてな。……其處で、袂から紙包みを出して懷中へ入れて、壓へて、恚う抱寄せるやうにして、而して襟を搔合せてくれたのが、其の榮蕪なんだ。

(私がついて居られると可いんだけど、姉さんは、今日は大事な日ですから。)

と云ふ中にも、風のなぐれで、すつと黒髪を吹いて、まるで顔が隠れるまで、むら／＼と懸る、と黒雲が走るやうで、はらりと吹分ける、と月が出たやうに白い頬が見えたと云ふ……

けれども、見えぬ火事があると、そんな事は先生には言憎い、と宮濱が頭を振つたさうだ。(では、浪ちゃん、教師さんのおつしやる事と、私の言ふ事と、どつちを眞個だと思ひます。)

こりや小兒に返事が出来なかつたさうだが、然うだらう……なあ、無理はない、源助。

(先生のお言に嘘はありません。けれども私の言ふ事は眞個です……今度の火事も私の氣で何うにも成る。——私があるものに身を任せれば、火は燃えませぬ。其のものが、思の叶はない仇に、私が心一つから、澤山の家も、人も、なくなるやうに面當てにしますんだから。)

まあ、此だつて、浪ちゃんが先生にお聞きなされば、自分の身體は何う成つてなりとも、人も家も焼けないやうにするのが道だ、とおつしやるでせう。

殿方の生命は知らず、女の操と云ふものは、人にも家にもかへられぬ。……と私は然う思ふんです。然う私が思ふ上は、火事がなければなりません。今云ふ通り、私へ面當てに焼くのだから。まだ私たち女の心は、貴下の年では得心が行かないで、矢張り先生がおつしやるやうに、我身を棄てても、人を救ふが道理のやうに思ふでせう。

否、違ひます……殿方の生命は知らず。)

と繰返して、

(女の操と云ふものは。)と熟と顔を凝視めながら、

(人にも家にも代へられない、と浪ちゃん忘れないでおいでなさい。今に分ります……紅い木の實を澤山食べて、血の美しく綺麗な兒には、其のかはり、火の粉も櫻の露と成つて、美しく降る



ばかりですよ。さ、行らつしやい、早く。氣を着けて、私の身體も大切な日ですから。と云ふ中にも、裾も袂も取つて、空へ頭髪ながら吹上げさうだつたつてな。此だ、源助、窓硝子が波を打つ、あれ見い。」

八

雑所先生は一息吐いて、

「私が問ふのに答へてな、あの宮濱は豫て記憶の可い處を、母のない兒だ。――優しい人の言ふ事は、よくよく身に染みて覺えたと思えて、まるで口移しに誦誦をするやうに此處で私に告げられた。が、一々、ぞくぞく膚に粟が立つた。雖然、其の婦人の言ふ、謎のやうな事は分らん。そりや分らんが、しかし詮するに火事がある一條だ。」

(まるで嘘とも思はんが、全く事實ぢやなからう、兎も角、小使溜へ行つて落着いて居なさい、些と熱もある。)

額を撫でて見ると熱いから、其處で、あの兒を其方へ遣つてよ。

「さあ、氣に成るのは昨夜の山道の一件だ。……赤い猿、赤い旗な、赤合羽を着た黒坊主よ。」

「緋、緋の法衣を着たでござります、赤合羽ではござりません。魔、魔の人でござりますが。」と

ガタ／＼胴震ひをしながら、寝めるやうに言ふ。

「さあ、何か分らぬが、あの、雪に折れる竹のやうに、バシリとした聲して……何と云つた。」

(城下を焼きに參るのぢや。)

源助、宮濱の兒を遣つたあとで、天窓を引抱へて、恚う、風の音を忘れるやうに沈と考へると、ひよい、と火を磨るばかりに、目に赤く映つたのが、此なんだ。」

と両手で控帳の端を取つて、斜めに見せると、楷書で細字に認めたのが、輝く如く、もそりと出した源助の顔に赫々と照つて見えたのは、朱で濃く、一面の文字である。

「へい。」

「な、何からはじまつた事だ知らんが、丁ど一週間前から、不圖朱で以て書き續けた、こりや學校での、私の日記だ。」

昨日は日曜で抜けて居る。一週間。」

と颯と紙を刎ねて、小口をばら／＼と繰返すと、戶外の風の渦巻に、一ちぎれの赤い雲が卓子を飛ぶ氣勢する。

記日朱

「此の前の時間にも、(暴風)に書いて消して(烈風)を又消して(颶風)なり、と書いた、矢張り朱で、見な……」



然も變な事には、何を狼狽たか、一枚半だけ、野紙で残して、明日の分を、此處へ、これ（火曜）としたぜ。」

と指す指が、ひつつりのやうに、びくりとした。  
（讀本が火の處……源助、何う思ふ。他の先生方は皆な私より偉いには偉いが年下だ。校長さんもづつとお少い。）

こんな相談は、故老に限ると思つて呼んだ。何うだらう。萬一の事があるとなら、敢て宮濱の兒一人でない。……どれも大事な小兒たち——其の過失で、私が學校を止めるまでも、地鞆を踏んでなりと直ぐに生徒を歸したい。が、何でもない事のやうで、此が又一大事だ。苟も父兄が信頼して、子弟の教育を委ねる學校の分として、婦、小兒や、菜蕘ぐらゐるの事で、臨時休業は沙汰の限りだ。

私一人の間拔で済まん。

第一然やうな迷信は、任として、私等が破つて棄てて遣らなけりや成らんのだらう。然うかつてな、もしやの事があるとすると、何より恐ろしいのは此の風だよ。ヂヤンと来て見ろ、全市瓦は數へるほど、板葺屋根が半月の上も照込んで、焚附同様。——何と私等が高臺の町では、時ならぬ水切がして居ようと云ふ場合ではないか。土の底まで焼抜けるぞ。小兒たちが無事に家へ歸

るのは十人に一人もむづかしい。

思案に餘つた、源助。氣が氣でないのは、時が後れて驚破と言つたら、赤い實を吸へ、と言つたは心細い——一時半時を争ふんだ。もし、ひよんな事があるとすると——何う思ふ、何う思ふ、源助、考慮は。」

「尋常、尋常ごとではござりません。」と、かつと卓子に拳を擱んで、

「城下の家の、壽命が来たでござりませう、争はれぬ、争はれぬ。」

と半分目を眠つて、盲目がするやうに、白眼で首を据ゑて、天井を恐ろしげに視めながら、  
「ものはあるげにござりまして……舊藩頃の先主人が、夜學の端に承はります。昔其の唐の都の大道を、一時、其の何でござりまして、怪しげな道人が、髪を捌いて、何と、骨だらけな蒼い胸を岸破々と開けました真中へ、人、人と云ふ字を書いたのを搔開けて往來中驅廻つたげでござります。何時か同役にも話した事でござりますが、何の事か分かりません。唐の都でも、皆なが不思議がつて居りますと、其日から三日目に、年代記にもないほどな大火事が起りました。」

「源助、源助。」

と雑所大きに急いで、

「何だ、それは。胸へ人と云ふ字を書いたのは。」と怒る折から、自分で考へるのがまだるこしさ



うであつた。

「へい、まあ、一寸した處、早いが可うございます。此へ、人と書いて御覽じやりました。」

風の、其の慌しい中でも、對手が教頭心得の先生だけ、もの問れた心の矜に、話を唆せたい源助が、薄汚れた襯衣の鈕をはづして、ひく／＼とした胸を出す。

雑所も急心に、ものをも言はず有合はせた朱筆を取つて、乳を分けて朱い人。と引かれて、カチカチと、何か、齒をくひしめて堪へたが、突込む筆の朱が芻ねて、勢で、ぱつと胸毛に懸ると、火を曳くやうに毛が動いた。

「あ熱々！」

と唐突に躍り上つて、とんと尻餅を支くと、血聲を絞つて、

「火事だ！同役、三右衛門、火事だ。」と喚く。

「何だ。」

と、雑所も棒立ちに成つたが、物狂はしげに、

「何故、投げる。何故茶菓を投附ける。宮濱。」

と聲を揚げた。廊下をばら／＼と赤く飛ぶのを、浪吉が茶菓を擲つと一目見たのは、矢を射る如く窓硝子を映す火の粉であつた。

途端に十二時、鈴を打つのが、ブン／＼と風に響くや、一つづゝ十二ヶ所、一時に起る摺半鉦、早鐘。

早や廊下にも烟が入つて、暗い中から火の空を透かすと、學校の蒼い門が、眞紫に物凄。

此の日の大火は、物見の松と差向ふ、市の高臺の野にあつた、本願寺末寺の巨利の本堂床下から炎を上げた怪し火で、唯三時が間に市の約全部を焼拂つた。

烟は風よりも疾く、火は鳥よりも迅く飛んだ。

人畜の死傷少からず。

火事の最中、雑所先生、袴の股立を、高く取つたは效々しいが、羽織も着ず……布子の片袖引断れたなりで、足袋跣足で、据眼の面藍の如く、火と烟の走る大道を、蹠跟と歩行いて居た。

屋根から屋根へ、――樹の梢から、二階三階が黒烟りに漾ふ上へ、翻々と千鳥に飛交ふ、眞赤な猿の數を、行く／＼幾度も見た。

足許には、人も車も倒れて居る。

唯ある十字街へ懸つた時、横からひよこりと出て、斜に曲り角へ切れて行く、昨夜の坊主に逢つた。同じ裸に、赤合羽を着たが、是ばかりは風をも踏固めて通るやうな確とした足取であつた。が、赤旗を捲いて、袖へ抱くやうにして、聊か逡巡の體して、



「焼け過ぎる、これは、焼け過ぎる。」

と口の裡で呟いた、と思ふと最う見えぬ。顔を見られたら、雑所は灰に成らう。

垣も、隔ても、跡はないが、倒れた石燈籠の大きながある。何某の邸の庭らしい中へ、烟に追はれて入ると、枯木に夕焼のしたやうな、火の幹、火の枝に成つた大樹の下に、小さな足を投出して、横坐りに成つた、浪吉の無事な姿を見た。

學校は、便宜に隊を組んで避難したが、皆ちり／＼に成つたのである。

唯見ると、恍惚した美しい顔を仰向けて、枝からばら／＼と降懸る火の粉を、霰は五合と掬ふやうに、綺麗な袂で受けながら、

「先生、澤山に茱萸が。」

と云つて、藤長けるまで莞爾した。

雑所は諸膝を折つて、倒れるやうに、其の傍で息を吐いた。が、其處では最う、火の粉は雪のやうに、袖へ掛つても、拂へば濡れもしないで消えるのであつた。

## 小春



代々木に訪ねる人があつて、其處へ行くのに、甲武線の電車に乗つたが、午餉を済まして間も無い、硝子窓は熱いばかりの好い天氣、巻草を喫むと唇が燥いで逆上せるほどの小六月。大きに飽倦むまで降つた年で、こんな日和は數へるばかり、殊には出不精、近頃一向に歩行かぬ。

好い折から、此の序に、と思ふと、冬も半ばの日の短かさ。其の知己の家に用達して歸途にすると、枯枝に霜を散らす、夕月の曠野は凧と成らう。

行きがけに、と其處で千駄ヶ谷で電車を下りた。

停車場を出ると、彼處に代々木の方へ突切る野原がある。草は眞白に枯れたが、其も羊の毛を敷いたやうに、ほか／＼と暖かさうで、且つ雪路を畝つた風情の、往來の痕にも、下へ蒸氣でも通はすらしく快く日が當つたが……去年だつたか八月のはじめ、極暑の節、此處を越して、じりじりと足を焼かれた事がある。

思出しても目が眩む。

固より、急ぐのでは無いから、些と日蔭ではあつたが、向つて土塀、石垣など、小店も開けた、場末の屋敷町らしいのを通つて、一廻りして徳川家の地内を抜けた。

まだ眞晝間の日當りで、構内の竹藪も、ほつかり乾いて寒さうな影も無く、蒔棄てたらしい葉の小さな大根畠も、手を入れた牡丹の庭より長閑である。

晩方、表門がびつたりと、城の如く閉つてからも、荷車輓などは、勝手に開けて、から／＼と行抜けをすると聞く。

然れば、門際の交番にも、茶を煮る湯氣が颯と上つて、葉の落盡した櫻の枝も、ふつくりと柔かい。

處へ、女學生が前途から一人來た。其のけば／＼しいリボンを、脳上に俄然と聳やかした工合は、赤蜻蛉が向顔卷をした形であつた。

さて、此に配するには、蠅螂のやうな半外套でなければ成らぬ。野には龍膽、草もみぢ、嫁菜のおくれ咲も尙だあらう……浅葱、朱鷺色、紅鹿子、娘に手絡は

少く成つた。

春 小

地内を出ると、街道である。



古着屋に、股引の懸つたのも、魚屋に秋刀魚が瘦せて、鮭の切身の乾いたのも、浅間な葉茶屋の大きな茶壺に、一杯の目が當つて、屋根は榎の下蔭に、澁を塗つたやうに落葉の溢れ敷いたのも、軒下に轆轤を廻す……木地屋が木屑の芥と立つ木の匂も、椿の下の地藏堂も、成程、巢鴨の兄弟分。甲州路へ振出しの、双六を行く人通り、遊ぶやうでも急がしい。

其處で横路を傍へ切れた。

生垣の揃つた片側が屋敷構、片側が藁葺の凸凹とした百姓家で……新開らしい。屋敷側の四五軒目に、立派な瀬戸の門札に並べて、冠木門の柱に懸札あり、墨も黒々として曰く——自園の製茶賣捌き候——は面白い。

密と覗くと、眞新しい、四枚の格子戸、廂が廣く、奥が深い。其の石を敷詰めた玄關の格子戸の傍、障子の白い出窓の下に、ピカ／＼と母衣の光る乳母車が据ゑてあつた。

「ものも、案内も。」

「いや、表に案内がある、案内とは誰そ。」

と云ふ調子か。

「はッ、御免下し置かれまするやうに、」

「何ぢや、何ものぢやの、」

とあるか。

此處へ買ひに来るものと賣る人の、應對と其の様子は、一段の觀もの、聞きものであらう。時に、些と道草が過ぎる。

一一

「もし一寸伺ひますが。」

「はい、はい。」

通合はせた人物は、襟の掛つた半纏、むく／＼と着膨れて、帽子は被らず、紺足袋で草履穿、衣服の皺にも一杯の目を浴びて、額も赤いほど暖かさうなが、背伸びをして、小高い丘に、牛の群居るのを視めたり、疎な生垣から、畑打つ漢に聲懸けたり、所在ない風でも、呑氣らしく、そのそとぶらついて居る様子が、此の邊の地主とも言ひさうで、身の重いのに口は軽い。

「此を入つて抜けられますか。」

「突當りですよ、あの森でな、はい、何處へ行かれます。」と頷くやうにして聞いてくれる。

小 春  
「代々木へ參るにや參るんですが、途中を、何處となく歩行いて居ます。でも、突當りぢや詰りませんね。」



「は、あ、散歩、いや、結構なお天気だな。」

「真個の小春日ですね……ちや、其の葦葺屋根の上の方に見えます、あの、薄青い柵は、停車場のやうですが、何處のでせう。」

「はあ、」

と濃い太い眉で、

「ありや踏切で、代々木の踏切と言ひますよ……俗にな。」と最一つ頷いて云ふ。

俗に……と聞くも可懐しい。土地に久しい狸であらう、顔色も何うやら背て居た。

やがて、堤防を切つて、其の踏切を通ると、一度来て、最う其處からは心覚えがある。だふだ

ふとした洋服で、頬の伸びした、番屋の爺様の顔も相變らず。……

萌黄の旗を、ト窓掛けのやうに引掛けて、大な眼鏡で、新聞の繪のある處。

下りると、地面がゆつたり弛んで、晝寢をして居さうな、明い、暖い窪地の小さな谷で。

それを又たらく上りで、突當りに砂利を敷いた、廣いが、轍の條の無い、一帯の森の其の静

かさ。

振返つて左の方は、電車路の堤防に添つて、枯野と杉の林である。……今来た方は、街道の立

樹、植込の庭、遙々と新宿あたりの銀杏の梢、一目の見霽。緑は沈み、浅葱は浮き、朱は霞み、

紅は燃えて、透通るやうな蒼空にちらりと雲が散る。雲が、日の光に、恰も白銀の如く輝いて、

颯と七彩の木の葉に射すのを、薄りと霧が包んで、淡く人家の屋根を繞る。

が、其の下に往來ふ人は、地の上を、林の根の參差と鋭く露はな中を忙しい。小僧も走る、旅

商人、荷車が過る、馬が喘ぐ、腕車も駈ける、輪は光る。……

堤防一つ離れた此方へ、音も聲も響かぬけれども、人と馬と車と續くと、軽い埃が、ぱつと立

つ。其が、古金欄のやうな木立の裏、淀りとした市中の塵の煤びた中へ、天の一方に靡いて行く。

待て、待て、人事では無い。

些と急いで右へ。新築の家、空屋の門、と足許に水の流る、低い崖に添うて歩行き出す。其中

に、曲角に、其の水の小さな池のやうに成つた、堰らしい縁に、誰かが束ねて忘れた風情に、一

ヶ所、嫁菜の、紫の俤のやうに咲残つて居るのを見た。

水も風情である……後で聞くと、玉川の露が絲のやうに、あのきれいな草や森の下を貫ぬき留

めて灌ぐとか……浅いが、浅く澄切つて、ありとも見えす、無いでもなく、別に流れようとも思

はぬやうに、たゞちらりと、冷たさ清さを、野に湛へて、月の鏡と成るのを待つ。

可憐しい、其の水に、化粧し顔に、影をまかせた嫁菜の花は、然も花片がくると捲いた、細

春 小

い管に小さな露持つ、筒咲とか云ふのであつた。



手を伸ばすと、水を横切つて容易く届く……三本ばかり、……あ、後が寂しい、武藏野に僅に残る紫は、繪の具のやうに手の中へ。

三

今年ばかりと云ふではないが、果敢いほど、うら枯れて、樹々の梢こそ冷い錦に、羅の被衣した視めはあるが、草と云ふ草の中に色のあるのは、道すがら此の一叢の薄紫のみ。

秋咲の鼓草も、他の嫁菜も、薊、星月夜も、むら／＼と幻の小さな煙で、花野を惜んで包んだ真綿が、寸断に切れて、ぱつと亂散れて、やがては霜とともに消えさうであつた。

手折つた嫁菜が友ほし氣。

餘り便なさうに胸へ撓々と絶るから、此の邊は薄も刈られて、尾花の飛んだ殘餘も無いが、先方の練兵場について、あの遙々とした田畝へ掛ると、一面の薄原で、眞緒の中に、紺青の輝くばかりな狩衣着けた龍膽が、薄の一穂に一本づゝ、透通るまで咲いて居たのを覚えて居る。

其も紫、袴と振袖、此の嫁菜の花添はさうよ。

凡そ志す友を訪ねて、其の留守を、好都合、と云ふ事はつひぞ無い。が、此の時ばかりは満更にも思はなかつた。

あの田畝の方へ、漫に心が急いだから、尤も立寄つた家も、道順で、其も可し。

最う代々木だと、市のものを珍らしさうに、熱い茶一つ、と言はれたのを、上框で辭退して、すぐに練兵場の方へ向つたのである。

其處等で、四五人の往來に逢つた。づつと來る途中、人通りは、丘を越して、堤防を隔てて、視めるばかりで、まさしく行逢ひ、擦違つたのは殆ど少い。恰もあか／＼と日の光を湛へた日南の大海を一人で徒渉して居るやうで、あの渺とした練兵場を、横に視めて行く時は、尙ほ其の感が深かつた。廂の掛菜の春めくのも、さすがに冬の營で、日中も颯の覗きさうな。

あ、はた／＼と凄しく白旗が空にはためく、と見ると蒼空の雲を射て、鷹の羽の征矢一條、グザと眞黒な白晝の星を裏搔くばかり貫いて、鏃が踊る、的が戦く……大弓場の看板が、遙に市の方へ翻るのであつた。

其の角は、大河の底の乾いたやうな、廣い道路で、新宿まで、づつと行く筈。

左の細路は、と見ると、空の風を忘れたほどな、日南の田畝。枯れた尾花は、暖い霧を吐いて、大根畠の緑の上を、浮いて漾ふ。彼處に、其處に、ちら／＼と細く、此處にむら／＼と流れて、

小

其が、あの逃水の俤だつた。

春 其方にこそ。



と、ぽか／＼とある路傍の藁を、ふつくり踏んで、やがて、尾花に袖摺る姿と成つて、葉もしどろに、根もたゞあからさまな中を、彼方此方。ものの二三町、田の畔添に探したが、雨勝な年の育ちが悪いか、成程、最う蕃椒も、俵の中へかさ／＼と入つて、二ツ三ツ溢れたのが、唐臼の土間に落ちて居ると、鶏が見て吃驚もしさうな時節。欲しい龍膽は、花の一本、葉の一片も見當らぬ。

嫁菜の花も日に白ける。

千駄谷から歩行通して、額も汗ばむ、些と休まう。

直き足許の田の畔を、四隅に仕切つて、稲藁が束ねてあつた。

此の蒲團を見てさへ、手足が和らぐのであつたが、乾いても水田のあととなり、暖さも暖い。雲は美しいが、此の頃に又雨であらう、夥しい羽蟲が、ばら／＼と胡麻を飛ばして、羽で渦巻く：… 蛎もまた少くない。

片側は、雑木林で、陰々とした小高い丘の寒さうなが、路と其の丘との間が、目の届くだけ長く畝つた、竹の埒を結つた馬場で、前に此の仕切は無かつたが、此の節結繞らしたものと思ふ。其處は濕けない。

後で返して置かうもの。

「藁束一つ借用申す。」

で、尖を取つて、ざわ／＼と引いて、蟲を袖で拂つて、枯尾花を投げた。

四

埒の切目の、丁ど出入口。少し路を下つて、悠如と腰を掛けて、蒼空と太陽の間へ手笠を翳せば、あぶられて眩いやう。… 社の森へ瞳を映すと、霧もかゝらず、底澄んで、晝の月が斜であつた。

浮世を離れた趣で、一人、何やら染々と嫁菜の花が瞻らるゝ。

其處に、眞向に向合つた、茅薄の刈株に、木の葉が乾びついて、ばら／＼とある中へ、蝦蟇が罷出でたと云ふ詭へた形に、古靴一つ片一方。

尖が挫げて、甲がぶくりと、ばく／＼口が裂けて、海鼠が反を打つたやうにポカリとあつた。が、何の皮やら鯨子張つて、やがて龜裂が入つて欠けさうに見える。普通よりは稍大形なのが、尙ほ目に着く。

小 餘り面と向つて居るので、氣にするとも無く熟と視めた。  
爾時、はじめは、腰に敷いた藁束が、他愛なく中崩れがする、其の響きが身體に傳はつて、自



分の方が揺れるのだ、と思つた。手にした嫁菜が幽に震へて。

見直すと矢張動く、靴の方が動く。……びく／＼と皮を戦かして、蚯蚓が干乾びて絡ひついたと見える、あのすだ／＼の紐を、ひくりと遣る。

風は些とも無かつた。蟲の羽音も聞えぬ。

其の動くのが、稍大きく成つて、うら枯の野に一處、刈株の根を、不状な、黒奴の唇めいた爪尖が、右へ、一寸、ぐいと曲んで、左へ一寸、ぐるりと廻る。

「何だ、」

と思はず聲を出した。が、然まで恐れたのでは無い。

「靴が……何だ。」

たとひ其の運動するのが僻目で無くても、たかが靴で、屑屋が驅出したほどにも思はぬ。

と思ふ下から、隅と瓜の中に鳥蛇が宿つた、と云ふ昔の物語に心着いて、悚然として衝と藁束を立つて退つた。

得たりと一步、むつくりと出て、ばかりと近づくのが、鳥がちよんと歩行いたやう。

とぐるを巻いて居はせぬか。

固より長靴では無い。挫げた奴の然も口が開いて——恚う、逃構で高くから覗くと、かびの生

えた踵が赤い。其が蛇の舌ではなし、ぶくりとした唯裏皮で、蟲が潜めばとて爪尖の方であるが、其だとして精々が、蛙が蝗で。しかしそんな事で、此はびくりとも動くのではない。

地震の兆か。

否、否、其は又餘り大袈裟過ぎる。

ト古靴は、こびりついた泥が、蝶螺ともある裏を見せて、ばかりと仰向いて、衝と藁束へ乗上らうとしたが、じり、と退つて、刈株にトンと留まつた。

途端にかたりと云ふ。

人は、と戀しく伸上ると、近くの屋根は、あの日當りに、軒を傳ふ猫も見えぬ。遠方に、處々、大根を抜いて白々と積んだ處は流があらう、が、鳥も鳴かぬ。

背後へ離れた畠の中に、唯一人、稲束の陰に見え隠れで、鎌を使ふ婦の姿か、小さく遠く視められた。

小 其の兒なのであらう。遙々と細路續きの、竹と屋花で畝つて、よれて、搦まるあたり、路の真中に藁を敷いて、其の上に、ちよこなんと坐つて、寂しさうに、母親の働きぶりを熟と視めて居るのがあつた。——人通りの少ないのは其でも知れる。馬や、車は、来て雛を驚かさぬ、で、親鳥も、巢から啣へ出して、餌拾ふ間を、路の中に待たせて置くので。其の兩方さへ、距離が大分



ある。此方と、小兒と、其の母と、三ツに離れて同じ間遠さ。

差當り目の前の不思議な思は分たれない。

其のまゝも不氣味なり、餘りと云へば驅出すも慌し、と睨めくらで居るも可いが、すとなと飛んで、頬邊などへ喰つきはしはせぬか。

生憎頼當に成る願髻も持合はさず、と分別がありさうで、其の時棒のやうに立窘む。

處へ……蒼空の代々木の方から、車が一臺、もと来た路の、尾花の切れ目へ、晃々と輝く輻

五

眞個に驚いた、人かと思ふと、犬が乗つて居るではないか。蹴込の上で、澄まして、ぬつと其の長い耳で、狛を極めてるには吃驚した。

今、人戀しく胸す處へ、俾が見えたのは少なからぬ心頼み。で、輻の光りを暗夜の提灯。引寄せたいほどに待つ處へ、曳いた人間に變りは無いが、客はと思ふ暇もなかつた。ごむ輪で、高臺の立派な乗物の燃立つばかりな蹴込の敷毛に、前脚を立てて、斜に構へて、伏姫の婿が馬車で来た體の、大な西洋犬を一目見て驚いた。

犬がまた何としたか、来たと思ふと蹴込から、ストウと下りて、長い鼻頭を衝と此の馬場の中

へ突込むや否や、背を敵つて、後退りをしながら、細路を斜違に、尻尾でゆらく、屋花を揺つて、眞黄色な目を潤と輝かしながら、うゝ、うゝ、——唸るやうに吠えたのである。

勢、車夫も不意を食つて、迂るごむ輪に、胸を反らして楫を留めた。

車夫は、臆の短い、大な口のまはりに笑皺の寄つた、やがて六十ぐらゐの親仁。これで車を引くは悲惨のやうでも、樂に仕事をすると見えて、眉の開いた廣い額に、一番しやんと來いと横つちよに一ツ振つた平作結。元氣も可ささうな血色の赤ら顔に汗ばんだ、半纏にむつくりと綿が入つたので、背を圓く、雀のお宿へ行きさうな柔和な人體。

「よい。」

と驚いた聲を懸けて、

「何するだね、この和郎は。」と犬を叱つたが、邪慳でない。

其處で言を交はしたのであつた。

「はあ、これ、人ツ子さ見えねえ、こんな處だで、然うでがせう、希有な事に思はしつたんべい。狐さ馬に乗せてますがね。まだ其の方があり來りだあよ。

何ね………これ！」

と下を向いて、



「何を吠えるだい、これ、旦那と私い話しとるでねえか。何が怪いだ。やあ、静まれつてば静まれさ。あれ、まだ、吠えるだ、此の和郎は——」

と片手で扁平い頭をすぼり。巖丈な掌で蓋をするやうに壓したが、大な耳をぶる／＼と振つて、目を光らして矢張呻る。うゝ、と腮を草につけて、地を摺るばかり、馬場を狙つて。

思ひ當る事が觀面にある。

「好い犬だね、御主人のかい。」

「御主人ぢやありませんねえがね、矢張りお出入先から頼まれて來ましたが。……麴町番町のお邸でがんですよ。豪ら學者の先生様でね。」

と感心をしたやうな口振。

「遠いな、番町から曳いて來たのか。」

「お前様、王子からだよ。王子から來てね、これから駒場の農學ちゆうだ、豪い學校へ連れて行くでがんですよ。……あれ、何を吠えるだよ、まだ、呻つて、和郎。」

尾花と、森と、田畝を見る目に、王子から駒場とは、聞くも遙かに思はるゝ。

「王子から駒場へ、」

とつい口へ出た。

「そりや、随分ある。」

親仁は香氣らしく楫棒を腕へ掛けて、車を仰向けに引傾げ、

「雑作ありましねえだよ。瀧の川から團子坂へ抜けて、新宿と出て、のつそらく遣るだもの。」

好え天氣でがんです。

と目皺で其處等を——枯野の草も柔い日南の皺。

「で、ぶつと犬を乗せて來たのかね。」と何故か尋ねて見たかつた。

「否、直き後の町場から乗つただよ。此がは、お前様ね。」

と楫棒の中から、足許の犬の背を覗く、と吠える氣競が艶に出て、茶の斑の毛並がたら／＼、弓にすつと背を反らして、まだ吠止まない。

耳の大きく垂れた、其の楕圓形の長い鼻頭と向合つて、靴の尖がポカリとある。や、今の間に又其方を向いた。……

六

小

「此がは、」

と——まだ靴の其の一件を話す間が無かつたので、何も知らぬ——親仁は、ゆつたりと言續け



る。

「病氣をして居ただとね。其處で、王子の獸病院に入れてあつた、云ひます。

其が、はい、恚うして恢復つた處を、此が御主人のお友達が借さつしやるだよ。借りて、其の駒場の農學校に出て居さつしやる其のお友達が、矢張り此が御主人と同じ豪ら學者の先生様で、何か、はい、試験に、可え牝さ當がつて、獵犬の素晴らしい小兒さ拵える。ちよつくらね、其のお婿様に連れて行くでがんす。

路も強とありますだで、病院から乗つけるつもりで車曳いて行つただがね、人間が曳くで遠慮するだ、可愛いもんだあ、何としても乗りましねえだよ。

鎖い楫棒に取着けて、がら／＼驅出すと、前へ立つて、ぐん／＼曳くだ。車はひとりでに迂りますだよ。軽いだあ、お前様。私らが反對に乗つてるやうだね。其のかはり、此がは、一生懸命に、力を入れて曳くでがんす。

今日、雇はれて駄賃さ頂くだもの。此の方が、お客様で、威張つて可えだものを、老年だと思つて、慫はつてくれるでねえか。

けんども、病氣上りだあ、我勢に遠路をするだけでも強かんべい。力出して車曳くでねえ。氣だけで澤山だ、や、和郎てえましてもな、此のお前様、可愛げな團栗目して、此方さ見るばかりで、

矢張り、えいさあ曳くでがんす。

傾ひ揚句に其ではなんねえ。人が見るで遠慮するなら、最う可え。見せえ、誰も居ねえ、そら、枯れた薄と大根畠だ。せめて此の丁場一つ練兵場の馬場の間だけでも乗つてくんな。でねえと、賃錢を出さした且那樣に濟まねえや、やあ、私が氣休めにも、ちよつくら乗らせえ、とね、見させえまし、」

と、もそりと緩く、日に向いて、其の空ばかり風の煽つ、大弓の旗を高く見上げた。

「あれ、彼處へ来た時だ。頭撫でて頼むやうにして言つたれば、合點したかの、のつこり蹴込へ入りましけ……其でも遠慮勝に、へい、鼻頭外へ出して、氣術なさうに、固く成つて、ちよこなんとして居たでがんす。

解めた、私。

此處さ、お前様居さつせえたもんだで、吃驚して飛下りたに違えことござりましねえ。

可愛いもんだあね、」

と車ごと横に成るまで、凭れるやうにして、ごつ／＼した手で、柔しく犬の頸を撫でる。と、ぞく／＼嬉しがつて縮むやうな形をして、う……を一寸留めて、間伸びた腮で、親仁の股引を、ふつふと擦る。



「そうれ、」

と莞爾、頤の皺を揉くちやな笑顔に成つて、

「其の通りだ——お前様に極りが悪いで、俵からスットンと下りたばつかしでねえ。爺が是非と云ふで、乗つただね、私心のちやねえとつて、申譯に呻つたんべい。なあ、」

と又撫でて遣つて、

「ほれ、見さつせえ、此が心う波んで、私が口で圖星と當てたれば、了簡の通つた處で、啼留むだあもの、やあ、可愛い和郎な。

歸つて、へい、茶あ飲んで婆様に聞かせべいよ。

病氣上りも厭はねえで、手助けに、汗掻いて、車のさき綱曳いてくれた、これくと話したら、死んだ悴の事、又言出して泣えべいかな。……

私らが悴は、お前様、兵隊さんに成つて怪我で押死ましただ。戦で、手柄したでねえけれど……些とや少とは、お國の奉公したちうで、世間で慙はつてくれさつしやる。

犬までが優しいだよ。はあ、何と云ふ結構なお天氣でがんせうな。」

ふと差俯向く、と靴は靜として居た。動かぬのが、前刻より一層凄かつたが、言ひそびれた序に、親仁に其の話はしまいと思つた。

而して、ほろりとした。可厭な、男の癖に——あらず、手にした嫁菜が優しかつたのである。



青

鷺



「御覽じやる通、此の邊四方青田で、庄屋の森がござります、また森の前に大池がござりますに因つて、地躰いかいこと居りまして……」

と寂しい温泉宿の夜の夜に、甚吾と云ふ夜廻の爺が話した。——御維新前は、此爺、鶯流の狂言師だつたさうで、一時火の消えたやうに成つたのが、頃日大層な勢で流行出したから、諸流の月並の會の太郎冠者は勤りさうなもの、片田舎の湯宿なんぞに、夜番をして居なくても可ささうに思ふが、いづれ其の昔も前座、……いや狂言師に前座は可笑しい。アトとか小アトとか云つたのであらう。

逗留中は降籠められて、つい居廻へぶら／＼歩きに出掛けることさへしなかつたが、其の時、爺がいふ大池は途中で見た。鑛泉は丘のやうな處にあつて、其の丘をだら／＼と下りて、立樹を四五本。

松の高いのを潛ると、其處に用水の溜がある。周圍は總躰で七八町、北の片隅が深々とした森

で、あとは其の樹立の名残を水へ流したやうに淺く次第に疎になつて、其の四五本の松といふのも、矢張森の一部であるが、私を通つた時は、水が満々とあつて、實際よりも餘程渺として見えた。

といふのが雨續きで溢れた所爲で、汀には怍う、すら／＼と伸びた葉ばかりの菖蒲、田の畝が二條三條、水浸りに沈んで、稲葉の伏倒れた上に乗つて、二人釣をして居たのがあつた、殊に黄昏だつたから餘計に廣く見えたのである。

のみならず、福井の町を離れてから、二里不足の間、唯畝々した田畝道で、處々小橋があるばかり、目につくのは、湯の廣告の黒旗と、石地藏と、藁葺にした肥料の溜桶のうしろに、灸點の、これも旗が立つて居る、それくらゐなものだつたので、池を見た時は宛然別天地へでも出たやうな氣がした。鰻、鯰、などが澤山釣れるのだと言つて、水浸りの畔にイんだのばかりではない、池の眞中に田舟を浮べて、一人頰冠をばして釣つて居た奴がある、晩方だから其の形煙のやう、舟はちつとして其のまゝ沈んで行くやうに動かないで、却つて蓴菜の浮葉が、誘ひつれ／＼、風につと寄つたり、分れたり、淋しい事。

青 驚 おまけに左手の汀は、寺でもあつた跡と見えて、苔の生えた石燈籠が、茫乎立つて、墓石がすらすらと、其處へも水が溢れて居た。池も空もどんよりして、唯見た處は、町も村も國も爰が行



止りて、あとは筒抜けに海のやうな野原でもありさうな心細い景色が、大に趣があつたので、しばらく腕車を止めて視めたが。

田舟の中の人の形が、舷へつかまつて俯向けに水を覗いた。その状は、何の事はない、其處から地獄でも覗くやうで、悚然として直ぐに腕車を急がせた。……爺の言ふのは其の池である。

「何が居る、」

「何がおつしやつて、其の、青鷺でござりますて、……」

「鷺が、」

何するものぞと思ふと、爺が早く見て取つた。不平らしく、

「鷺かと一口におつしやりますが、旦那様、彼奴、徳利の形で水に立ちますだけあつて、此の親

仁には酒と一ツに、命取りでござります、恐しい！」

と舌を巻く、唇を反らして。凡そ世の中に、青鷺のために生命を取られるといふのがあるか。

甚吾爺は、手拭を掴んで臂を張つた。

「え、庄屋殿の森から大池へかけまして、青鷺の巢でござりまして、何時太いこと居りますのが、又此の五月雨頃は春でござりますわ。

や、いづれも名代な奴等、小溝端で蚯蚓を突いて、村の小兒に驚かされたり、川下で鮒を狙う

て、船を見て遁出すやうな甘いのおやござりませぬ。

福井の市へ伸して出て、人死のある棟の上でぎやツと啼いたり、縁切の背戸でくわツと喚いたり、三國港へ飛び歩いて帆柱を揺つたり、した、かなことをはだかすでござります。」

甚吾は苦々しい澁面造り。

一一

「其の巢が總出で、糧を漁るでござりますに依つて、夜になると、大池の岸は首の押せ〜で鷺だらけ、嘴を揃へたら、何の事はござりませぬ、鳥の國の兵隊が行列をした躰、いや夥しい事は、お百姓が肥料に取片附けまするので目立たぬのでござりますが、森の中は一夜の中に敵めが糞で、眞白に積るのが毎々でござります。何奴も、年功を経て居りますゆゑ、日中は寂寞、羽音もさせず潜んで居まして、夜に入つてから暗中を、ぎやツと言つては、口から吐き出す呼吸を燃いて其の灯で、何と、鰻を鵜呑

箕で計るやうな大池の魚は、波を立てて遁げるでござりまする。

中にもあぶれものが、腹こなしに來まして、親仁が夜巡の路を、二間置き、三間置き、五ツ六ツ居る事やら、其とも一羽で幾度もするやら、眞の暗の足許から、ぱツと羽振をして起ちますわ。



咽喉で呼吸を引いて、はアとお前様、魂が天上をしますると、其ツ切、物音も聞えぬでござります。

此方は気が上ずりまして、いやはや、身體が宙へ上ツたかと思ふと、踏出す足もぶらりと下りさうで、窘んで一足も動けぬでござりますよ。」

「成程。」

こりや、いかにも驚くだらう。で爺のいふには、

「初手に食ひました時は、嘘にも天狗に釣上げられたかと思つたでござります。氣味の悪い冷汗で、びつしよりになつて、漸々腰を据ゑた。引いた呼吸をウムと詰めましたなり、恐々歩行き出しますると、五間と出ぬに、又ばツと飛びますわ。」

此の術で晩方などは、お百姓が、畔で尻餅を搗くことがござりまするを、豫ねて聞いて居りましたに因つて、恩ひ出して、扱はおでやつた、庄屋の森の脚長殿ぢや。然やうに心附きましたれば太う恐い事はなくなりましたものの、其の時をはじめ毎晩、其が又時節になりますと、毎年でござりまする。ちやんと心得て巡回りまして、不意を打たれてはぎよツとせぬ事はござりませぬ。

おのれ見ると、檜の木の用心棒、六尺手ごろな奴を用意しまして、暗の中を透し透し、此方も

夜巡、目は馴れて來ましたなり、一本脚を搔拂うて、胴中ひし折つて下されうと、毎晩のやうに狙ひますが、如何な其の術を食ひますか。

まざくと形を見せて、引寄せて置いて、棒が横なぐれに空を切るを合圖に、立ちざまに耳を拂ふ、鼻を弾く、嚏は出ます。」

と鼻頭に皺を寄せて、くすぐつたいのを堪へる顔色。談に乗つて、縁側に胡坐を組んで、握拳を膝について饒舌る。

「これが又毎晩で、馬鹿らしくはありまする、泣くにも泣かれませず腹ばかり立ちまする。をかしさはをかしうござりまするの。如何様、火があれば、敵殿いたづらはしませぬが、片手業で、此の拍子木を打ちまするに、便が悪うござりまするに就いて、又暗やみで歩行く、例物が遊びますちや。」

磨つた揉んだが今年になりまして、つい一昨晩。

お節句に就きまして、帳場から一合下されたのでござります。三國鯉のぶつく切で、嘗めますほどに、けるほどに、とろくと肱枕。一天四海波を打治めたまへば、一寝入りいたしまして、酔覺のぼつと目が開きますると、お定りの刻限。

お造酒がまはつて景氣はついたり、雨も止んで居りまする。不圖思ひ出して、恚ういふ時ぢや、



狐でも来い、狸でも来い人間にかなふ事ではおられない。

おのれやれ、見ろ、年来の意趣ばらしと、先づ身仕度をいたしたてござります。」

三

甚吾爺は然う言つて、手拭を扱いて窘めた頸へ引掛けた。

「ト拍子木を預けたてござります。多時打棄つて置いた用心棒、提灯を點けて参り、物置の隅から引出しまして、あとを閉めて錠を下して、さて、提灯を吹消すと、勝手の知れた臺所の格子窓に引掛けたてござります。其處で一ツ身構をいたして、拍子木は首へかけたなり棒ぐるみ、咽喉を扱んでカチ／＼と遣りまして、いよく庭傳ひに繰出しましたわ。これは此の邊のものでござる、と先そり／＼と参りながら、八方へ目を配つて、丁ど此の座敷の前を通りまして、やがて七八間歩きますと、そりや敵の氣勢がいたしまするで、盲目打に一番、やッ！と横に拂つたてござります。

手應處か、すぼん、と飛んで、一間前へ、しゆつと立ちます。そろ／＼と探り寄つて、曳！やッ、と拂ふと、すぼんと飛んで、眞の闇の一間前へ。毎度と申すが此の傳で、酔つた勢、おのれがおのれが。

せめて、長脚の爪尖なりと、挫いてくれうと、打ちはずし／＼、つい浮々と長追して、あの大池の岸まで参つて、どんづまりに水をはじいた棒で、女の裾を拂ひますると、手答へなく、煙を突いた心地、呀、青鷺に女の裾がと、吃驚して見上げますると、高い處に眞白な長き顔、目もなければ眉もないのが、荔枝のやうな口を開けて、おはぐるを見せまするで早腰を抜かして這ひました。

で、何が早や泥龜のやうに足を引摺つて、それから一目散に遁げました。處で、根から眞個には。

青 何と恚やうなことは、御逗留の、他のお客人に申される儀ではござりませぬ。内の者にも話されませぬが、お見懸け申してお尋ねを幸ひ饒舌りまする次第。親仁も不思議でなりませぬ、青鷺の、脚を、脚をと狙ひました其の脚が、つと女の裾になりましたわ、地躰暗で、葦やら蘆やら、柳の葉やら、裾やら、袂やら、見分けのつく譯はござりませぬに、小袖の袂を判然見まして、其に合はせるものを着たらしく、ふきの蒼いまで、明いほどに認めました。其さへ解せぬでござります、落着いてから考へますると、例の青鷺の吐く呼吸の怪火の光に映つたかとも思はれますが、さて何も彼も顛倒いたしましたわ、其とも、夜中に棒を使うて、青鷺を追かきまする親仁が、現に此處に居りまする上は、また何と間違うて、其の時分大池の邊を歩行く女中がないにも限らぬ



酸  
漿

でござります。兎もあれ、今一度、確に見届けたうござります。なれど、なかく以て、親仁な  
どが、なかく以て。



赤十字病院へ、仲よしの朋輩の見舞に行つて、新道の我が家へ歸つた時の、小銀の顔色と云ふのはなかつた。

主思ひの内箱のお辻が、

「お、お歸んなさいまし、何うなさいました姉さん。」と身體の肥つた大柄なのが、慌しいまであたふたする、がさつな出迎も歸宅を待つた眞實である。

「あい、唯今。」

と揃へて脱いだ駒下駄ながら、土間に一寸目を配つて、小褌を浅く、すつと入る、と入替りに、お辻が上框の障子をびつたり。其の手で背後からコートを脱がす……白羽二重に薄彩色した浅妻船の水の裏が、弱く衣摺れの音を立ててすらりと脱げると、唯一重にさへ、げつそりと瘦せた姿。山茶花の花片へ、フト雪が來たやうな襟足の、撫肩を尙は術なさうに、友染の蒲團の上。綿は厚いが薄い膝で、長火鉢の縁へ縋るやうにしたが、

「着換へませうかね。」

「まあ一服なすつてからになさいまし。」

と何んなに寒かつたらうと思ふ、其の褪せた唇の色に、紅を潮せと、お辻は赫と火を開けた上へ、炭を継ぎ〜、

「お不斷着は奥に暖めてございますけれど、姉様、其よりかお炬燵へ行らしたら如何でございますえ。」

「些と後にませうよ、何だか私、」

と差俯向く。聊か薄いが癖のない、柳を洗つた藝子髷。櫛は通るが氣の纏れで、後毛の亂れたのが、馴れない遠出の風の所爲ばかりとは見受けられぬ。

お辻は吃驚したやうに、火の上へ火箸を其のまゝ、持忘れた風采で、

「まあ、何うなさいました、姉さん。」

「矢張り不可いの、また何だか容子がよくないやうだわねえ。」

聞かれたのは其の事、と小銀は見舞に行つた朋輩の谷江と云ふのが容體を云つて、

「最う自分でも、病氣を知つて居るんだから氣休めの言ひやうがなくてさ。染々心細い事を言はれると、氣の毒で、可慙さうで、一層此方で引受けて、身代りに成つて遣りたいわねえ。」



と聲もしめやかに、下ろした鐵瓶の湯氣が消える。其も道理で、此の婦が、一度引いて世帯を  
持った情人は、同じ肺病で亡くなつたのである。

今度は吃驚が、呆れ顔。

「飛んでもない姉様、お友達の身代りなんて、病人のお見舞毎に一々そんな氣をお出しなすつち  
や、髪が脱けますよ。」

と禁厭のやうに嫉めると、思出して、櫛をぐい、と壓へたが、其さへ力なささうな様子が見え  
た。

「寒氣がなさりはしませんか。そんなこんなで、お心持が悪いでせう。お顔の色つたらありま  
せんよ。熱いお出花をあげりませんか。」

「私は澤山、」

と清らかな、霜の小菊の半襟に、白魚の指を當てた。

「でも丁ど可いから、お父さんに上げておくれ。困つたね、堀の内様や何か、お寺参りだと、お  
土産があるんだけど、赤十字ぢやねえ。其に些と歸宅を急いだもんだから、お愛想がない事よ。

……お炬燵で御本かい。」

と頭重げに二階を見た。お父さんと云ふのは、娘で食ふ親仁でない。亡き情人の、世に便りな

い老人を、小銀が達過ごして居るのである。

二

お辻は一層實體に、

「最う些と前でしたよ。姉様がお案じなさいます、谷江さんの御祈念につて、お寒いのに、お留  
め申しましたけれど、運動もしたいからつて、深川へ御参詣にお出掛けでございますよ。」

「深川へ、まあ、お友達の事にまで……濟まないわねえ、一寸、」

「否、御心配をなさらないやうに、谷江さんの分になすつていらつしやいますが、眞個な矢張り  
何ですよ。姉様が此の間中、何だかお勝れなさらないもんですから、其ででございますよ。です  
もの、申戲にも姉様、そりや谷江さんだつて、お最惜いには違ひありませんけれども、ですけれ  
ども、」

とぼつちやりした頬に、ちよんぼり可愛いのを早口に疊掛けて、

「嘘にも身代りに成らうなんて、直に然う眞にお成んなさるのも、矢張りお身體が弱いからです。  
今日なんぞも、お鹽梅の悪いのを推してお見舞になんぞ行らつしやらなけりや可うございますの  
にさ、お顔の色つたらないぢやありませんか。あれ！何うかなすつたんでございますか。」



と云ふ時、また蒼白く成つて見えた。

「そんな事ぢやないの、病氣ぢやないんだけれど、私、心持が悪くつて、悪くつて、何とも仕様のない事があるの、何うしようかと思ふんだよ。」

「え、蛇でも御覽なさいましたか、時ならない。」

「あ、蛇を飲んだほどな思ひなんだわ。」

と言ひも終らず、お辻が慌しく背中を擦るまで、あつと云つた。

「何うなさいましたんですねえ、姉さん。」

「擦らなくつても可いの、胸が疼むんぢやない事よ、咽喉へね、」

と力のない咳をして、

「咽喉へ酸漿が引つ掛つて、苦しうつて苦しうつて……」

「酸漿が、……酸漿でございますか。」

「あ、其の酸漿がねえ、一通りなんぢやないの。——お湯を一杯おくれ……一寸、あ、否、止さうよ。」挿込を梟として、

「此の上、胸へ流込んだら、何うしよう、私は死んで了ふよ。お辻、何時か御參詣をして、鳩の豆を買ふとつて、指のくづれた男に手を握られた事なんぞ、今日のから見りや何でもない。」

「まあ、癩坊が何うかしたのでございますか。」

「癩だか何だか、其はお前、何とも言ひやうのない、胸の悪い不気味な女房がね、病院下で、電車で、私の隣へ坐つたのさ。……こんな稼業をして居ながら、人様の服装の事なんぞ言へた義理ぢやないけれど、縞柄も分らなく無つた、洗ひ晒した半纏も可いがね、捩れ／＼に成つた半襟の下に、汚い白い肌襦袢の襟を出してね、前掛を／＼めめないの。綿ネルの古いのなんか露出でさ。繼だらけの足袋の、其も破れた、指の爪が眞黒さ。」

そんな事より、べろんと剥げた額が、やがて鬚の處まで脱上つた生際へ、生毛が、もや／＼逆に立つて、すきや燈籠をいぼ尻巻にしたつけか、こげ下つた頬邊の處へ、すく／＼、毛の先が切れて太いのよ。……そして白髪交りなの。赤く爛れた毗の下つたのが、守宮の腹を切つたやうで、それから額へ環を掛けて青筋が斜違ひに畝つてね、可厭ぢやないか。お前、十筋ばかり眉毛が縦に押立つてさ、何だか笑破れた口が白歯だらう、白歯も凄まじい、黄色黒い、其がね、大跨に電車へ入る時から最う爪楊枝を噛んでゐるのさ。其の楊枝でね、齒莖の間をぐい／＼とせ、つちや、汚いものの附いたのを鼻の尖で透かして見ては、こぼ／＼した手の甲で、不臈を、堪らないと云つたやうに、やけに、きつ／＼と引擦るの。だもの、内職の唐紅でも塗つたやうに、腮はお前、眞赤に成つて、べと／＼と濡れて居る齒莖から涎が傳つて……」



小銀は話す内も、幾度か胸を壓へ、壓へして、

「そればかりなら可いけれど、然うやつて、腮をこりこり引擦る毎に、頬の肉がぶり、と動く、奥歯がぐらつくらしいわね、拍子でカチ／＼カチ／＼と鳴るのさ、鳴るのと一所に、キユツ／＼と鬼灯を吹くんだわ。——襪のやうな袖口へ、片手を指まで引込めて、其の手をひきつりのやうにぶる／＼と震はせ、震はせ、お前、片手で其の楊枝せ、りで、汚いものを熟と見ちや、赤爛れのした、……ありや肝の蟲と云ふんだね——腮を引擦つて奥歯をカチ／＼カチ、で、鬼灯だらうぢやないか。其をね、幾度も同じ事を引切なし……」

お待ち！まだ口惜いのは、前觸をするの、右のね、はじめようと云ふ機會に、カツと、それは、咽喉を絞るやうな咳をして、其の時大きな口を開けるの、吐出すんだわ、鬼灯を。脂で黒く成つた舌の尖へ出して、ぐしやりと舐めて、どろ／＼と齒へ挟むの。眞赤に染めたゴム酸漿よ。モ私や一生ゴム酸漿は持つまいと思ふ。

其のね、カツと云つて開ける時は、口が耳まで裂けるやうよ、眉毛が白く、すく／＼と日向に透いてね。また明前に、あの車掌臺の硝子窓に其の爪楊枝を持った肱つきで、赤い腮を高慢に、

筋張つた額を仰向けて、其はツンとして居るぢやないか。

手のひきつる工合から、立續けに同じ事をする、色艶と云ひ、少し、氣も何うかをかしいらしい。——様子がね、宿場女郎の果かとも思ふ。

と言が途絶えた。また一倍調子が弱つて、

「然う云つては悪いけれど、見てさへ、むか／＼と最う胸が悪くつて居る處へ、お辻。カツと其の女房が口を開ける毎に、ぱちや／＼と重い唾が私の顔に掛るんだわ。」

「まあ。」

と一つ、重量のある膝をつんと支いて、お辻は身悶え。

「彼處は景色の佳い處ね、紺青のやうな川が流れて、透通つて、……枯れた林が薄青う紫がかつて、晝も月夜のやうな中へ、私の顔なご構はないが、其のお前、景色の上へ、唾が黒い毒蟲のやうに飛ぶんだもの。口惜く成つて私、身を投げようかと思つた。

餘り堪らないから、病院下から、四つ目あたりの橋の處で電車を下りたの。橋が掛つて、枯木が続いて、廣い處よ。……世界が違つたやうで、ほとと息をしたけれど、頭もふらくしてね、身體中、芬とする、然う言へば、其の女房は硫黄のやうな臭がしたつけ。

何しろ、何うかしなくつちや、辛抱出来ないもの。直き近い處の小さな蕎麥屋へ入つたの、其



處で聞いたら三の橋と云ふ處たとき。麻布かねえ。

でね、金盥を借りて、水を取つて、埃が酷くつて、と言つたけれど、鹽を貰つたから言譯に成らないよねえ。

お代は上げますから、金盥は打棄つて下さいよつて、其から天麩羅を誂へたの。其をさ、よせば可かつたんだよ、ねえ、お辻。」と情ない目で熟と見る。

見られて、お辻は、

「へい、」と云ふ。

「唯モ極が悪いから、然う云つてさ。其の中、五六遍も取替へて、きゆつゝ顔を洗つたんで、何うやら胸も些とすつきりする……出来たばかりなのを、手も着けないぢや容體らしくつて私、恥かしいもんだから、お汗の一口もと思つて、つひした覚えもない、階子段の下へ坐つて、——でも二階があるんだわね——而してさ、蓋を取つて口をつけたの、お辻、唯口をつけたばかりなの。然うするとお前、お蕎麥が動くかね、赤いものが、むつくり浮いたんだわ。」

あ、と歎息、婀娜に撃む。

四

「だつて、だつて姉さん、姉様何も、其をお呑みなすつたんぢやありませんまい。」

とお辻はむきに成るやうにして言消した。

重たげに又頭を掉つて、

「否、確に口へ入つたに違ひないの。だつて、眞赤な其が、ゴム酸漿と一目見るなり、はつと思つた時、お汗が舌へ觸つてさ、……其ツ切、酸漿の形がまるつきり見えないぢやないか。

悚然としてね、氣に成るから、最う一生懸命、恥も外聞もありません、お蕎麥を一筋つゝと思ふほど、箸を入れて探したけれど酸漿の影もないのよ。

ガツチリ何か咽喉の處に支へて居るわ。あ、お辻、」

と、今は仔細を知つて怪むまいと、氣を許したやうに、双の肩を震はした。

「頭はグラ／＼する、寒氣はする、足もとぼ／＼して、迎も電車ぢや歸られない。乗合の中で、又飛だ疎匆でもしては成らないから、と然う思つて、三の橋から車でさ。——漸と堪へちや來たけれど、途中だつてお前、咽喉が天上へ塞がつて、夕方の美しいお日様の姿も見えなかつた。

眞暗だわ、其處等暗夜のやうな。而しちや可厭らしい婆さんの顔が幾つも見えるの、ちら／＼してね、爪楊枝の汚いものを瞻めるのやら、カツと口を開けたのやら、腮の赤いのやら、種々見えるの。お辻何うしよう、鬼灯が此處にあるの。」



と指差す指が、咽喉へ懐剣を當てたやうに、佛を物凄いまでに見せたのである。

「鹽湯を、」

と言ふに及ばず、此際餘り尋常事らしいので、中途で言留んで、  
「寶丹。」

と其も止した。……お辻の遺瀨のない顔も、早う黄昏の小窓の下に、少時消失せるやうに見えるが、俄然むつくりとして膝が動いたと見ると、然も嬉しげな聲に、笑を交へて、

「可いものがございます、姉さん。あの、象牙のお箸。そら、あの方のお記念だつて、何時も御飯を上りませう。——お父さんは、御自分のお子様だもんですから、肺病で亡く成つたんだから悪い、と御遠慮で、姉様に御叱言を仰有るから、此頃は詮事なしに御無沙汰をなさいませぬ。何時か甘鯛の小骨を、お二人で一所にたてて、兩方で撫でて二人ともとれた、と随分お聞かせなすつたぢやありませんか。お父さんはお留守だし、大びらにお出しなさいませぬ。而して逆に撫でますと屹と取れて出了ひますよ。如何、姉さん。」

「あゝ、然うね、」

とはじめて小銀らしい聲に成つて——其處の茶棚の抽斗から、別の箸箱に、綺麗な、鬱金の切

に包んだのを、撥の捌きにはらりと解くと、まだ眞白な、其の象牙の色に、ほろりとしながら、寂しく笑つて、

「堪忍しておくれ。」

「さあ、御遠慮なく、」とどつしり膝に手を置く。

「可厭だよ、お辻。」

で、恍惚と咽喉に當てると、雪なす下を、血が透通るやうに見えたが、あつと言ふ、さそくに、心得て當がつた、磨いた眞鍮の嗽茶碗に、む、と含んで、衝と何もなしに鮮血。

電燈が點いた。

「嬉しい、半分溶けて、ぶよ／＼してね。」

と目を細り。後が床の傍の、男の記念の小机を衝と寄せると、羽織を脱がうとして、美しい裏を覗したまゝ、冷い縮緬の肩を細く、兩手を重ねて、が／＼と俯向いた。

繪のやうな其の姿を視ながら、お辻がわな／＼と震へて蒼く成る間に、小銀はすやくと白梅の宵の呼吸。

漿 酸

嗽茶碗を持つたまゝ、膝で後退りに成つて、ひよろり臺所へ立つと、女中と囁くや否や、女中は其の嗽茶碗を隠して持つて、かゝりつけの醫者へ驅出した。



露  
肆

「あゝ嬉しい、酸漿はじまが出るんだねえ。」  
其まから小銀こぎんは果敢はかなくなるまで、血ちを吐はく度たびに、嬉うれしさうに、



寒く成ると、山の手大通りの露店に古着屋の数が殖える。半纏、股引、腹掛、溝から引揚げたやうなのを、ぐにやぐにと振ツつ、巻いつ、洋燈も漸と三分心が黒燻りの影に、よぼよぼとした媼さんが、頭からやがて膝の上まで、荒布とも見える襦袢頭巾に包まつて、死んだとも言はず、生きたとも言はず、黙つて溝のふちに凍り着く見窄らしげな可哀なものもあれば、常店らしく張出しを三方へ、絹二子の赤大名、鼠の子持縞と云ふ男物の袷羽織。こゝ等は甲斐絹裏を正札附、づらりと並べて、正面左右の棚には袖裏の細り赤く見えるのから、淺葱の附紐の着いたのまで、ぎつしりと積上げて、小さな圓鬘に結つた、顔の四角な、肩の肥つた、きかぬ氣らしい上さんの、黒天鵝絨の襟巻したのが、同じ色の腕までの手袋を嵌めた手に、細い銀煙管を持ちながら、店が違ひやす、と澄まして講談本を、ト圓心に翳して居て、行交ふ人の風采を、時々、水牛縁の眼鏡の上からじろりと視めるのが、意味ありさうで、此の連中には小母御に見えて――

湯歸りに蕎麥で極めたが、此節當もなし、と自分の身體を突掛けものにして、そつて通る、

横町の酒屋の御用聞らしいのなどは、相撲の取手が仕切つたと云ふ逃尻の、及腰で、件の赤大名の襟を恐るゝ引張りながら、

「阿母。」

などと敬意を表する。

商賣冥利、渡世は出来るもの、商はするもので、五布ばかりの鬱金の風呂敷一枚の店に、襦袢の数々。赤坂だつたら奴の肌脱、四谷ぢや六方を踏みさうな、けばくしい胴、派手な袖。男もので手さへ通せば其處から着て行かれるまでにして、正札が品により、二分から三兩内外まで、膝の周圍にばらりと捌いて、主人はと見れば、上下縞に折目あり。獨鈷入の博多の帯に銀鎖を捲いて、きちんと構へた前垂掛。膝で豆算盤五寸ぐらゐるのを、ばちくと鳴らしながら、結立の大圓鬘、水の垂りさうな、赤い手絡の、容色も満更でない女房を引附けて居るのがある。

時節もので、めりやすの襯衣、めちやの大安賣、ふらんねる切地の見切物、濱から輸出品の羽二重の手巾、棄直段と云ふのもあり。外套、まんと、古洋服、どれも一式の店さへ八九ヶ所。續いて多い、古道具屋は、あり来り。近頃古靴を賣る事は……長靴は烟突の如く、すぼんと突立ち、半靴は叱られた體に畏つて、ごちやくと浮世の波に魚の漾ふ風情がある。

兩側は扱て軒を並べた居附の商人……大通りの事で、云ふまでも無く真中を電車が通る……



夜店は、一列片側に並んで出る。……夏の内は、西と東を各晩であるが、秋の中ばからは一月置きに成つて、大空の星の沈んだ光と、どす赤い灯の影を競ひつつ、末は次第に流の淀むやうに薄く疎には成るが、馳て町盡れまで断えずに續く……  
宵を些と出遅れて、店と店との間へ、脚が極め込みに成る卓子や、箱車を其のまゝ、場所が取れないのに、両方へ、叩頭をして、

「如何なものでございませうか、飛んだお邪魔に成りませうが。」

「何、お前さん、お互様です。」

「では一ツ御不省なすつて、」

「え、可うございませうともね。だが何ですよ。成たけ両方をゆつくり取るやうにして置かないと、當節は喧しいんだからね。距離を其の八尺宛と云ふお達しでさ、御承知でもございませうがね。」

「ですから尙ほ恐入りますんで、」

「其處にまたお目こぼしがあらうつてもんですよ、まあ、口明をなさいまし。」

「難有う存じます。」

などは毎々の事。

二

此の次第で、露店の間は、何うして八尺が五尺も無い。蒟蒻、蒲鉾、ハツ頭、おでん屋の鍋の中、混雑と込合つて、食物店は、お馴染のぶつ切節、今川焼、江戸前取り立ての魚焼、と名告を上げると、目の下八寸の鯛焼と銘を打つ。眞似はせずとも可い事を、鱗焼は氣味が悪い。

引續いては兵隊饅頭、鶏卵入の滋養麵麩。……かるめら焼のお婆さんは、小さな店に鍋一つ、七つ五つ、孫の數ほど、ちよんぼりと並べて寂しい。

茶めし餡掛、一品料理、一番高い中空の赤行燈は、牛鍋の看板で、一山三錢二錢に響く。蜜柑、林檎の水菓子屋が負けじと立てた高張も、人の目に着く手術であらう。

古靴屋の手に靴は穿かぬが、外套を賣る女の、鈕きらくと羅紗の筒袖。小間物店の若い娘が、毛糸の手袋嵌めたのも、寒さを凌ぐとは見えないで、廣告めくのが可憐らしい。

氣取つたのは、一軒、古道具の主人、山高帽。賣つても可いさうな肱掛椅子に反身の頬杖。がらくた壇上に張交ぜの二枚屏風、すんどの銅の花瓶に、からびたコスモスを投込んで、新式な家庭を見せると、隣の同じ道具屋の亭主は、炬燵槽に、ちよんと乗つて、胡坐を小さく、風除けに、葛籠を押立てて、天窓から、其の尻まですつぱりと安置に及んで、祕佛は何うだ、と達磨を極め



て、寂寞として定に入る。

「や、此奴ア洒落てら。」

と往來が讚めて行く。

黒い毛氈の上に、明石、珊瑚、トンボの青玉が、こつくと寂びた色で、古い物語を偲ばすもあれば、青毛布の上に、指環、鎖、襟飾、燦爛と光を放つ合成金の、新時代を語るもあり。……又合成銀と稱へるのを、大阪で發明して銀煙管を並べて賣る。

「諸君、二圓五十錢ぢや言うたんぢや、可えか、諸君、熊手屋が。露店の賣品の値價にしては、聊か高値ぢや思はるゝぢやらうが、西洋の話ぢや、で、分るぢやらう。二圓五十錢、可えか、諸君。」

と重なり合つた人群集の中に、足許の溝の縁に、馬乗提灯を動き出しさうに据ゑたばかり。店も何も無いのが、額を仰向けにして、大口を開いて喋る……此の學生風な五ツ紋は商人ではなかつた。

此處等へ顔出しをせねば成らぬ、救世軍とか云へる人物。

「其處でぢや諸君、可えか、其の熊手の値を聞いた海軍の水兵君が言はるゝには、可、熊手屋、二圓五十錢は分つた、しかしながらぢやな、此處に持合はせの錢が五十錢ほか無い。則ち此の五

十錢を置いて行く。直ぐに後金の二圓を持つて來るから受取つて置いてくれい。熊手は預けて行くぞ、誰も他のものに賣らんやうになあ、と云はれましたが、諸君。

手附を受取つて物品を預つて置くんぢやからあ、

と俯向いて、唾を吐いて、

「ぢやから諸君、誰にしても異存はあるまい。宜しうございます、行つて入らつしやいと云うて、其の金子を請取つたんぢや、可えか、諸君。處でぢや、約束通りに、あとの二圓を持つて、直ぐに其の熊手を取りに來れば何事もありませんぞ。

そうら、其が遣つて來ん、來んのぢや諸君、一時間経ち、二時間経ち、十二時が過ぎ、半が過ぎ、何うぢや諸君、馳て一時頃まで遣つて來んぞ。

他の露店は皆仕舞うたんぢや。其で無うてから既に露店の許された時間は経過して、僅に巡行の警官が見て見ぬ振と云ふ特別の慈悲を便りに、茫乎と寂しい街路の霧に成つて行くのを視めて、鼻の尖を冷たくして待つて居つたぞ。

處へ てくりく、

肆 露

と兩腕を奮んで振つて、すぼんだ脚を上げたり、下げたり。  
「向うから遣つて來たものがある、誰ぢやらうか諸君、熊手屋の待つて居る水兵ぢやらうか。其



の水兵ならばぢや、何事も別に話は起らんぢや、諸君。然るに世間と云ふものは爰が話ぢや、今来たのは一名の立派な紳士ぢや、夜會の歸りかとも思はれる、何分か酔うてのう。」

三

「皆さん、申すまでもありませんが、お家で大切なのは火の用心でありまして、其の火の用心と申す中にも、一番危険なのが洋燈であります。何故危い。お話しをするまでもありません、過失つて取落します際に、火の消えませんが、壺の、此の、」

と目通りで、眞鍮の壺をコツ／＼と叩く指が、掌掛けて、油煙で眞黒。

頭髮を長くして、きちんと分けて、額にふら／＼と捌いた、女難なきにしもあらずなのが、渡世となれば是非も無い。

「石油が待てしほもなく、燵と燃え移るから起るのであります。御覽なさいまし、大阪の大火、青森の大火、御承知であります。失火の原因は、皆此の洋燈の墜落から轉動(と妙な對句で)を起します。其の危険な事は、硝子壺も眞鍮壺も決して差別はありません。と申すが、唯今もお話しました通り、火が消えないからであります。其處で、手前商ひまするのは、ラヂーンと申して、金山鑛山に於きまして金を溶かします處の、爐壺にいたしまするのを使つて製造いたしま

した、口金の保助器は内務省お届濟みの專賣特許品、御使用の方法は唯今お目に懸けまするが、安全口金、一名火事知らずと申しまして、」

「何だ、何だ。」

と立合ひの肩へ遠慮なく、唇の厚い、眞赤な顔を、ぬい、と出して、碯と睨んで、醉眼をとるりと据ゑる。

「うむ、火事知らずか、何を、」と喧嘩腰に力を入れて、もう一息押出しながら、

「焼けたら水を打懸けろい、げい。」

と嘸をするかと思ふと、印半纏の肩を聳やかして、のツと行く。新姐子がばら／＼と避けて通す。

と嶮な目を一寸見据ゑて、

「あ、云ふ親方が火元に成ります。」と苦笑。

昔から大道店に、酔拂ひは附いたもので、お職人親方手合の、然うしたのは有觸れたが、長外套に茶の中折、髭の生えた立派なのが居る。

肆 露

辻に黒山を築いた、が北風の通す、寒い背後から藪を押分けるやうに、杖で背伸びをして、踊つとるは誰ぢや、何しとるか。」



「へい、面白づくに踊つてるぢやござりやせん。唯今、鼻紙で切りました骸骨を踊らせて居りますんで、へい。」

「何ぢや、骸骨が、踊を踊る。」

「どたくと立合の背に凭懸つて、」

「手品か、うむ、手品を賣りよるぢやな。」

「へい、八通りばかり認めてござりやす、へい。」

「うむ、八通り、此の通か、はッはッ、と變哲もなく洒落のめして、」

「何うぢや五厘も投げて遣るか。」

「え、投銭、お手の内は頂きやせん、材あかしの本を賣るのでげす、お求め下さいやし。」

「ふむ……投銭は謝絶する、見識ぢやな、本は幾干だ。」

「五錢、」

「何、」

「へい、お立合にも申して居りやす。へい、え、特の外音聲を痛めて居りやすんで、お聞苦しう、……へい、お極りは五銅の處、御愛嬌に割引をいたしやす、三錢でござりやす。」

「高い！」

と喝つて、

「手品屋、負ける。」

「毛頭、お掛直はござりやせん、宜しくばお求め下さいやし、三錢でござりやす。」

「一錢にせい、一錢ぢや。」

「あッあ、推量々々。」と對手に成らず、人の環の底に掠れた聲、地の下にて踊るやう。

「お次は相場の當る法、辯ずるまでもありませんよ。……我人ともに年中虻では不可ません、一攫千金、お茶の子の朝飯前と云ふ……次は、」

と細字に認めた行燈をくると廻す。綱が禁札、ト捧げた體で、芳原被りの若いもの。別に緋の羽織を着たのが、板本を抱へてイむ。

「諸人に好かれる法、嫌はれぬ法も一所ですな、愛嬌のお守と云ふ條目。無錢で米の買へる法、火なくして暖まる法、飲まずに酔ふ法、歩行かずに道中する法、天に昇る法、色を白くする法、婦の惚れる法。」

四

「お痛え、痛え、」



尾を撮んで、よろりと引立てると、青黒い背筋が敵つて、びくりと鎌首を擡げる發奮に、手術服と云ふ白いのを被つたのが、手を振つて、飛上る。

「え、驚いた、蛇が啖ひ着くです——だが、諸君、こんなことでは無い。……此の木製の蛇が、僕の手練に依つて、不可思議なる種々の運動を起すです。急がない人は立つて見て行き給へよ、奇々妙々感心と云ふのだから。」

だが、諸君、だがね、僕は手品師では無いのだよ。蛇使ひではないのですが、こんな處ぢや、誰も衛生と云ふ事を心得ん。生命が大切と云ふ事を辨別へて居らん人ばかりだから、其處で木製の蛇の運動を起すのを見て行き給へと云ふんだ。齒の事なんか言つて聞かしても、何の道分りはせんのだから、無駄だからね、無駄な話だから決して賣らうとは云はんです。賣らんのだから買はんでも宜しい。見て行き給へ。見物をしてお出でなさい。今、運動を起す、一分間にして暴れ出す。

だが諸君、だがね諸君、齒磨にも種々ある、花王齒磨、ライオン象印、クラブ梅香散……雑と算へた處で五十種以上に及ぶです。だが、諸君、言つたつて無駄だ、何うせ買ひはしまい、僕も賣る氣は無い、こんな處ぢや分るものは無いのだから、賣りやせん、賣りやせんから木製の蛇の活動を見て行き給へ。」

と青い帽子をすぼらに被つて、目をぎろ／＼と光らせながら、憎體な口振で、齒磨を賣る。

二三軒隣では、人骨骨柄、天晴、黒縮緬の羽織でも着せたいのが、悲愴なる聲を揚げて、殆ど歎願に及ぶ。

「何うぞ、お試し下さい、ねえ、是非一回御試験が仰ぎたい。口中に熱あり、齒の浮く御仁、齒齦の弛んだお人、お立合の中に、もしや萬一です。口の臭い、舌の粘々するお方がありましたら、此處に出して置きます、此の芳口劑で一度漱をして下さい。」

と一口がぶりと遣つて、悵然として仰反るばかりに星を仰ぎ、頭髮を、ふらりと掉つて、ぶらぶらと地へ吐き、立直ると胸を張つて、これも白衣の上衣兜から、綺麗な手巾を出して、口のまはりを拭いて、ト恍惚とする。

「爽かに清き事、」

と黄色い更紗の卓子掛け、しなやかな指で弾いて、

「何とも譬へやうがありません。唯一分間、一口含みまして、二三度、口中を漱ぎますと、齒磨楊枝を持ちまして、ものの三十分使ひまするより、遙かに快く成るのであります。口中には限りません。精神の清く爽かに成りますに從うて、頭痛なども立處に治ります。何うぞ、お試し下さい、口は禍の門、諸病は口からと申すではありませんか、齒は大事にして下さい、口は綺麗にし



て下さいまし、ねえ、私が願ひます、何うぞ諸君。」

「此の砥石が一挺ありましたらあ、今までのよに、鹽ぢやあ、湯水ぢやあとう、騒ぐにはア及びませぬウ。お座敷のウ真中でもウ、お机、卓子臺の上エでなりとう、唯、こいに遣つて、すういすういと擦りますウばかりイイ。菜切庖丁、刺身庖丁ウ、向ウへ向ウへとウ、十一二度、十二三度、裏を返しまして、黒い色のウ細い砥ウ持イましてエ、柔かう、すいと一二度ウ、二三度ウ、撫るウ撫るウばかりイ、此のウ菜切庖丁が、面白いやうにイ切まますウる、切れまますウる。こいに、こいに、さっくりさっくり横紙が切れますやうなら、當分のウ内イ、誰方様のウお邸でもウ、切ものに御不自由はございませぬウ。此のウ細い方一挺がア、定價は五錢のウ處ウ、特別のウ割引イでエ、粗のと二ツ一所に、名倉の缺を添へまして、三錢、三錢でエ差上げますウ、剪刀、剃刀磨にイ、一度ウ磨がせまして、二錢とウ三錢とは右から左イ……」

と賽の目に切つた紙片を、膝にも敷物にもばらばらと夜風に散らして、縞の筒袖凛々しいのを衝と張つて、菜切庖丁に金剛砂の花骨牌ほどの砥を當てながら、餘り仰向いては人を見ぬ、包まじやかな毛糸の襟巻、頬の細いも人柄で、大道店の息子株。

押並んで、めくら縞の襟の剥げた、袖に横撫のあとの光る、同じ紺のだふくとした前垂を首から下げて、千草色の半股引、膝のよぢれたのを捻つて穿いて、すんぐりむつくりと肥つたのが、

日和下駄で突立つた、いけすな悴が、三徳用大根皮剥、と云ふのを喚く。

五

其の鯉口の兩腕を突張り、指尖をハッ口へ突込んで、頸を襟へ、もぞくと擦附けながら、

「小母さん、買つてくんねえ、小父的買ひねえな。千六本に、おなますに、皮剥と一所に出来らあ。内が製造元だから安いんだぜ。大小あらあ。大が五錢で小が三錢だ。皮剥一ツ買つたつてお前、三錢はするぜ、買つとくんねえ、あ、あ、あ、」

と引捻れた四角な口を、額まで潤と開けて、猪首を附元まで窘める、と見ると、仰状に大欠伸。餘り度外れなのに、自分から吃驚して、

「はつ、と、突掛るハッ口の手を引張出して、握拳で口の端をポン、と蓋をする、トほとと眞白な息を大きく吹出す……」

いや、順に並んだ、立つたり居たり、凸凹とした何の店も、同じやうに息が白い。むらむらと沈んだ、燻つた、其の癖、師走空に澄透つて、蒼白い陰氣な灯の前を、ちらりちらりと冷たい魂が徜徉ふ姿で、毫碌頭巾の皺から、押立てた古服の襟許から、汚れた襟巻の襷積の中から、朦朧と顯れて、揺れる火影に入亂れる處を、ブン／＼と唸つて来て、大路の電車が風を立てつつ、颯と



引攫つて、チリ／＼と紫に光つて消える。

と何の顔も白茶けた、影の薄い、衣服前垂の汚目ばかり火影に目立つて、煤びた羅漢の、トボンとした、寂しい、濁つた形が溝端にばら／＼と残る。

こんな時は、時々ばつたりと往來が途絶えて、其の時々、對向つた居附の店の電燈瓦斯の晃々とした中に、小僧の形や、帳場の主人、火鉢の前の女房などが、繪草子の裏、硝子の中、中でも鮮麗なのは、軒に飾つた紅入友染の影に、くつきりと顯れる。

露店は茫として霧に沈む。

忽ち、ふら／＼と黒い影が往來へ湧いて出る。其の姿が、毛氈の赤い色、毛布の青い色、風呂敷の黄色いの、寂しい媼さんの鼠色まで、フト判然と凄しい星の下に、漆のやうな夜の中に、淡い彩して顯れると、商人連はワヤ／＼と動き出して、牛鍋の唐紅も、翻然と搖ぎ、おでん屋の屋臺もくわつと氣競が出て、白氣濃やかに狼煙を揚げる。翼の鈍い、大きな蝙蝠のやうに地摺りに飛んで所を定めぬ、煎豆屋の荷に、絲のやうな火花が走つて、

「豆や、煎豆、煎立豆や、柔い豆や。」

と高らかに冴えて、思ひもつかぬ遠くの辻のあたりに聞える。

又一時、がや／＼と口上が彼方此方にはじまるのである。

が、次第に引潮が早く成つて、——漸つと柵にかゝつた海草のやうに、土方の手に引摺られた古股引を、はづすまじとて、媼さんが曲つた腰をむす／＼と動かして、溝の上へ膝を摺出す、其の効なく……博多の帯を引懸みながら、素見を追懸けた亭主が、値が出来ないで舌打をして引返す……煙草入に引懸つただぼ鯨を、鳥の毛の采配で釣らうと構へて、ストンと外した玉屋の爺様が、餌箱を檢べる體に、財布を覗いて鬱ぎ込む、齒磨屋の卓子の上に、お試用に擲出した粉が白く散つて、賣るものの鱒髻にも薄り霜を置く——初夜過ぎに成ると、其の一時々々、大道店の灯筋を、霧で押伏せらるゝ間が次第に間近に成つて、盛返す景氣が其の毎に、遅く重つくるしく成つて来る。

づらりと見渡した皆が悄乎する。

勿論、電燈の前、瓦斯の背後のもの、寝る前の起居が忙しい。

分けても、眞白な油紙の上へ、見た目も寒い、千六本を心太のやうに引散らして、ずぶ濡の露が、途切れ／＼にぼた／＼と足を打つて、溝縁に凍りついた大根剥の悴が、今度は堪らなさうに、凍んだ両手をぶる／＼と唇へ押當てて、貧乏搖ぎを忙しくしながら、

「あ、あ、」  
と又大欠伸をして、むら／＼と白い息が吹出すと、筒拔けた大聲で、



「大福が食ひてえなッ。」

六

「大福餅が食べたいとき、は、は、は、は、」  
と直き其の傍に店を出した、二分心の下で手許暗く、小楊枝を削つて居た、人柄なだけ、可憐らしい女隠居が、黒い頭巾の中から、隣を振向いて、掠れ々笑つて言ふ。

其の隣の露店は、京染正紺請合とある足袋の裏を白く翻して、ほしくと並べた三十ぐらの女房で、中が一寸隔つただけ、三徳用の言つた事が大道でぼやけて分らず……但し吃驚するほどの大音であつたので、耳を立てて聞合はせたものであつた。  
會得が行くと然も無い事だけ、をかしく成つたものらしい。

「大福を……ほ、と笑ふ。」

と其の隣が古本屋で、行火の上へ、髯の伸びた瘦せた頤を乗せて、平たく蹲つた病人らしい陰氣な男が、釣込まれたやら、

「ふ、ふ、」

と寂しく笑ふ。

續いたのが、例の高張を揚げた威勢の可い、水菓子屋、向顛卷の結び目を、山から飛んで来た、と押立てたのが、仰向けに反を打つて、呵々と笑出す。次へ、それから、引續いて——一品料理の天幕張の中などは、居合はせた、客交じりに、わはくと笑を揺る。年内の御重寶九星賣が、恵方の方へ突伏して、けたくと堪らなさに噴飯したれば、苦蟲と呼ばれた齒磨屋が、うんふんと鼻で笑ふ。聲が一所で、同音に、もぐらもちが昇天しようと、水道の鐵管を躍り抜けさうな響きで、片側一條、夜が鳴つて、哄と云ふ。時ならぬに、木の葉が散つて、霧の海に不知火と見える灯の間を白く飛ぶ。

なごりに煎豆屋が、くわツと笑ふ、と遠くで凄まじく犬が吠えた。

軒の邊を通魔がしたのであらう。

北へも響いて、町盡の方へワツと抜けた。

時に片頬笑みさへ、口許に莞爾ともしない艶なのが、露店を守つて一人居た。

肆 露

縦通から横通りへ、電車の交叉點を、其の町盡れの方へ下ると、人も店も、灯の影も薄く齒の抜けたやうな、間々を冷い風が渡る癖に、店を一ツ一ツ一重ながら、茫と渦を巻いたやうな霧で包む。同じ燻ぶつた洋燈も、人の目鼻立ち、眉も、青、赤、鼠色の地の敷物ながら、宛然鶏卵の裡のやうに、渾沌として、ふうはり街燈の薄い影に映る。が、枯れた柳の細い枝は、幹に行燈を



點けられたより、却つて此の中に、處々すつきりと、星に蒼く、風に白い。

其の根に、莫蔭を一枚の店に坐つたのが、件の婦で。

年紀は六七……三十に先づ近い。姿も顔も寡れたから、些と老けて見えるのであらうも知れぬ。綿らしいが、銘仙縞の羽織を、なよ／＼とある肩に細く着て、同じ縞物の膝を薄く、無地ほどに細い縞の、これだけはお召らしいが、透切れのした前垂をメめて、晝夜帯の胸ばかり、淺葱の鹿子の下メなりに、乳の下あたり膨りとしたのは、鼻紙も財布も一所に突込んだものらしい。

雑と一昔は風情だつた、肩掛と云ふのを四つばかりに疊んで敷いた。其を、襖は深いほど玉は冷たさうな、膝の上へ掛けたら、と思ふが、察するに上へは出せぬ寸断の繼填らしい。火鉢も無ければ、行火もなしに、霜の素膚は堪へられまい。

黒繻子の襟も白く透く。

油氣も無く擦切るばかりの夜嵐にばさつたが、艶のある薄手な丸鬚がツくりと、焦茶色の絹のふらしてんの襟巻。房の切れた、男物らしいのを細く巻いたが、左の袖口を、ト乳の上へ悄乎と捲き込んだ袂の下に、利休形の煙草入の、裏の緋鹽瀬ばかりが色めく、が其も褪せた。

生際の曇つた影が、瞼へ映して、面長なが、然して瘡せても見えぬ。鼻筋のすつと通つたを、横に掠めて後毛をさらりと掛けつつ、ものう氣に拂ひもせず……切の長い、睫の濃いのを伏目に

成つて、上氣して乾くらしい唇に、吹矢の筒を、一寸含んで、片手で持添へた雪のやうな脰を搦む、唐縮緬の筒袖のへりを取つた、繼合はせもの其の、緋鹿子の媚かしさ。

七

三枚ばかり附木の表へ、(一くみ)も假名で書き、(二せん)も假名で記して、前に並べて、きざり柿の熟したのが、こつ／＼と揃つたやうな、昔は螺が尼になる、これは紅茸の悟を開いて、ころりと參つた張子の達磨。

目ばかり黒い、けば／＼しく眞赤な禪入を、木兎引の木兎、で三寸ばかりの天目臺、すく／＼とある上へ、大は小兒の握拳、小さいのは團栗ぐらなるな處まで、づらりと乗せたのを、其の俯目に、ト狙ひながら、件の吹矢筒で、フツ。

カタリと云つて、發奮もなく引くりかへつて、軽く轉がる。其の次のをフツ、カタリと離る。續いてフツ、カタリと下へ。フツ／＼、カタ／＼カタと毛を吹くばかりの呼吸づかひに連れて、五つ七つ立處に、パツ／＼と石鹼玉が消えるやうに、上手にでんぐり、くるりと落ちる。

落ちると、片端から一ツ／＼、順々に又並べて、初手からフツと吹いて、カタリと言はせる。……同じ事を、絶えず休まずに繰返して、此の玩弄物を賣るのであるが、玉章もなし口上もなし



で、ツンとしたやうに黙つて居るので。  
霧の中に笑の虹が、潑と渡つた時も、獨り莞爾ともせず、傍目も觸らず、同じやうにフツと吹く。

カタリと轉がる。

「大福、大福、大福かい。」

と些と粘つて訛のある、ギリ／＼と勦走つた高い聲で、龜裂をいらせるやうに霧の中をちよこちよこ走り、玩弄物屋の婦の背後へ、ぬつと、鼠の中折を目深に、領首を覗いて、橙色の背廣を着、小造りなのが立つたと思ふと、

「大福餅、暖い！」

又疋走つた聲の下、一寸蹲む、と疾い事、筒服の膝をとんと揃へて、横から當つて、婦の前垂に附着くや否や、兩方の衣兜へ兩手を突込んで、四角い肩して、一ふり、ぐいと首を振ると、ぴんと反らした鼻の下の髻とともに、砂除けの素通し、ちよんぼりした可愛い目をくるりと遣つたが、ひよんな顔。

……と云ふものは、其の、

「……暖い!……」を機會に、行火の箱火鉢の蒲團の下へ、潛込みましたと早合點の膝小僧が、す

ぼりと氣が抜けて、二ツ、ちよこなんと揃つて、灯に照れたからである。

橙背廣の此の紳士は、通り掛りの一杯機嫌の素見客でも何でもない。冷かし數の子の數には漏れず、格子から降ると云ふ長い煙管に縁のある、煙草の脂留、新發明螺旋仕懸ニツケル製の、卷莨の吸口を賣る、氣輕な人物。

自から稱して技師と云ふ。

で、衆を立たせて、使用法を辯ずる時は、こんな輕々しい態度のものではない。

下目づかひに、晃々と眼鏡を光らせ、額で睨んで、帽子を目深に、然も歴々が忍びの體。冷々然として落着き澄まして、咳さへ高うはせず、其のニコチンの害を説いて、一吸の卷莨から生ずる多量の沈澱物を以て混濁した、恐るべき液體をアセチリンの蒼光に翳して、屹と試験管を示す時の如きは、何某の教授が理化學の講座へ立揚つた如く、風采四邊を拂ふ。

其處で、公衆は、唯僅に硝子の管へ煙草を吹込んで、びく／＼と遣ると水が濁るばかりだけれども、技師の態度と、其の口上のばき／＼とするのに、ニコチンの毒の恐るべきを知つて、戰慄に及んで、五割引が盛に賣れる。

露 肆  
なか／＼何うして、齒科散が試験薬を用ゐて、立合の口中黄色い齒から拭取つた口鹽から、立處に、黴菌を躍らして見せる處の比ではない。



よく賣れるから、益々得意で、澄まし返つて説明する。  
が、夜が稍深く、人影の薄く成つた憊うした時が、技師大得意の節で。今まで噓を堪へたやうに、むすくと身震ひを一つすると、固く成つて居た卓子の前から、早くもがらりと體を碎いて、飛上るやうに衝と腰を軽く、突然ひよいと隣のおでん屋へ入つて、煮込を一串引攫ふ。  
此奴を、フツと吹きながら、すべりと古道具屋の天窓を撫でるかと思ふと、次へ飛んで、あの涅槃に入つたやうな、風除葛籠をぐらぐらと揺ぶる。

八

爾時きやつくと高笑、靴をばかくと傍へ外れて、何の店と見當を着けるでも無く、脊を屈めて蹲つた婆さんの背後へ一寸踞んで、  
「寒いですね。」  
と聲を掛けて、トンと肩を叩いて遣つたもので。  
「きやつくと又笑うて、横歩行きにすらくく、で、居合はす、古女房の背をドンと啖はす。突然、年増の行火の中へ、諸膝を突込んで、けろりとして、娑婆を見物、と云ふ澄ました顔付で、當つて居る。」

露店中の愛嬌もので、總籬の柳縹さん。  
即ち又、其の傳で、大福暖いと、向う見ずに遣つた處、手遊屋の婦は、腰のまはりに火の氣が無いので、膝が露出しに大道へ、莫塵の薄霜に間拍子も無く並んだのである。  
橙色の柳縹子、氣の抜けた肩を窄めて、ト一つ、大きな達磨を眼鏡でざらり。  
婦は澄ましてフツと吹く……カタリ……  
はツと頤を引く間も無く、カタリと残らず落ちると、直ぐに、其のへりの赤い筒袖の細い雪で、一ツ一ツ拾つて並べる。  
「堪らんですね、寒いですね、」

と髯を捻つた。が、大きに照れた風が見える。  
斜達に之を視めて、前齒の金をニヤくと笑つたのは、總髪の大らかな頭に、黒の中山高を堅く嵌めた、色の赤い、額に畝々と筋のある、頬骨の高い、大顔の役人風。迫つた太い眉に、大い眼鏡で、胡麻鹽髯を貯へた、頤の尖つた、背のすんぐりと高いのが、緋の縮入羽織を長く着て、霜降のめりやすを太く着込んだ巖丈な腕を、客商賣とて袖口へ引込めた、其の手に一條の竹の鞭を取つて、バタと叩いて、三州は岡崎、備後は尾ノ道、肥後は熊本、刻煙草を指示す……  
「内務省は煙草專賣局、印紙御貼用濟。味は至極可えて、喫んで見た上で買ひなさい。大阪は安



井銀行、第三藏庫の擔保品。今度、同銀行藏掃除に就いて拂下げに相成つたを、當商會に於て一手販賣をする、抵當流れの安價な煙草ぢや。喫んで芳う、香味、口中に遍うして而して其の聊も脂が無い。私は痰持ぢやが、

と空咳を三ツばかり、小さくして、竹の鞭を袖へ引込め、

「此の煙草を用ゐるてから、頓と惱みを忘れた。がぢや、荒くとも脂がありとも、唯強いのを望むと云ふ人には決して此の煙草は向かぬぞ。香味あつて脂が無い、抵當流れの刻は何うぢや。」

と太い聲して、些と充血した大きな瞳をぎよりと遣る。其の風采、高利を借りた覺えがある

と、天窓から水を浴びさうなが、思ひの外、濃厚な柔和な君子で。

店の透いた時は、其處等の小兒をつかまへて、

「あ、然ぢやでの、」などと役人口調で、眼鏡の下に、一杯の皺を寄せて、髯の上を撫で下げく滑稽けた話をして喜ばせる。其の小父さんが、

「いや、若いもの。」

と云ふ顔色で、竹の鞭を、ト笏に取つて、尖を握つて捻向きながら、帽子の下に暗い額で、髯の白いに、金が顯な北叟笑。

附穂なさに振返つた技師は、これを知つて尙ほ照れた。

「今に御覽じろ。」

と遠灯の目ばたきをしながら、揃へた膝をむくくと揺つて、

「何て、寒いでせう、お、寒い。」

と金切聲を出して、ぐたりと左の肩へ寄凭る、……體の重量が、他愛ない、暖簾の相撲で、ふはりと外れて、ぐたりと膝の崩れる時、ぶるくと震へて、堅く成つたも道理こそ、半纏の上から觸つても知れた。

げつそり懷手をして一寸も出さない、すらりと下つた左の、其の袖は、何も支へぬ、婦は片手が無いのであつた。

九

最う此の時分には、其方此方で、徐々店を片附けはじめ。まだ九時些と廻つたばかりだけれども、師走の宵は、夏の頃の十二時過ぎより歸途を急ぐ。

露  
で、處々、張出しが除れる、傘が窄まる、其の上に冷い星が光を放つて、ふつくと洋燈が消える。突張りの白木の柱が、すくくと夜風に細つて、積んだ棚が、がたくと崩れる。其の中へ、炬燵が化けて歩行き出した體に、むつくりと、大きな風呂敷包を背負つた形が耀上る。消え残つ



た灯の前に、霜に焼けた脚が赤く見える。

中には荷車が迎に來る、自轉車を引出すのもある。年寄には孫、女房には其の亭主が、何の店にも一人二人、人數が殖えるのは、より／＼に家から片附けに來る手傳、……と其ればかりでは無い。思ひ／＼に氣の合つたのが、歸際の世間話、景氣の沙汰が主なるもので、

「相變らず不可ますまい、然う云つちや失禮ですが。」

「否、思つたより、昨夜よりは些と増ですよ。」

「又私どもと來た日にや、お話に成りません。」

「御多分には漏れませんな。」

「最う休まうかと思ひますがね、其でも出つけますとね、一晩でも何だか皆さんの顔を見ないぢや氣寂しくつて寝られませんか。……無駄と知りながら出て來ます、へい、油費えでさ。」

と一處に團まるから、何の店も敷物の色ばかりで、枯野に乾した襦袢の光景、七星の天暗くして、幹枝盤上に霜深し。

まだ突立つたまゝで、誰も人の立たぬ店の寂しい灯先に、長煙管を、と横に取つて細いぼろ切れを引掛けて、のろ／＼と取つたり引いたり、脂通しの針線に黒く畝つて搦むのが、恠る折から、齒磨屋の木蛇の運動より凄いのであつた。

時に、手遊屋の冷かに艶なのは、

「寒い。」と技師が寄凭つて、片手の無いのに慄然としたらしい其の途端に、吹矢筒を密を置いて、唯其だけ使ふ、右の手を、すつと内懐へ入れると、繻子の帯がきり／＼と動いた。其のまゝ、茄子の挫げたやうな、襷せたが、紫色の小さな懷爐を取つて、黙つて衝と技師の胸に差出したのである。

寒くば貸さう、と云ふのであらう。……

舉動の唐突な其の上に、又ちらりと見た、緋鹿子の筒袖の細いへりが、無い方の腕の切口に、べとりと血が染んだ時の狀を目前に浮べて、ぎよつとした。

何うやら、片手無い、其の切口が、茶袋の口を糸でしめたやうに想はれるのである。

「其には及ばんですよ、え、何の、御新姐。」と面咲つて我知らず口走つて、ニコチンの毒を説く時のやうな眞面目な態度に成つて、衣兜に手を突込んで、肩をもそ／＼と揺つて、筒服の膝を不狀に膨らましたなりで、のそりと立上つたが、忽ちキリ／＼とした聲を出した。

「嫁妻々々！」

露  
肆  
長提灯の新しい影で、すつすと、眞新しい足袋を照らして、紺地へ朱で、日の出を染めた、印半纏の揃衣を着たのが二十四五人、前途に松原があるやうに、背の其の日の出を揃へて、線路際



を静に練る……

結構さうなお爺さんの黒紋着、意地の悪さうな婆さんの黄色い襟も交つたが、男女合はせて十  
四五人、いづれも俣で、星も晴々と母衣を刎ねた、中に一臺、母衣を懸けたのが當の夜の縁女で  
あらう。

黒小袖の肩を圓く、但し引緊めるばかり兩袖で胸を抱いた、眞白な襟を長く、のめるやうに俯  
向いて、今は珍らしい、朱鷺色の角隠に花笄、櫛ばかりでも頭は重さう。ちらりと紅の透る、  
白襟を襲ねた端に、一筋キラ／＼と時計の黄金鎖が輝いた。

上が身を堅く花嫁の重いほど、乗せた車夫は始末の成らぬ容體なり。妙な處へ楫を極めて、曳  
据ゑるのが、がくりと成つて、ぐる／＼と磨骨の波を打つ。

十

露店の目は、言合はせたやうに、きよと／＼と夢に辿る、此の桃の下路を行くやうな行列に集  
まつた。

婦も一寸振向いて、(大道商人は、いづれも、電車を背後にして居る)蓬萊を額に飾つた、其の  
石のやうな姿を見たが、衝と向をかへて、其處へ出した懷爐に手を觸つて、上手に、片手でカチ

ンと開けて、熱と俯向いて、灰を吹きつつ、

「無駄だねえ。」

と清い聲、冷かなものであつた。

「弘法大師御夢想のお灸であすソ、利きますソ。」

と寢惚けたやうに云ふと齊しく、此も稼入を恍惚視めて、恰も其の前に立合はせた、つい居廻  
りで湯歸りらしい、島田の亂れた、濡手拭を下げた娘の裾へ、矢庭に一束の線香を押着けたのは、  
あるが中にも、幻のやうな坊様で。

つくねんとして、一人、影法師のやうに、びよろりとした黒袖の間伸びた被布を着て、白髪の  
毛入道に、ぐたりとした眞綿の帽子。扁平く、薄く、然も大ぶりな耳へ垂らして、環珠敷を掛け  
た、鼻の長い、頤のこけた、小鼻と目が窪んで、飛出した形の八の字眉。大きな口の下唇を反ら  
して、かツくりと抜衣紋。長々と力なげに手を伸ばして、かじかんだ膝を抱へて居たのが、フト  
思出した途端に、居合はせた娘の姿を、男とも女とも辨別へる隙なく、馴れてぐんなりと手の伸  
びるまゝに、細々と煙の立つ、其の線香を押着けたものであらう。

露 此の坊様は、人さへ見ると、向脛なり踵なり、肩なり背なり、燻ぼつた鼻紙を當てて、其の上  
から線香を押當てながら、



「おだゞ、おだゞ、だゞだだだゞ」と、齒の無い口でむぐぐと唱へて、  
 「それ、利くであしよ、此處で點ゑるは施行ぢやいの。艾入らずである。熱うもあすまいがの。  
 それ利くであしよ。利いたりや、利いたら、しよなくと消して置いて、又使ふであすり。それ  
 利くであしよ。」と嘗め廻す體に、足許なんぞじろく〜と見て商ふ。高野山秘法の名灸。  
 矢庭に長い手を伸ばされて、はつと後しざりをする、娘の駒下駄、靴やら冷飯やら、つい目が  
 疎いかして見分けも無い、退く端の棲を、ぐいと引いて、

「御夢想のお灸であすり、施行ぢやいの。」

と鯨が這ふやうに黒被布の背を乗出して、じり〜と灸を押着けたもの、堪らうか。

「あれえ、」

と叫んで、ついと退く、ト脛が白く、横町の暗に消えた。

坊様、眉も綿頭巾も、一緒くたに天を仰いで、長い顔で、きよとんとした。

「や、聊かお灸でしたね、きやツ、きやツ、」

と笑うて、技師は此を機會に、股鑑遠からず、と少しく窘んで、浮足の靴ポカボカ、ばら〜

と亂れた露店の暗い方を……

さて此處に、膾膈臍を嚙ぐ一漢子！

板の如くに硬い、黒の筒袖の長外套を、瘦せた身體に、爪尖まで引掛けて、耳のあたりに襟を  
 立てた。帽子は被らず、頭髮を蓬々と抓み棄てたが、目鼻立の凛々しい、頬は蹙れたが、屈強な  
 壯佼。

澁色の逞しき手に、赤錆ついた大出刃を不器用に引握つて、裸體の婦の胸中を開放して燻した  
 やうな、赤肉と黒の皮と、寸々に、血筋を膝つた中に、骨の薄く見える、やがて一抱もあらう……  
 ……頭と尾ごと、丸漬にした膾膈臍を三頭。縦に、横に、仰向けに、胴油紙の上に乗せた。

正面の肋のあたりを、庖丁の背でびた〜と叩いて、  
 「世間ではですわ、めつとせいはあるが、膾膈臍は無い、と云うたりするものがあるですが、め  
 つとせいにも膾膈臍にも、眞個のもんは少いですが。」

無骨な口で、

「船に乗つとるもんでもが……現在、膾膈臍を漁つた處で、其が膾膈臍、めつとせいと云ふ區別  
 は着かんもんで。」

世間で云ふめつとせいと云ふから雌でせう、勿論、雌もあれば、雄もあるですが。

孰が雌だか、雄だか、黒人にも分らんで、唯此の前齒を、

と云つて推重なつた中から、ぐいと、犬の顔のやうで眞黒なのを擡げると、陰干の臭が芬とし



て、内へ反つた、しやくんだやうな、霜柱の如き長い齒を、あぐりと剝く。

「此の前齒の處ウを、上下嚙合はせて、一寸の隙も無いのウを、雄や、へと云ふのが北國邊のものらしい」と云ふですが、一分一寸ですから、開いて居ても、塞いで居ても分らんのです。

私は辯舌は拙いですが、臙膂臙膂は確です。臙膂臙膂と云ふものは、矢鱈むたらにあるものではない。東京府下にも何十人賣るものがあるかは知らんですがね、矢鱈むたらあるもんか。」

と、何か然も不平に堪へず、向腹を立てたやうに言ひながら、大出刃の尖で、纖維を搦つて、一角の如く、薄くねつとりと肉を剝がすが、……遠洋漁業會社と記した、まだ油の新しい、黄色い長提灯の影にひくくくと動く。

其の紫がかつた黒いのを、若々しい口を尖らし、むしやくくと嚙んで、

「二頭がのは賣つて了うたですが、まだ一頭、腦味噌もあるですが。腦味噌は腦病に利くんですが、臙膂臙膂の效能は、誰でも知つて居る事と言ふがものはない。

疑はずにお買ひ下さい。まだ確な證據と云うたら、後脚の爪ですが、」

ト大様に視めて、出刃を逆手に、面倒臭い、一度に間に合はせう、と狙つて、するりと後脚を擡げる、藻搔いた形の、水搔の中に、空を擡んだ爪がある。

霜風は蠟燭をはたくと揺る、遠洋と書いた其の目標から、濛々と洋の氣が虚空に被さる。

里心が着くかして、寂しく二人ばかり立つた客が、あとしざりに成つて……やがて、はらくと急いで散つた。

出刃を落した時、赫と顔の色に赤味を帯びて、眞鍮の鈍豆煙管の、眞中を無手と握つて、絲切齒で嚙むが如く、引脚へて、

「うむ、」

と、何故か呻る。

處へ、ふはくと橙色が露はれた。脂留の例の技師で。

「何うですか、臙膂臙膂屋さん。」

「いや、」

と唯言つたばかり、不愛想。

技師は親しげに擦寄つて、

「昨夜は、飛んだ事でしたな……」

「お話に成りません。」

「一體何の事ですか、」

「何や云うて、彼や云うて、まるでお話しに成らんのですが。誰が何を見違へたやら、突然しら



築地兩國

べに來て、  
膾炙をっせいの中なかを搜さがすんでぞ、  
眞白まっしろな女をんなの片腕かたうでがあると云いうて。」「……



オルガンに合はせる讚美歌の勲所と云ふ、但し絲切齒を外れた聲で、

「エホバ、エホバ……」と一ツ小さな咳をして、大きな其の前髪の下から、對手を流眊と視つたのは、通言老嬢と云ふ、當代の大難物、臺の立つた大年増。首に捲いたヴェール、持物の蝙蝠傘、信玄袋、薄汚い白足袋に空氣草履、金の蒔繪櫛と名づくる前立ものに到るまで、近頃流行の小道具を、混雑に透間もなく袴々と身に鎧つたは天晴候。が、肥つた腰の緊り悪く、裏搔くばかり膝を開けて、緋の唐縮緬の凄まじさ。揺絲の紅も、恠くては長屋の洗濯である。……此の人、右の片手だけは、蝦蛄の剝身と云ふ指に、延のと、玉入のと、孰れも擬ものの指環二ツ。で、故と手袋は嵌めざりけり。

さて、乗合の、電車は築地兩國行。

お堀の松に眞蒼な三日月で、土手の柳は凜に白髪を亂す。が、電車の中は蒸すばかりの人の呼吸。丁度日の暮れ間際、其の立籠む事例に因つて一通りでない。それ、揉合ふ、押返す——其の

中で、説教を聞かされる——對手は、肥つた此の嬢の膝と、尖つた半外套の腋との間に、へし潰れたやうな古い烏打帽を、ぐしやくと耳まで被つて、頸に萌黄の風呂敷包を、ト掛けて、咽喉で結目を垂りとした、脊の低い十三四の小僧なのである。

何の因果か、のめすり込みさうに、頭を低れて、手首を脇の下へ、かじかまつた體で聞くのを、黄色い顔で覘込んで、

「……です、ね、エホバです、ね、エホバは神なり、又眞の智慧なりと言ひまして、ね、智慧でいらつしやる。眞正の、純粹の、結晶した。」

と句を切り、句を切り、拍子に掛つて、黒の信玄袋の端で、件の指をピリ／＼と弾いたり。

「混合のなア、い、（と引張つて）智慧、即ち其のものであります。かうして、です、ね、智慧を。……」

と云ふ時、三宅坂で混雑したので、又咳をして置いて、少時して、

「智慧をです、ね、求めるには何うしても神に便らなければ成りません、でせう。エホバは神なり、眞の智慧なりですから、ね、可うございますか。お前さん方の年紀では今、智慧を求むる、要する、欲する盛でせう。ですから其の智慧をです、ね、智慧を求むるのに、間違つた、迷の、汚れたものを求めては成りません。眞の智慧でなければ不可ませんよ。其の眞の智慧は、エホバの他にはな



いのです。可うございますか、ねえ。」

と頤を出して念を入れる。

「え、と、滅入つた、元氣のない聲は、眞俯向に成つた小僧が鳥打の裏に潛る。

「ねえ、分りましたか。」と最う一つ。

「へい。」と鼻を舐めたやうな返事をする。

嬢は、意を得たりと云ふ態度。此處で一寸、肌襦袢を二枚襲ねた、青黒い襟を扱いて、脂切つ

て、……其癖、食物の悪さうな顔を、正面に擡げて、乗合をづらりと視めた。

又乗合の方でも、居周圍でエホバの聲の些とでも届いた連中は、一同申合はせたやうに此の豫

言者の廂を見た。——彼等の或者は、故と横外方に仰向いて、或者は故らに引傾がり、或者は額

に皺寄せ、頤を撫で、目をぱちくりなどして聞いて居たが。

中に一人、縫れた島田に、平打の銀簪、年紀よりは色の質素な、黒縮緬の羽織を、ぞろりと、

……コオトなしで襟許の媚かしい、二十ばかりの姿の可いのが、紫の風呂敷包を、柔かに肱に掛

けて、雪の腕を提革に、薄が靡く夕日の袖口、ちら／＼揉まれながら、すらりと立つて、熱と耳

を澄ましたのが、此の時、横を向いて、婀娜に莞爾。

二

電車が二臺ばかり、ぱッぱッと光を吐いて来て擦違ふ。

崖は暗く、濛の霜は白かつた。

何分にも、先づ其の緋唐縮緬を、と乗合は思ふのに、嬢は彌が上に最一つ其の衣紋を繕ひ、

「其からですね、え、天國は隠れたる寶なり。」と呂の音で強く壓し、

「隠れたる寶なり……ですね。珠、黄金。」

と右手の其の指環に觸れつつ、指の節を膨らして、

「皆、しかく顯はれた目前ばかりの寶なんです。……眞の寶、隠れたる寶は天國なんです。天國

ですよ。けれども結構な其の寶は、唯今お話ししたですね。……エホバ、知つて居ませう、……神

様、天と地と……三位一體の神様の、其の智慧を拜借しないでは、私どもに分りやうがないので

す。

寶は誰でも欲しいです。隠れたる寶は尙ほ見たいです、ね、然うでせう。」

寒げな小僧が、聲を頸窪に滅入込ませ、

「へい。」



「ですもの、其ですから我がエホバに縋らねばなりません、神を頼まねば成りませんのよ。私どもはね、熱心に、其は一身を捧げて、神に使へ、神に學び、神を信じて居るんです。——神と言つて、偶像や、お札やなんか、そんな小兒だましの玩弄物とは違ふんです、エホバの神ですよ。お前さんもね、眞の智慧を授けたい、隠れたる寶を得たいと、——又思はないものはありませんね——ですから、然うお思ひでしたら、教を聞きにおいでなさい。小兒對手だつて、何だつて、忠實に、共に研究するのよ。……エホバの神の事ですもの。」

山の手の……教會でね、木村ひさ子とお聞きなさい、小使でも誰でも知つて居ますからね、私の内へ來ても宜しい。が、まあ、教會へおいでなさい。其の時話しますから、木村ひさ子ですよ、木村……」

と口で言ひながら、指の先で、信玄袋の縁縫ひの唐草の上へ、指で H. KIMURA と續けらるるに二度書いた。

草に縋つて、稍打傾くまで差覗いた、婀娜な島田なのは、睫毛の濃いのをぱつちりと、瞳を睜つて、分らぬ符牒に驚いた風が見えた。

乗合の中には、さてはエホバの智慧と云ふのは、羅馬字の事か、と思つたのが居る。

電車は蒼白い月の、櫻田門の停留場の、赤い灯を、血の流るゝが如く、颯と閃めき過ぎた。

「お、！」

と嬢が思出したやうに、

「お前さん、又何日と言はないで、私と一所に日比谷へおいでなさらんか。此の凄いやうな、清らかな月の光、保羅に（クオーバズ）と仰有つた時のやうな、神の靈光を拜んで、一所に祈禱を捧げませう、音楽堂へ行つて。若いね、牧師の方が待つて在らつしやるのよ。新しき御弟子を一人連れて行つたら、どんなにお喜びなさるでせう。神の導よ、……お前さんも幸福だわ、おいでなさい、え、おいでなさいよ。」

「へい、」と小僧は突のめるやうに叩頭をして、

「へい……又……」

「ではね、……教會で木村、宜しいね。」

「何だ、何だ。」

「拘賊だ、誰だ。」

「耶穌が拘られたんだ、時計だとよ。」

「あ、今下りた、——隠れたる寶ちやねえか。」

「顯はれたる禪だらう。」



と車内では哄と云ふ。  
 嬢は、夕刊の中を、慌てた挿畫のやうにくる／＼廻る。  
 築地兩國と書いた車掌臺の巻布の、其の築地とある文字の上へ、銀の平打を抜いて、人知れず一寸當てて、ト其のまゝ、ぐい、と鬢のほつれを搔きながら、押上る警官の肩の下を、鼻筋の通つた横顔で、島田の一を澄まして下りる、とくる／＼と風に捲かれながら、公園の入口で、振返つて、掲示標に並んで、月にすつくりと立つたと思ふと、人群集の外へ消えた。

## 三

「おや、小僧さん。」

「姉さん。」

と築地橋を渡らない、本願寺寄の左の袂で、墨繪のやうに落合つたのは、前刻の小僧と娘である。

其處におでん屋の荷もなかつた。

が、二人、遠い灯にも忍び合ふ風情で、鬢のほつれの白い頬がちら／＼するのと、黒い天窓が鼠の如く川を背後にちよろ／＼するのみ。

可憐い、優しい聲がひつそりと、

「よく、此處つて事が分つたわね。感心。」と頷くらしい。

氣競つた調子で、

「築地へ簪を橋に掛けりや、お前、分らねえでさ。其の位な事は分らねえで。」

「仕事は出来ないとお言のかい。」

「うむ。」

と云つたが、少し悄氣る。

「まあ、可かつたわね、危い事。」

「あの、エホ婆々、下りると直ぐだもの。あんなに早かあ氣が着くまいと思つて、すつかり油斷し了つたから、だらしがねえ。難有う、姉さん、へい。」と叩頭をする。

「其處は神様の智慧だとき、ほゝゝ。」

と蓮葉に笑つたが、忍び音で、

「兄さん、お前は何處だえ。」

「私あ深川です……へい、姉さんは。」

「つい、お隣さ。」



「あ、本所かい。」

「おや、洒落てるよ。」

と軽く、小僧の肩を弾いて、

「久しく？」

「え、否、まだ新米で。お説教を聞くやうな厄雜です。へい、姉さんは。」

「可哀相に、私や……ぢやないんだよ。でもまあ澤山は違はないね。」

今日はね、此でも暮のね、眞面目なお慕詣の歸途さ。善い事をしたか、悪い事をしたか、……

そりや……何だつけね、と……エホバの智慧でないから分らないけれど、まあ、お前さんの爲に

は成つたのね。だがね、堪忍しておくれ。預つて上げた、あの銀時計は打棄つて来てよ。

餘りお間だわ、あんなものは縁起が悪い。私もね、寒いのに御苦勞様な、出来心さ。あの厭味

つたらしい婆さんの對手は、どんな奴だらう。……冷かして遣らうと思つて、——盗られた、抜

かれたつて騒いでる隙に、一人で音楽堂へ出掛けたの、公園の。

錢のなささうな、ひよろついたハイカラが一人、空を睨んでるぢやないか。お月様も災難つち

やない。

澄まして挨拶をして遣るとね、誰方か、なんて色目を使ふから、隠れたる寶ですつて、然う言

つてさ、……餌も何にも要りやしない、ダボ鯨は直ぐに引懸つてブル／＼さ、お前。

息ばかり荒く成つて、脈の沈んだ情ないのを、ぶらり／＼と銀座まで、手巾の尖に振提げて歩

行いて来たがね、投げて遣る鳥も居ず、面倒くさく成つたから、大時計の下でお然らばさ。其の

時ね、生意氣な！地獄へなんか手出しをしないで、よく神様をお拜みよつて、銀時計を投げて遣

つた、發奮さ、……折角、お前を待たして置いて。」

「構やしません、何、銀なものか、ありやニツケルですよ、そんな奴が持つたんぢや私だつて汚

らはしい。」

「掏賊、……太い！ウ、ヌ。」

と唐突に、角の軒下から腕を伸ばして、娘の袖を引攔んだのは、銀座でまいたと云ふ青年の牧

師であつた。

其の手を拂つた、掌で、鼻から目へ、小僧が、ざらりと逆撫でに撫でたので、ハツクサメと手

を離す。

唯、カタリ下駄の音を立てた、と思ふと、築地橋の、あの欄干の上を、小刻みに、カタ／＼カ

タ、頸の風呂敷包が、霜夜の星へ、宙を飛ぶ、羽も生えぬに、這個！小天狗。

呆氣に取られて牧師が見る間に、梅の薫をほんのり残して、娘も柳に隠れたのである。



吉原新話



表二階の次の六疊、階子段の上り口、餘り高くない天井で、電燈を捻つてフツと消すと……居合はす十二三人が、皆影法師。

仲の町も水道尻に近い、蔦屋と云ふ引手茶屋で。間も無く大引けの鐵棒が廻らうと云ふ時分であつた。

閨のあつた年で、舊曆の月が後れた所爲か、陽氣が不順か、梅雨の上りが長引いて、七月の末だと云ふのに、疊も壁もじめ／＼する。

尤も此の日、雲は拭つて、むら／＼と切れたが、しかし眞個に霽つたのでは無いらしい。何うやら底にまだ雨氣がありさうで、悪く蒸す……生干の足袋に火熨斗を當てて穿くやうで、不氣味に暑い中に冷りとする。

氣候は兎に角、八疊の表座敷へ、人數が十人の上であるから、縁の障子は通し四枚とも宵の内から明放したが、夜櫻、仁和加の時とは違ふ、分けて近頃のさびれ方。仲の町でも此の大一座は

目に立つ處へ、淺間、端近、戶外へ人立ちは、嬉しがないのを知つて、家の姉御が氣を着けて、簾と云ふ處を、幕にした。

廂へ張つて、淺葱に紺の熨斗進上、朱鷺色鹿の子のふくろ字で、うめと云ふ名が一絞。紅の括紐、袴か何ぞ、間に合はせに、ト風入れに掲げたのが、横に流れて、地が縮緬の媚かしく、臙に颯と紅梅の友染を捌いたやうな。

此の名は數年前、まだ少くつて見番の札を引いたが、家の抱妓で人に知られた、梅次と云ふのに、何か催のあつた節、最眞の贈つた後幕が、染返しの搔卷にもならないで、長持の底に残つたのを、間に合はせに用ゐたのである。

端唄の題に出されたのも、十年近く以前であるから、見たばかりで、野路の樹とも垣根の枝とも、誰も氣の着いたものはなかつたが、初め座の定まつた處へ、お才と云ふ内の姉御が、お茶聞しめせ、と持つて出て、梅干も候ぞ。

「如何ですか、甘露梅。」

と、今めかしく註を入れたは、年紀の少い、學生も交つたためで。

「お珍らしくもありませんが、最う古いんですよ、私のやうに。」  
と笑ひながら、



「民さん、」

と、當夜の幹事の附添ひで居た、佐川民彌と云ふ、一雜誌の記者を、一寸見て、

「あの妓なんか、手傳つたのがまだ其のま、なんです。召あがれ。」と澄まして言ふ。

様子を知つた二三人が、ふと此で氣が着いた。而して、言合はせたやうに民彌を見た。

尤も、然うした年紀ではなし、今頃は最う左衛門で、女房の實の名も忘れて居るほどであるか

ら、民彌は何の氣も無ささうに、

「いや、御馳走。」

時に敷居の外の、其の長六疊の、成りたけ暗さうな壁の處へ、紅入友染の薄いお太鼓を押着け

て、小さく成つたが、顔の明い、眉の判然した、ふつくり結締に緋の角絞りで、柄も中形も大き

いが、お三輪と云つて今年が七、年よりはまだ仇氣ない、此のお才の娘分。吉野町邊の裁縫の師

匠へ行くのが、今日は特別、平時と違つて、途中の金貸の軒に居る、馴染の鸚鵡の前へも立たず

……黙つて奥山の活動寫眞へも外れないで、早めに歸つて来て、紫の包も解かずに、……

「道理で雨が霽つたよ。」

嬉々客設けの手傳ひした、其の――

二

お三輪が丁度、然うやつて晴がましさうに茶を注いで居た處。――甘露梅の今のを聞くと、は

つとしたらしく、顔を据ゑたが、拗ねたと云ふ身で土瓶をトン。

「才ちゃん。」

と背後からお才を呼んで、前垂の端はきり、としながら、袴の媚めく白い素足で、疊觸りを、

些と荒く、ふいと座を起つたものである。

待遇に二つ三つ、續けて話掛けて居たお才が、唐突に腰を折られて、

「あいよ。」

で、軽く衣紋を壓へ、瘦せた膝で振り返ると、娘は最う、肩のあたりまで、階子段に白地の中

形を沈めて居た。

「一寸、……と手繰つて言つたと思ふと、結締が最う階下へ。」

「何だい。」とお才は、いけぞんざい。階子段の欄干から俯向けに覗いたが、其處から目薬は注せ

なさうで、急いで降りた。

「何だねえ。」



「才ちゃんや。」

と段の下の六疊の、長火鉢の前に立つたまゝ、ぱつちりした目許と、可愛らしい口許で、引着けるやうにして、

「何だぢやないわ。お氣を着けなさいよ。梅次姉さんの事なんか言つて、兄さんが他の方に極が悪いわ。」

「うゝん。」と色氣の無い頷き方。

「然うだつて。まあ、可いやね。」

「可かない事よ……私は困つたふ。」

「何だねえ、高慢な。」

「高慢ぢやないわ。而して、先生と云ふものよ。」

「誰をさ。」

「皆さんをさ、先生とか、あの、貴方とか、然うぢやなくつて。誰方も身分のある方なのよ。」

「然うかねえ。」

「然うかぢやありませんよ。才ちゃんてば。……其をさ、民さんだの、お前はんだのつて……私  
は聞いて居てはらくするわ、お氣を注げなさいなね。」

「あゝ、然うだね、」

と納得はしたものの、まだ何だか、不心服らしい顔色で、

「だつて可いやね、皆さんが、お化の御連中なんだから。」

習慣で調子が高い、極内の話のつもりが、處々、どころでない。半ば以上は二階へ届く。

一同くすくすと笑つた。

民彌は苦笑したのである。

爾時、梅次の名も聞えたので、何時の間にか、縁の幕の假名の意味が、誰言ふとなく自然と通じて、投遣りな投返しに、中を結んだ、紅、淺葱の細い色さへ、床の間の籠に投込んだ、白い常夏の花とともに、ものは言はぬが談話の席へ、仄な俤に立つて居た。

が、電燈を消すと、忽ち鼠色の濃い雲が、ぱつと落ちて、廂から欄干を掛けて、引包んだやうに成つた。

夜も更けたり、座の趣は變つたのである。

豫て、恚うした時の心を得て、壁際に一臺、幾年にも、つひぞ使つた事はあるまい、艶の無い、くすぶつた燭臺の用意はしてあつたが、故と消したくらくらるで、蠟燭にも及ぶまい、と形だけでも持出さず——所帯構はぬのが、衣紋竹の替りにして、夏羽織をふはりと掛けて置いた人がある——



其のまゝに成つて居る。

灯無しで、どす暗い壁に附着いた件の形は、蝦蟆の口から吹出す霧が、むら／＼と其處で躊躇つたやうで、居合はす人数の姿より、羽織の方が人らしい。而して、……何處を漏れて来る燈の加減やら、絹の縞の袂を透いて、螢を一包にしたほどの、薄ら蒼い、ぶよ／＼とした取留の無い影が透く。

三

大方は其が、張出し幕の縫目を漏れて茫と座敷へ映るのであらう……と思ふ。欄干下の廂と擦れ擦れな戸外に、蒼白い瓦斯が一基、大門口から仲の町にづらりと並んだ中の、一番末の街燈がある。

時々光を、幅廣く逆しらして、潤と明るく成ると、燭臺に引掛けた羽織の袂が、すつと映る。

其のかはり、じつと洗んで暗く成ると、紺の縦縞が消々に成る。

座中は目で探つて、漸つと二人の膝、誰かの胸、別のまた頬のあたり、片袖などが、風で吹溜つたやうに、斷々に仄に見える。間を隔てたほど其れが却つて濃い、つい隣合つたなどは、眞暗で全然姿が無い。

偶と鼠色の長い影が、幕を斜違ひに翻々と傳はつたり……圓さ六尺餘りの大きな頭が、ぬいと、天井に被さりなどした。

「今、起ちなすつたのは魯智深さんだね。」

と主は分らず聲を懸ける。

「否、私は胡坐搔いて居ます、どつしりとな。」

と故と云ふ。……描ける花和尚宛然の大入道、此の人ばかりは太ッ腹の、あぶらぼてりで、宵からの大肌腕。絶えずはた／＼と鳴らす團扇づかひ、ぐいと、抱へて抜かないばかり、柱に、えいとこさで凭懸る、と疊半疊だぶ／＼と腰の周圍に隠れる形體。けれども有名な琴の師匠で、藝は嬉しい。紺地の素袍に、烏帽子を着けて、十三絃に端然と直ると、松の姿に霞が懸つて、琴爪の千鳥が啼く。

「天井を御覽なさい、變なものが通ります。」

「厭ですな」と優しい聲。

當夜、二人ばかり婦人も見えた。

これは、百物語をしたのである。——  
會を此處で開いたのは、故と引手茶屋を選んだ次第では無かつた。



「些と變つた處で、好事に過ぎると云ふ方もございませう。何しろ片寄り過ぎますんで。しかし實は席を極めるのに困りました。」

何しろ此の百物語……怪談の會に限つて、半夜は中途で不可ません。夜が更けるに従つて……と云ふのですから、御一味を下さる方も、豫て徹夜と云ふお覺悟です。處で、宵から一晚の註文で、いや、随分方々へ當つて見ました。

料理屋ぢや、のつけから對手に成らず、待合申すまでも無い、辭退。席貸をと思ひましたが、矢張り夜一夜ぢや引退るんです。第一、人數が二十人近くで、夜明しと來ては、成程、一寸何處と言つて當りが着きません。こりや旅籠屋だ、と考へました。

これなら大丈夫、と極めた事になると、何ういたして、まるで帳場で寄せつけません、無理もございませぬ。旅籠屋は人の寝る處を、起きて居て饒舌らうと云ふんです。傍が御迷惑をなさる、と此の方を關所破りに扱ひます、困りました。

寺方は一寸聞くと可いやうで、億劫ですし、教會へ持込めば叱られます。離れた處で寮なんぞ借りられない事もありませんが——此中には其の時も御一所で、様子を御存じの方もお見えに成ります、昨年の盆時分、向島の或別荘で、一會催した事があるんです。

飛んだ騒ぎで、其の筋に御心配を掛けたんです。多人數一室へ閉籠つて、徹夜で、密々と話をするのが、寂とした人通の無い、樹林の中ぢや、其の筈でせう。

お引受け申して、こりや思懸けない、と相應に苦勞をしました揚句、先づ……昔の懺悔をしますやうな取詰め方で、此處を頼んだのでございませぬ。

言譯を申すぢやありませんが、以前だとて、然して馴染も無い家が、快く承はつてくれました、何うやらお間に合はせませぬ事が出ました。

些と唐突に變つた詭へだもんですから、話の會だと言ひますと、  
(はあ、おはなの……)なんてな、此家の姉御が早合點で……  
と笑ひながら幹事が最初挨拶した、——其は、神田邊の澤岡と云ふ、雜貨店の好事な主人であつた。

四

連中には新聞記者も交つたり、文學者、美術家、彫刻家、音楽家、——また然うした商人もあり、久しく美學を研究して、近頃歐洲から歸朝した、子爵が一人。女性と云ふのも、世に聞えて、……家のお三輪は、婦人何々などの雜誌で、寫眞も見れば、名も讀んで知つた方。  
で、こんな場所は、何の見物にも、つい足踏をした事の無いのが多い。が、其の人たちも、誰



も會場が吉原と云ふのを厭はず、中には却つて土地に興味を持つて、到着帳に記いたのものもある。

「吉野橋で電車を下りますまでは無事だったんですよ。」

と其に就いて婦人の一人、濱谷蘭子が言出すと、可恐く氣の早いのが居て、

「え、何か出ましたかな。」

「まさか、」

と手巾を一すく口に當てて、臉をほんのりと笑顔に成つて、

「お化が貴下、わざ／＼迎ひに出はしませんよ。方角が分りませんもの。……交番がござんした

から、——伺ひますが、水道尻は何う参りませうかつて聞いたんです。巡查さんが眞面目な顔を

して、

（水道は其の四角の處にあります。）つて丁寧な教へられて、困つたんです。」

「水を飲みたくつて、其で尋ねたんだと思つたんでせうよ。」と其の連だつた最一人の、明座種

子が意氣な姿で、而して膝に手をきちんとして言ふ。

「私もはじめてです。兩側は其でも晝に描いたやうですな。」と岩木と云ふ洋畫家が應じた。

「御同然で、私は其でも、首尾よく間違へずに來たですよ。北廓だと云ふから、何でも北へ北へ

と見當を着けるつもりで、宅から磁石を用意に及んだものです。」と云ふ堀子爵が、ぞんざいな浴

衣がけの、ちよつきり結びの兵兒帯に搦んだ黄金鎖には、磁石が着いて居も何にもせぬ。

花和尚が其の諸膚脱の脇の下を、自分の手で擦るやうに、ぐいと緊めて腹を揺つた。

「そろ／＼怪談になりますわ。」

確か、其の時分であつた。壇の上口に氣勢がすると、潰しの島田が耀上つたやうに、欄干隠れ

に、少いのが密と覗込んで、

「あら、可厭だ。」

と一つ婀娜な聲を、晃乎と銀の平打に搦めて投込んだ、と思ふが疾いか、ばたくと階下へ驅

下りたが、

「嘘、居やしないわ。」と高い調子。

二言、三言、續いて花やかに笑つたのが聞えた。駒下駄の音が三つ四つ。

「覺えていらつしやいよ。」

「お喧しう……」

魯智深は、づか／＼と座を起つて、のそりと欄干に腹を持たせて、幕を透かして通を瞰下し、

「やあ、鮮麗なり。おらが姊さん三人ござる。」

「君、君、其の異形なのを空中へ顯すと、可哀相に目を廻すよ。」と言ひながら、一人が、下から



また差覗いた。

「家の娘かね、」

と子爵が訊く。差向ひに居た民彌が、

「否。」

「何です。」

「矢張り通り魔の類でせうな。」

「しかし、不意だから一寸驚きましたよ。」と其の洋畫家が……丁度俯向いて卷頁をつけて居た處、不意を食つた眼鏡が晃つく。

當夜の幹事が苦笑ひして、

「近所の若い妓どもです……御存じの立且形が一人、今夜來ます筈でしたが、急用で伊勢へ參つて缺席しました。階下で擔いだんでせう。密と覗きに……」

「道理こそ。」

「(あら可厭だ)は酷いな。」

五

「お、く、三人が手を曳ツこで歩行いて行きます……仲の町も人通りが少いなあ、何うぢやらう、景氣の悪い。ちらりほらりて軒行燈に影が映る、——海老屋の表は眞暗だ。

あ、揃つて大時計の前で立佇つた……いや三階で一寸お辭儀をするわ。薄暗い處へ朦朧と胸高な扱帯か何かで、寂しさうに露れたのが、悄乎と空から瞰下ろして居るらしい。」

と圓い腕を、欄干が挫げさうにのツしと支いて、魯智深の腹がだぶりと乗出す……

「何處だ、どれ、」

と向返る子爵の頭へ、さそくに、づんと身を返したが、其の割に氣の輕さ。突然見越入道で、蔽はれ掛つて、

「も、んがあ！はッはッはッ。」

「失禮、只今は、」

と、お三輪が湯を注しに來合はせて、特に婦人客の背後へ來て、極の悪さうに手を支いた。

「才ちゃん、わけが分らなくつて不可ません、藝者衆なんか二階へ上げて。」

と言も極つて含羞んだ、紅い手絡のしをらしさ。一人の婦人が斜めに振向き、手に持ったのを其のまゝに、撫子に映す扇の影。

「否。而して……些とお遊びなさいませ。」



「唯、あの、後に何うぞ。」

と嬉しさうに莞爾しながら、

「あの、明る過ぎましたら電燈をお消し下さいましな、燭臺を其處へ出して置きました。」

と幹事に言ふ。雜貨店主が、

「難有う、よくお心の着きます事で。」

「あら、可厭だ。……と蓮葉に成る。」

「二ツ、」

と一人高らかに呼はつた。……藝者のと、(可厭だ)が二度目、と云ふ意味だけれども、娘には  
氣が着かぬ。

「え？」

民彌が靜に振返つて、

「三輪ちゃんの年紀は二十かつて？」

「あら、可厭だ。」

「三ツ！」

「ぢや、三十かつてさ。」と雜貨店主が莞爾する。

「知らないわ。」

「まあ、可いわ、お話しなさい。」と花和尙、此の時、のさくと座に戻る。

「お茶を入れかへて参ります。」

と、最う階子の口。一寸留まつて、

「而して才ちゃんに、御馳走をさせませうね。兄さん、(吃驚したやうに)……あの、先生。」

「心得たもんですな。」と洋畫家が、煙草の濃い烟の中で。

「貴女方の御庇です……敬意を表して、よく小老實に働きますよ。」と民彌が婦人だちを見向いて  
云ふ。と二人が一所に、言合はせたやうに美しく莞爾して、

「何ういたしました。」

「いや、事實ですよ……家はこんなでも、裁縫に行く先方に、また、それ／＼朋だちがありました  
てな、それ引手茶屋の娘でも、大分工合が違つて來ました。何うして滅多に客の世話なぞするの  
ぢやありませんや。貴女がたの顔まで、丁と心得て居て、先刻も手前一寸階下へ立違ひますと、  
あちらが、濱谷さんで、此方が、明座さんでせう、なんて然う言ひます。

廓がはじめてだつてお言ひなされたのを聞いたと見えて、御見物なさいませんか、お供をして、  
其處等、御案内をませう、と手前に然う言つて居ましたつけ。」と團扇を構へて雜貨店主。



「然う、まあ……見て来ませうか。」  
「ねえ。」と顔を見合はせた。

子爵が頭を振りながら、  
「お止しなさい、お揃ひぢや、女郎が口惜しがるでせう、罪だ。」

六

「何故ですか。」

「新橋、柳橋と見えるでせう。」

「あら、可厭だ。」

「四つ、」

と今度は、魯智深が、透かさず指を立てて、づいと揚げた。

凡てが此の調子で、間へ二ツ三ツ、各自の怪談が挟まる中へ、木皿に割箸をざつくり揃へて、夜通しの其の用意が、恚うした連中に幕の内でもあるまい、と階下で氣を着けたか茶飯の結びにはんべんと菜のひたし。……或る大籠の寮が根岸にある、其の畠に造つたのを掘たてたと云ふはしりの新芋。これだけはお才が自慢で、すぢ、蒟蒻などと煮込みのおでんを井へ。目立たないや

うに一銚子附いて出ると、見ただけでも一口呑めさう……梅次の幕を正面へ、仲の町が夜の舞臺で、樂屋の中入と云つた様子で、下戸までもつい一口飲む。

八疊一杯赫と陽氣で、丁度其の時に、中びけの鐵棒が、近くから遠くへ、次第に幽かに成つて廻つたが、其の音の身に染みたは、浦里時代の事であらう、誰の胸へも響かぬ。……尤も話好きいなばかりが集つたから、其の方へ氣が入つて、酔つたものは一人も無い。が、何うして勢がこんなであるから、立續けに死靈、怨靈、生靈まで、まざりと顯れても、凄可恐いはまだな事——汐時に颯と支度を引いて、煙草盆の巻苜の吸殻が一度綺麗に片附く時、蚊遣香もばつたり消えて、疊の目も初夜過ぎの陰氣に白く光るのさへ、——寂しいとも思はれぬ。

（あら可厭だ）……其では無い。百萬遍の數取りのやうに、一同ぐるりと輪に成つて、じりりと膝を寄せると、千倉ヶ沖の海坊主、花和尚の大きな影が幕にはびこるのを張合ひにして、がんばり入道、すばい坊、鬼火、怪火、陰火の數々。月夜の白張、宙釣りの丸行燈、九本の蠟燭、四ツ目の提灯、蛇塚を走る稻妻、一軒家の棟を轉がる人魂、狼の口の弓張月、古戦場の火矢の幻。怨念は大鰻、古鯰、太岩魚、化ける鳥は鷺、山鳥。聲は梟、山伏の吹く貝、礫場の夜半の竹法螺、燒跡の呻吟聲。

蛇ヶ窪の非常汽笛、箒川の悲鳴などは、一座にまさしく聞いた人があつて、其の響も口から傳



はる。……按摩の白眼、癩坊の鼻、婆々の逆眉毛。氣味の悪いのは、三本指、一本脚。  
厠を覗く尼も出れば、藪に蹲む癖の下女も出た。米屋の繩暖簾を擦れ〜に消える蒼い女房、  
矢舁の膝ばかりで搔卷の上から壓す、顔の見えない番町のお嬢さん。干すと窄まる木場邊の澁蛇  
の目、死んだ頭の火事見舞は、ついおもだか屋にあつた事。品川沖の姪の影、眞乳の渡の朧蓑、  
鰻搔の蝮笊。

犬神、蛇を飼ふ婦、墓を抱いて寝る娘、鼈の首を集める坊主、狐憑、猿小僧、骨なし、……猫  
屋敷。

で、此の猫に就いて、座の一人が、嘗て其の家に飼つた三毛で、年久しく十四五年を経た牝が、  
置炬燵の上で長々と寝て、密と薄目を睜くと、其處にうと〜して居た老人の顔を伺つた、と思  
へば、張裂けるやうな大欠伸を一つして、

（お、お、辛度）と言つて、のさりと立つた。

話した發奮に、恰も此の八疊と次の長六疊との仕切が柱で、づつと壁で、壁と壁との間が階子  
段と向合せに櫃子窓のやうに見える、が、直ぐに隣家の車屋の屋根へ續いた物干。一跨ぎで出ら  
れる。……水道尻まで家續きだけれども、裏手、廂合が連るばかり、近間に一ツも明が見えぬ、  
陽氣な座敷に、其の窓ばかりが、はじめから妙に陰氣で、電燈の光も、いくらかつ、其處へ吸取

られさうな氣勢がして居た。

其の物干の上と思ふ處で……

七

「ゴロロロロ、」

と濁つた、太い、變に地響きのする聲がした、——不思議は無い。猫が鳴いた事は、誰の耳に  
も聞えたが、場合が場合で、一同が言合はせた如く、其の四角な、大きな、眞暗な穴の、遙かな  
底は、上野天王寺の森の黒雲が灰色の空に浸んで湧上る、窓を見た。

フト寂しい顔をしたのもあるし、苦笑ひをしたのもあり、中にはビクリと肩を動かした人もあ  
つた。

「三輪ちゃん、内の猫かい。」

民彌は、其の途端に、ひたと身を寄せたお三輪に訊ねた。……遠慮をしながら、成だけ此の男  
の傍に居て、先刻から人々の談話の、凄く可恐い處と云ふと、密と継り〜聞いて居たのである。

「否、内の猫は、此の間死にました。」

「死んだ？」



「え、何處の猫でせう……近所のは、皆たま(猫の名)のお友達で、私は聲を知つてゐるんですけど……可厭な聲ね。屹と野良猫よ。」

其と極つては、内所の飼猫でも、遊女の秘藏でも、遣手の懐兒でも、町内の三毛、斑でも、何の引手茶屋の娘の勢。お三輪は氣輕に衝と立つて、襟脚を白々と、結綿の赤い手絡を障子の棧へ浮出したやうに窓を覗いた。

「遁げてよ。最う居やしませんわ。」

一人の婦人が、はらくと後毛のか、つた顔で、

「姉さん。」

「はい、いと、呼ばれたのを嬉しさうな返事をする。」

「閉めていらつしやいな。」

で、蓮葉にびたり。

後に話合ふと、階下へ用達しになど、座を起つて通る時、其の窓の前へ行くと、希代にヒヤリとして風が冷い。處で、何心なく障子をスーツと閉めて行く、……歸りがけに見るとさりと開いて居る。が、誰も其處へ坐るのでは無いから、其のまゝにして座に戻る。又別人が立つ、矢張りぞつとするから閉めて行く、歸りがけには丁と開けてあつた。其を見た人は色々で、細目の時

もあり、七八分目の時もあり、開放の時もあつた、と言ふ。

却説、爾時までは、言つた如く、陽氣立つて、何が出て、ものが身に染むとまでには至らなかつたが、物語の猫が物干の聲に成つてから、各自言合はせたやうに、膝が固まつた。

時々灰吹の音も、一ツ鉦のやうにカーンと鳴つて、寂然と耳に着く。……

氣合が更まると、疊もくわつと廣くなつて、向合ひ、隣同士、ばらくと開けて、間が隔るやうに思はれるので、尙ほ犇々と額を寄せる。

「消さうか、」

「大人氣ないが面白い。」

此處で電燈が消えたのである。――

「案外身に染みて参りました。人數の多過ぎない所爲もありませう。故と灯を消したり、行燈に變へたりしますと、何うも些と趣向めいて、バツタリ機巧を遣るやうで一向潮が乗りません。

前の向島の大連の時で、其の経験がありますから、今夜は一番、明晃々とさして、何うせ顯れるものなら眞晝間おいでなさい、明白で可い、と皆さんとも申合せて居ましたつけ。

いや、恚う成ると、矢張り暗い方が配合が可うございます、身が入りませ、これから。」

と言ふ、幹事雜貨店主の冴えた聲が、キヤ／＼と刻込んで、響いて聞えて、聲を聞く内だけ、



其の鼻の隆い、瘦せて面長なのが薄ら蒼く、頬のげつそりと影の黒いのが、ぶよくとした出處の定かならぬ、他愛の無い明に映つて、一寸でも匂が切れると、はたと顔も見えぬほどに成つたのである。

八

灯は水道尻の其の瓦斯と、最う二ツ——一ツは、此の二階から斜違な、京町の向う角の大きな青樓の三階の、眞角一ツ目の小座敷の障子を二枚兩方へ明放した裡に、青い、が、べつとりした蚊帳を釣つて、行燈がある、其で。——夜目には縁も欄干も物色はれず、唯其の映出した處だけは、たとへば行燈の枠の剥げたのが、朱塗であらう……と思はれるほど定かに分る。……其處が灰明だけ、大空の雲の黒さが、此方に絞つた幕の上を、底知れぬ暗夜にする。……が、廓が寂れて、遠く衣紋坂あたりを一つ行く俤の音の、其も次第に近くは成らず、途中に電信の柱があると、母衣が凧、引掛りさうに便なく響が切れて行く光景なれば、のべの蝴蝶が飛びさうな媚かしさは無く、荒廢したる不夜城の壁の崩れから、菜島に成つた部屋が露出して、怪しげな朧月めく。其の行燈の枕許に、有らう？朱羅宇の長煙管が、蛇に成つて動きさうに、蓬々と、曠野に徜徉ふ夜の氣勢。地藏堂に釣つた紙帳より、却つて侘しき草の闇かな。

風の死んだ、寂とした夜で、恰も宙に擡げたやうな、蚊帳の其の裾が、そよりと戦ぐともしないのに、此の座の人の動くに連れて、屋の棟とともに、すつと浮いて上つたり、づつと行燈と一所に、沈んで下つたりする。

最う一つは同じ向側の、此は低い、幕の下に懸つて、眞暗な門へ、奥の方から幽かに明の漏れるのが、戸の格子の目も疎に映つて、灰色に軒下の土間を茫と這うて、白い暖簾の斷れたのを泥に塗らした趣がある。其と二つである。

其の家は、表をぶつと引込んだ處に、城の櫓のやうな屋根が、雲の中に陰氣に黒い。兩隣は引手茶屋で、其は既に、先刻中引けが過ぎる頃、伸上つて蔭を下ろしたり、仲の町の前後を見て戸を閉めたり、揃つて、家並は残らず音も無いこの夜更の空を、地に引く腰張の暗い板と成つた。時々、海老屋の大時計の面が、時間の筋を敲らして、幽な稻妻に閃めき出るのみ。二階で便る深夜の光は、瓦斯を合はせて、唯其の三つの灯と成る。

中の孰れかが、折々氣紛れの鳥影の映すやうに、飄然と幕へ附着いては、一同の姿を、種々に描き出す。……

時もありけれ、魯智深が、大なる挽臼の如き、五分刈頭を、天井にぐるりと廻して、  
「佐川さんや、」



と顔は見えず……其の天井の影が動く。話の切目で、咳の音も途絶えた時で、ひよいと見ると誰の目にも、上にぼんやりと映る、其の影が口を利くかと思はれる。従つて、聲もぐわつと太く渦巻く。

「變に静まりましたな、以て来いと云ふ間の時ぢや、何ぞお話し下さらんか。宵からまだ、貴下に限つて、一ツも凄いのが出ませんでな、所望ですわ。」

成程、民彌は聞くばかりで、まだ一題も話さなかつた。

「差當り心當りが無いものですから、」

と其の聲も暗さを迎つて、

「皆さんが實によく、種々な可恐いのを御存じです。……確にお聞きに成つたり、又現に逢つたり見たりなすつておいでになります。」

私は、又聞きに聞いたののだの、本で讀んだのぐらゐるな處で、其も拵へものらしいのが多いんですから、差出てお話しするほどのがありません。生憎……ツても可笑いんですが、ざらある人魂だつて、自分で見た事はありませんでね。怪い光物と言つては、鼠が脚へ出した鱈の切身が、臺所でぼたくと黄色く光つたのを見て吃驚したくらゐなものですよ。お話には成りません。けれども、嬉しがつて一人で聞かしてばかり頂いて居たんでは、餘り勝手過ぎます。申譯が無

いやうですから、詰らない事ですが、一つ、お話し申しませうか。

日の暮合ひに、今日、現に、此家へ参ります途中でした。」

九

「可恐い事、一寸、可恐くつて。」

と例の美しい若い聲が身近に聞えて、ぞつとするやうに袖を窄めた氣勢がある。

「私に附着いていらつしやい。」と蘭子が傍で、香水の優しい薫。

「否、下らないんですよ、」

と、慌てたやうに民彌は急いで斷つて、

「些と薄氣味でも悪いやうだと、御愛嬌に成るんだけれど……何にも彼にも、一向要領を得ないんです、……時にだね、三輪ちゃん。」

と些と更まつて呼んだ時に、皆が目を灌ぐと、何の灯か、佛壇に消されたやうなのが幽に入つて、スーと民彌の其の居直つた姿を映す。……此は生帷の五ツ紋に、白麻の襟を襲ねて、袴を着て居た。——恰も其の日、繋がる縁者の葬式を見送つて、其の脚で廻つたさうで、時節柄の禮服で宵から同じ着附けが、此の時際立つて、一人、舞臺へ出たやうに目に留まつた。麻は冷たい、



さつくりとして膚にも着かず、肩は凛々しく武張つたが、中背で瘦せたのが、薄ら寒さうな扮装、襟を引合はせて居るので物優しいのに、細面で色が白い。座中では男の中の第一年下の二十七で、少々しいのも氣の弱さうに見えるのが、今夜の會には打つてつけたやうな野邊送りの歸りと云ふ。

氣の所爲か、沈んで、悄れて見える處へ、打撞かつた其の冷い紋着で、水際の立つたのが、薄ら一人浮出したのであるから、今其の呼懸けたお三輪さへ、聲に應じて、結綿の綺麗な姿が、可恐さうな、可憐な風情で、並んで其處へ、呼出されたやうに、座上の胸に描かれた。

「附かん事を聞かぬ、何處か此の近所で、今夜あたりお産をしさうな人はあるまいか。」  
と妙な事を沈んで聞く。

「今夜……ですか。」とお三輪はきつぱり聞返す。

「……然うだね、今夜、と極まつた事も無いけれど、此頃には、然う云ふ家がありやしないかい。」

「嬰兒が生れる許？」

「然うさ、」

「此の近所、……然うね。」

せつかく聞かされたものを、あれば可いが、と思ふ容子で、しばらくして、

「無いわ、些と離れて居ては悪くつて、江戸町邊。」

「其處等にあるかい。」

と氣を入れる。

「無い事よ、——矢張り、とうつかりしたやうに澄まして言ふ。」

「何だい、詰らない。」

と民彌は低聲に笑を漏らした。

「一寸、階下へ行つて、才ちゃんに聞いて來ませうか。」

「……………」

「え、兄さん、」

と遣つたが、フト黙つて、

「私、聞いて來ませう、先生。」

「何、可い、其には及ばんのだよ。……否、少しね、心當りな事があるもんだから、そらね。」

と斜に成つて、俯向いて幕張の裾から透かした、ト酔覺のやうに、顔の色が蒼白い。

「向うに、暗く明の點いた家が一軒あるだらう……近所は皆閉つて居て。」

「はあ、お醫者様のならば、彼處は寮よ……」



「然うだ、公園近だね。彼處へ時々客では無い、町内の人らしいのが、引過ぎに成つても一寸一寸出たり入つたりするから、少し其の心當りの事もあるし、……何も夜中の人出入が、お産とは極らないけれど、其の事だね。もしかすると、然うではあるまいか、と思つたからさ。何だか餘り合點み過ぎたやうで妙だつたね。」

十

「其に何だか、明も陰氣だし、人の出入りも、ばたくして……病人でもありさうな様子だつたもんだから。」

と言つて、其の明を俯向いて見透かす、民彌の顔に又陰氣な影が映した。

「でもね、當りましたわ、先生、矢張り病人があるのよ。それで以て、寝ないで居るの、お通夜をして……」

「お通夜？」

と一人、縁に寄つた隅の方から、聲を懸けた人がある。

「あの……」

「夜伽ぢやないか。」と民彌が引取る。

「あ、然うよ。私は昨夜も、お通夜だつて然う言つて、才ちゃんに叱られました。……其の夜伽なのよ。」

「病人は……女郎衆かい。」

「然うぢやないの。」

とつい又ものいひが蓮葉に成つて、

「照吉さんです、知つてるでせう。」

民彌は何か曖昧な聲をして、

「私は知らないがね、」

けれども一座の多人數は、皆耳を欷てた。——彼は聞えた妓である——中には民彌の知らないと云ふ、其の譯をさへ、よく心得たものがある。其の梅次と照吉とは、待宵と後朝、と對に廓で唄はれた、仲の町の藝者であつた。

お三輪はサソクに心着いたか、急に聲も低くなつて、

「藝者です、今ぢや、あの、一番綺麗な人なんです、藝も可いの。可哀相だわ、大變に鹽梅が悪くつて。其だもんですから、内は角町の水菓子屋で、出て居るのは清川(引手茶屋)なんですけれど、何方も狭いし、其に、こんな處でせう、落着いて養生も出来ないからつて……此方でも大切



な姉さんだわ。ですから皆で心配して、海老屋でもしんせつに然う云つてね、四五日前から、寮で大事にして居るんですよ。」

「然うかい、些とも知らなかつた。」と民彌はうつかりしたやうに言ふ。

「夜伽をするんぢや、大分悪いな。」と子爵が向うから聲を懸けた。

「え、不可いんですつて、最うむづかしいの。」

とお三輪は口惜しさうに、打附けて言つたのである。

「何の病氣かね。」

と言ふ、魯智深の頭は、此の時も天井で大きく動いた。

「何んですか、性が些とも知れないんですつて。」

民彌は待構へてでも居たやうに、

「お醫師は廓のなんだらう、……然う言つちや悪いけれど。」

「否、立派な國手も綱曳でいらつしやつたんです。でもね、些とも分りませんとさ。而してね、

照吉さんが、病氣に成つた最初つから、何故ですか、最う丁と覺悟をして、清川を出て寮へ引移

るのにも、手廻りのものを、きちんと片付けて、此の春から記けるやうにしたつちや、威張つて

居た、小遣帳の、あの、蜜豆とした處なんか、棒を引いたんですつてね。オちゃんは然う言つて、

話して、笑ひながら、ほろ／＼涙を落すのよ。

何時煩つても、ごまかして薬をのんだ事のない人が、其の癖、あの、……今度ばかりは、搔卷

に凭懸つて居て、お猪口を頂いて飲んだわ。其が尙ほ心細いんだつて、皆然う云ふの。

私も、あの、手に持つて飲まして來ます。

(三輪ちゃん、然やうなら。)つて俯向くんです、……枕にこぼれて束ね切れないの、私はね、櫛

を抜いて密と解かしたのよ……雲脂なんか些とも無いの、する／＼綺麗ですわ、而して煩つてか

ら餘計に殖えたやうよ……髪ばかり長く成つて、段々命が縮むんだわねえ。——兄さん、

と、話に實が入るとつい忘れる。

「可哀相よ。而して、何時でも然うなの、見舞に行く毎に(然やうなら)……」

十一

「其は最う、きれいに斷念めたものなの、……而してね、幾日の何時頃に死ぬんだつて——言ふんですとさ、——其が延びたから今日は屹と、あれだつて、また幾日の何時頃だつて、何うしてでせう、死ぬのを待つて居るやうなの。」

ですからね、照吉さんののは、氣病だつて。其から、大事の人の生命に代つて身代に死ぬんです



つて。」

「身代り」と聞返した時、孰のか又明の加減で、民彌の帷子が薄く映つた。且つ其よりも、お三輪の手絡が、くつきりと燃ゆるやうに、聲も強い色に出て、

「え、」

と言ふ、目も睜られた氣勢である。

「此の方が怪談ぢや、」と魯智深が寂しい聲。堀子爵が居直つて、

「誰の身代りだな、情人のか。」

「あら、情人なら兄さんですわ、」

と臆せず……人見知をしない調子で、

「然うぢや無いの、照吉さんの弟さんの身代りに成つたんですつて。——弟さんはね、先生、自分でも隠してだし、照吉さんも成りたけ誰にも知らさないやうにして居るんだけど、こんな處の人のやうぢや無いの。」

學校へ通つて、學問をしてね、よく出来るのよ。而して、今ぢや、あの京都の大學へ行つて居るんです。卒業すれば立派な先生に成るんだわ、ねえ、先生。

姉さんも其ばかり楽しみにして、地道に稼いぢや、お金子を送つて居るんでせう。……え、

あの、

と心得たやうに、然も他愛の無ささうに、

「水菓子屋の方は、あれは照吉さんの母さんがはじめた店を、其の母さんが亡く成つて、姉弟二人ぼつちに成つて、しやうが無いもんですから、上州の方の遠い親類の人に來て貰つて、其が世話をするんですけれど、何うせ、あれだわ。田舎を打棄つて、こんな處へ來て暮さうつて人なんだから、人は好いけれども商賣は立行かないで、照吉さんには、あの、重荷に小附とかですつてさ。ですから、お金子でも何でも、皆姉さんがして、其でも楽しみにして居るんでせう。」

然うした處が、此の二三年、其の弟さんが、大變に弱く成つたの。困るわねえ。——試験が済めば最う卒業するのに、一昨年も去年も然うなのよ、今年も矢張り。續いて三年病氣をしたの。其もあの、随分大煩ひですわ、何時でも、どつと寝るんでせう。

去年の時は最う危ないつて、電報が來たもんですから、姉さんが無理をして京都へ行つたわ。二年續けて、彼地で煩らつたもんですから、今年の春休みには、是非お歸んなさいつて、姉さんも云つてあげるし、自分でも京都の寒さが不可いんだつて、久しぶりで歸つたんです。

水菓子屋の奥に居たもんですから、内へも來たわ。若旦那つて才ちゃんが言ふのよ。お父さんはね、お侍が浪人をしたのですつて、——石橋際に居て、寺子屋をして、御新造さんの方は、裁



縫を教へたんですつき、才ちゃんなんかの若い時分、お弟子よ。  
あとで、私立の小學校に成つて、内の梅次さんも、子供の内は上つてたんですき。お母さんの方は、私だつて知つてるわ。品の可い、背のすらりとした人よ。水菓子屋の御新造さんつて、皆が然う言つたの。

ですもの、照吉さんは藝者だけれど、弟さんは若旦那だわね。

また煩ひついたのよ、困るわねえ。

而して長い、どつと床に就いてさ。皆、お氣の毒だつて、矢張り今の、あの海老屋の寮で養生をして、同じ部屋だわ。まはり縁の突當りの、丸窓の付いた、池に向いた六疊よ。

照吉さんも家業があるでせう、だもんですから、一寸の隙も、夜の目も寝ないで、附つきりに看病して、其でも些とも快くならず、段々鹽梅が悪く成つて、花が散る頃だつたわ、お醫者様もね、もうね。」

と言ふ、些と切なさうな息づかひ。

十一

お三輪は疲れて、而して遺瀨なささうな聲をして、

「才ちゃんを呼んで來ませうか、私は上手に話させませんもの。」と言ふ、覺束ない娘の口から語る、照吉の身の上は、一層夜露に身に染みたのであつた。

「可いよ、三輪ちゃんで澤山だ。お話し、お話し、と雜貨店主、澤岡が激ました。

「え、最う些とだわ。——あの……其でお醫者様が手放したもんですから、照吉さんが一七日鹽斷して……最初からですもの、斷つものも外に無いの。而して願掛けをしたんですつて。何處かねえ、谷中の方です。遠くまで、朝ねえ、まだ夜の明けない内に通つたのよ。其のお庇で……屹と其のお庇だわ。今日にも明日にも、と云つた弟さんが、すつかり治つてね。夏のはじめに、でもまだ縮入を着たなりで、京都へ立つて行つたんです。

鹽斷をしたりなんかして、夜も寝なかつた看病疲れが出たんだつて、皆然う言つたの。すぐ後で、姉さんが病みついたんでせう。而して、其の今のやうな大病に成つたんでせう。

ですがね、つい二三日、照吉さんが、誰にも言はない事だけれどつて、然う云つて、内の才ちゃんに話したんですつて。——あの、其のね、谷中へ願掛けをした、満願、七日目よ、……一七日なんですもの。何時もお参りをして歸りがけに、しらりと夜の明ける時間なのが、其の朝は、まだ眞暗だつたんですとき。御堂を拜んで歸らうとすると、上の見上げるやうな杉の大木のは、茂つた中から、スーと音がして、ぱつたり足許へ落ちて來たものがあるの。常燈明の細い灯で、



「何う云ふ事で、其は、先づ……」

と唯、腕を拱く。

「え、」

「其の……近所にお産のありさうな處は無いかつて、何か、然う言つたやうな事から。」

「然うでしたね。」とばかりと答へる。

「起つたんですな、三輪ちゃんの話は。」

「お話しは、……貴下が其の今日途中で其の、何か、何うかなすつたと云ふ……其から

顔を上上げたが、民彌は何故かすくむやうに成つて、身體を堅く俯向いて其まで居た。

「は、」

「佐川さん、」

と幹事が口を開いて、

「時に、」

「弱つたな、……其は、」と一寸間を置いてから、子爵が呟いたばかりであつた。

「ねえ……」

と、蘭子と種子が言交はす。

「まあ、」

一座寂然した。

つて、え、皆さん。」

「一寸見ると、鳥なんですつて、死んだのだわねえ。最う水を浴びたやうに悚然として、何の鳥だ

かよくも見なかつたけれど、謎々よ、……解くと、弟は助からないつて事に成る……其の時は落

膽して、苔の生えた石燈籠につかまつて、少時泣きましたつて、姉さんがね、……其でも、一念

が届いて弟が助かつたんですから……思ひ置く事はありません、——とさ。

あ、屹と其ぢや、……其の時治らない弟さんの身代りに、自分がお約束をしたんだらう。其

だから、あ、やつて覺悟をして死んで行くのを待つておいでだ。事によつたら、月日なんかも、

其の時極めて頼んだのかも分らない、可哀相だ、つて才ちゃんも泣いて居ました。

而してね、今度の世は、妹に生れて来て甘えよう、私は甘えるものが無い。弟は可羨しい、あ

んな大きななりをして、私に甘つたれますもの。でも、其が可愛くつて殺され無い。前へ死ぬ方

がまだ増だ、あの子は男だから堪へるでせう、……後へ残つちや、私は婦で我慢が出来ないつて

言つたんですとさ。……一寸何うしませう。私、涙が出てよ。……

何うかして治らないものでせうか。誰方か、此の中に、お醫者様の豪い方はいらつしやらなく

つて、え、皆さん。」



「一向、詰らない、何、別に、」と可恐しく謙遜する。  
人々は促した。――

十三

「――氣が射したから、私は話すまい、と思つた。けれども、行懸りて、揉消すわけにも行かなかつたもんだから、其處で何だ。途中で見たものの事を饒舌つたが、」

と民彌は、西片町の其の住居で、安價い竈を背負つて立つ、所帶の相棒、即ち梅次に仔細を語る。……會のあつた明晩で、夏の日を、日が暮れてから漸と歸つたが、時候あたりで、一日寝て居たとも思はれる。顔色も悪く、氣も沈んで、太く疲れて居るらしかつた。

寒氣がするとして、茶の間の火鉢に對向ひで、

「はじめはそんな席へ持出すのに、餘り榮えな過ぎると思つたが、――先刻から言つた通り――三輪坊がしたお照さんの其の話を聞いてからは、自分だけかも知れないが、何とも言はれないほど胸が鬱いだよ。第一、三輪坊が、どんなにか可恐がるだらう、と思つてね。」

場所が谷中だと言ふんだらう、……私の出會つたのも矢張其處さ。――闇がり坂を通つた時だよ。」

「はあ、」と言つて、梅次は、團扇を下に、胸をすつと手を支いた。が、黒緇子の引掛け結びの帯のさがりを斜に迂る、指の白さも、團扇の色の水浅葱も、酒氣の無い、寂しい茶の間に涼し過ぎた。

民彌は寛ぎもしないで、端然としながら、

「昨日は、お葬式が後れてね、すっかり焼香の濟んだのが、六時些と廻つた時分。後で挨拶をしたり、……茶屋へ引揚げて施主たちに分れると、最う七時ぢやないか。」

會は夜あかしなだけけれど、ゆつくり話さうつて、幹事からの通知は七時遅からず。私にも何かの都合で、一足早く、承知した、と約束がしてある。……

久しぶりのお天氣だし、涼しい、紋着で散歩もかしなものだけれども、丁ど可い。廓まで歩行いて、と家を出る時には思つたんだが、時間が遅れたから、茶屋の角で直ぐに腕車を然う言つてね。

乗つてさ。出る、と最う、其處らで梟の聲がする。寂寥とした森の下を、墓所に附いて、薄暮合ひに蹴込が眞赤で、晃々輪が高く廻つた、と思ふと、早や坂だ。――切立てたやうな、あの闇がり坂、知つてたつけか。」

「根岸から天王寺へ抜ける、細い狭い、蔽被さつた處でせう、――近所でも芋坂の方だと、一寸



ちよいと通つて知つてますけれど、彼處は、然うね、唯た一度。可厭な處だわね、其處で何うかなすつたんですか。」

「然うさ、よく路傍の草の中に、揃へて駒下駄が脱いであつたり、上の雑樹の枝に蝙蝠傘がぶら下つて居たり、鐵道で死ぬものは、大概あの坂から摺込むつてね。手巾が一枚落ちて居ても悚然とする、と皆が言ふ處だよ。」

晝でも暗いのみだから、暮合も同じさ。別に夜中では無し、私は何にも思はなかつたんだが、極つて腕車から下りる處さ、坂の上で。あの急勾配だから。

下りるとね、車夫は唯た今乗せたばかりの處だらう、空車の氣前を見せて、一つ驅けで、顛巻の上へ梶棒を突上げる勢で、眞暗な坂へストンと摺込んだと思ふと、むつくり線路の眞中で躍り上つて、呀、と懸聲だ。其處はまだ、仄り明い、白っぽい番小屋の、蒼い灯を衝と切つて、根岸の宵の、螢のやうな水々した灯の中へ消込んだ。

蝙蝠のやうに飛ぶんだもの、離れ業と云つて可い速さなんだから、一人で少時突立つて見て居たがね、考へて見ると、面白くも何とも無いのさ。

足許だけ茫乎見える、黄昏の木の下闇を下り懸けた、暗さは暗いが、氣は晴々する。以前と違つて、其から行く、……吉原には、恩愛もなし、義理もなし、借もなし、見得外聞か

あるぢやなし……心配も苦勞も無い。叔母さんに貰つた仲の町の江戸繪を、葛籠から出して頼杖を支いて見るやうなもんだと思つて。」

#### 十四

「坂の途中で——左側の、」

と長火鉢の猫板を壓へて言ふ。

「樹の根が崩れた、じとくく濕つばい、赤土の色が蚯蚓でも團つたやうに見えた、其處にね。」

「え、」

と梅次は眉を蹙めた。

「大丈夫、蛇の話ぢや無い。」と此は元氣よく云つて、湯呑で一口。

「人が居たのさ。茫乎と小さく蹲んで。ト目に着くと可厭な臭氣がする、……地へ打坐つてでも居るかぐらる、ぐしやくと挫げたやうに揉潰した形で、暗いから判然せん。が、別に氣にも留めないで、つツと其の傍を通抜けようとして、ものの三足ばかり下りた處だつた。

(喃、喃)と言ふ。



雪駄直しだか、啞だか、何だか分らない。……聞えたばかり。無論、私を呼んだと思はないから、構はずに行かうとする。

(喃)と、今度は些とぼやけたが、大きな聲で、而して、

(袴着た殿い、喃)と呼懸ける、確かに私を呼んだんだ。何處の山家のものか知らんが、變な聲で、妙なもののいひさ。「袴着た」と言ふのか、「墓場来た」と言ふのか、どつちにしても「殿」は氣障だ。

が、確に呼留めたに相違無いから、

(俺か。)

(其よ)……と、氣に成る横柄な返事をして、もや／＼と背伸びをして立つた……らしい、頭を擡げたのか、腰を起てたのか、上下同じほどに胴中の見えたのは、いづれ大分の年紀らしい。

爺が、婆か、一寸見には分らなかつたが、手拭だらう、頭に恚う仇白い奴を疊んで載せた。其が顔に見えて、面は俯向けにしながら、杖を支いた影は映らぬ。

(殿、喃、何處へな。)

と、恚うなんだ。

私は黙つて視めたつけ。

熟と身動きもしないで、返事を待つて居るやうだからね、

(吉原へ。)

と綺麗に言つたが、さあ、以前なら、屹と然うは言はなかつたらう。其の空が薩張と晴々した心持だから、誰に憚る處も無い。をつけ晴れたのが、不思議に嬉しくもあり、又……幼い了簡だけれども、何か、自分でも立派に思つた。

(眞北ぢやな、あ、)

とびくりと頷いて、

(火の車で行かざるか。)

馬鹿にして居る、……此奴は高利貸か、烏金を貸す爺婆だらうと思つたよ。

と民彌は寂しさうなが莞爾した。

梅次が些と仰向くまで、眞顔で聞いて、

「眞個だわねえ。」

「いや、」

民彌は、思出したやうに、室の内を覗しながら、

「烏金……と言へば、其の爺婆は、荒縄で引括つて、烏の死んだのをぶら下げて居たのよ。」



梅次は胸を突かれたやうに、

「へい、」と云つて、又、淺葱の其の團扇の上へ、白い指。

「堪らない。幾日経つたんだか、べろ／＼に毛が剥けて、羽がぶら／＼と漸つと繋つて、地へ摺れて下つてさ、頭なんざ爛れたやうにべと／＼して居る、其の臭氣だよ。何とも言へず變に悪臭いのは、——奴の身體では無い。服装も汚くはないんだね、折目の附いたと言ひたいが、其よりか、皺の無いと言つた方が適い、坊さんか、尼のやうな、無地の、ぬべりとしたので居た。

まあ、其は後での事。

(何の車?……)と聞返した。

(森の暗さを、眞赤なものが、めいらめいら搦んで、車が飛んだでやいの。恐ろしや喃、活きながら鬼が曳くさを見るか、いや、のう殿。私は、此い、地板へ倒れうとしたがいの。……うふッ)と腮の震へたやうに、せ、ら笑つたやうだつけ、——は、あ……」

十五

「今の腕車に、私が乗つて居たのを知つて、車夫が空で驅下りた時、足の爪を轆かれたとか何か、因縁を着けて、端錢を強請るんであらうと思つた。」

然し言種が變だから、

(何の車?)と最う一度……故と聞返しながら振返ると、

(火の車)

と頭から、押冠せるやうに、いやに横柄に言つて、もさりと歩行いて寄る。

何故か、其の人を咒つたやうな舉動が、無體に癢に障つたらう。

(何の車?)と苛々として此方も引返した。

(火の車)

じり／＼と又寄つた。

(何の車?)

(火の車)

(火の車が何うした。)

と丁度寄合はせた時、少し口惜いやうにも思つて、突懸つて言つた、が、胸を壓へた。可厭な

其の臭氣つたら無いもの。

(私に貸さい、の、あのや、燃え搦まつた車で、逢魔ヶ時に、眞北へさして、くる／＼舞ひして行かざるは、少い身に可うないが、いや、の、殿、……私に貸さい。車借りて飛ばしたい、えらく



今日は足がなへたや、やれ、の、草臥れたいの、やれ〜)

と言つて、握拳で腰をたたくのが、突着けて、丁度私の胸の處……と云ふものは、あの、急な狭い坂を、奴は上の方に居るんだらう。其の上、よく見ると、尻を此方へ、向うむきに屈んで、何か言つて居る。

癩に棒打、喧嘩にも成らんでは無いか。

(何處へ行くんだい、而して)ツて聞いて見た。

(同じ處への)

(吉原か。)

(然ればい、其へ。)

と恚う言ふ。

(何しに行くんだね。)

(取揚げに行く事よ。)

あ、産婆か。道理で、と私は思った。今時そんなのは無いかも知れんが、昔の産婆さんにはこんな風なのが、よくあつた。何だか、薄氣味の悪いやうな、横柄で、傲慢で、人を舐めて、一切心得た様子をする、檀那寺の坊主、巫女などと同じ様子で、頼む人から一目置かれた、又本人

二目も三目も置かせる氣。昨日の其の時なんか、九目と云ふ應接です。

何故か、根性曲りの、邪慳な残酷なものやうに、……繪を見ても然うだらう、産婦が屏風の裡で、生死の境、恍惚と弱果てた傍に、禪がけの裾端折か何かで、ぐなりとした嬰兒を引摺んで、盥の上へぶら下げた處などは、腹を斷割つたと言はないばかり、意地くねの悪い姑の人相を、一人で引受けた、と言ふ風なものだつけ。

吉原へ行くと云ふ、彼處等ぢや、成程頼みさうな昔の産婆だ、と其の時、然う思つたから、……後で蔦屋の二階で、皆に話をする時も、フツとお三輪に、(何處かお産はあるか)つて聞いたんだ。

最う然う信じて居た。

でも、何だか、肝が起つて、じり〜してね、をかしく自分でも自棄に成つて、

(貸して遣らう、乗つといで。)

(柔順なものぢや、や、よう肯かしゃれたの……お〜)と云つて臀を動かす。

變なものをね、其の腰へ當てた手にぶら下げて居るぢやないか。——烏の死骸だ。

(何にする、そんなもの。)

(禁厭にする大事なものの、此が荷物ぢや、火の車に乗せませんが、やあ、殿。)



(堪らない! 臭くつて、)

と手巾へ唾を吐いて、

(車賃は拂つて置くよ。)

で、フイと分れたが、さあ、踏切を越すと、今の車は何處へ行つたか、其處に待つて居る筈のが、まるで分らない。似た奴どころか、又近所に、一臺も腕車が無かつた。……

變ぢやないか。」

## 十六

少時して、

「お三輪が話した、照吉が、京都の大學へ行つて弟の願懸けに行つて、堂の前で氣落した、……何處だか知らないが、谷中の邊で、杉の樹の高い處から鳥が落ちて死んだ、と言ふのを聞いた時、……何の鳥とも、照吉は、其までは見なかつたんださうだけれども、私は何だよ……」

思はず、心が、先刻の暗がり坂の中途へ行つて、其のをかきな婆々が、荒縄でぶら提げて居た、腐つた鳥の事を思つたんだ。照吉のも、同じ鳥ぢや無からうかと……其に、可なり大きな鳥だと、言ふし……否!」

梅次の其の顔色を見て、民彌は壓へるやうに、

「まさか、そんな事はあるまいが、唯其處へ考へが打撞つただけなんだよ。……」

だから、さあ、可厭な氣持だから、最う話さないで置きたかつたんだけれども、話しかけた事ぢやあるし、何うして、中途から辯舌で筋を引替へようと言ふ、器用なんぢや無い。まじく遣つた……尤も荒ツぼく……其でも、鳥の死骸を持つて居たつて、然う云ふと、皆が妙に氣にしたよ。

お三輪は、何も照吉のが鳥だとも何とも、自分で言つたのぢや無いから、別に其處までは氣を廻さなかつたと見えて、暗號に袖を引張らなかつた。最うね、可愛いんだ、——あ、可恐い、と思ふと、極つたやうに、私の袂を引張たつけ、緊乎と持つて——左の、此處ん處に坐つて居て、と猫板の下に成る、膝のあたりを熟と視た。……

「煙管?」

「あ、」

「上げませう。……」

と、トンと拂いて、

「あい。……何うしたんです、其から、可厭ね、何だか私は、」と袖を合はせる。